

HIKARU MUSEUM



www.h-am.jp

目次

1. コレクションから追う北大路魯山人の生涯と作品・・・・・・・・・・4
2. 中学校出前授業「光ミュージアム出張美術館」における日本画の画材の紹介についての事例報告・・16
3. 美濃の御物石器・・・・・・・・・・22

まえがき

これまで光ミュージアムでは、『光ミュージアム 研究紀要 自然科学』と『光ミュージアム 研究紀要 人文科学』を作成してまいりましたが、2023 年度よりそれらを統合して『光ミュージアム 研究紀要』として刊行いたします。

総合博物館として、掲載内容は、人文科学、自然科学、研究開発、教育普及や学校連携事業など多種多様にわたっています。

何卒、ご活用いただきますとともに、あわせてご指導とご批評をいただければ幸いです。

コレクションから追う北大路魯山人の生涯と作品

光ミュージアム 主任学芸員 今泉たまみ

令和5年（2023）が、北大路魯山人（1883～1959）の生誕140年に当たるのを記念し、当館では通年「特別展 北大路魯山人」を開催した。毎日曜・祝日に行った展示解説の内容を掲載し、当館のコレクションを通して魯山人の生涯と作品をここに紹介する。

出生 ～ 書家として立ち ～ 陶芸に開眼

明治16年（1883）、京都・上賀茂神社の社家に生まれた北大路魯山人（本名：房次郎）は、誕生前に父を亡くし、母も房次郎を出産後失踪。近所・親戚をたらい回しにされていた頃、負ぶわれて見た上賀茂神社の裏山の真っ赤な山ツツジが「自分はこれからこのような美しいものを、生涯追い求めていきたい」という願望になったと述懐している。木版師・福田家の養子になり、6歳にして炊事を買って出たところ、料理の腕前を褒められる。14歳で画家を志し、家業を手伝いながら、画材費を稼ぐために一字書のコンクールに応募、次々と受賞を重ねる。

実母が東京の男爵の家で奉公していることを知った房次郎は、母を訪ねると共に、書で一旗揚げようと上京。突然の来訪に驚いた母からは冷たくあしらわれるが、東京での生活を始める。数ヶ月後の明治37年（1904）11月、大日本書道展に出品した隷書「千字文」が1等2席となり、時の宮内大臣・田中光彰に買い上げられる。受賞式では隣席の受賞者から「君は父親の代理か？」と尋ねられたという。若干21歳での受賞であった。

これを機に母は一変して房次郎を頼るようになり、房次郎は版下書きや書道教室で生計を立てる。版下書きというのは印刷原稿用に絵や文字を書く仕事。これを学ぶため、房次郎は書家・岡本可亭（岡本太郎の祖父）に弟子入りしている。

大日本書道展への出品作は隷書「千字文」

千字文は、子供に漢字を教えたり、書の手本にする為に用いられた漢文の長詩である。6世紀、梁の武帝は王子たちの手習いの為、^{いんてつせき}殷鉄石に命じて、東晋の書家で書聖と呼ばれる王羲之（303～361）の漢字を千字集めた手本を作らせた。出来上がったものは単に千字がバラバラに並んだ状態だったので、武帝は当代随一の文章家・^{しゅうこうし}周興嗣（470頃～521）に「これを韻文になるようにせよ」と命じた。周興嗣は千字を用いた韻文を一晩で作ったが、苦心のために髪が真っ白になったと言われている。こうして作られた千字文は、韻文の美しさもさることながら文字の習いやすさから、中国はもとより日本においても、古くから手習いの手本として珍重された。また、歴代の能書家の多くはこの千字文を作品に残している。

母から「朝鮮にいる長男のもとへ連れて行ってほしい」と頼まれた房次郎は、母を連れて当時日本の統治下にあった朝鮮に渡る。20代の終わりに母親と暮らした朝鮮での2年間、房次郎は印刷局に勤めながら版下や上奏文（総督府が軍司令部に提出する意見書）を書き、篆刻を習うなどして書の研鑽を重ねる一方で、古陶磁（李朝の壺や茶碗）の魅力を知る。李朝の茶碗とは、本来同地では民衆の日用雑器としてつくられたが、「わび」の美意識に最もかなう品として日本の茶道具に用いられ、抹茶茶碗の最高位に置かれるようになったものである。

朝鮮から帰国した房次郎は、各地の豪商の食客となって扁額彫りや篆刻をしながら美術骨董に開眼。一方で美味・珍味を知り、舌を肥やす。近江、京都、鯖江、金沢、山代を放浪する旅は4年に渡った。

【房次郎が世話になった人々】

近江：河路豊吉（滋賀 長浜町 町会議員 文具屋・紙問屋の主人）

柴田源七（縮緬・ビロードの老舗、二十一銀行の頭取、竹内栖鳳の姻戚）

京都：内貴清兵衛（もとは近江商人、京都随一の名士）

※清兵衛の元で、食客の房次郎も包丁を握るようになる。

鯖江：窪田卜了軒（古美術商）

金沢：細野燕臺（煎茶人、書家）

：太田多吉（料亭・山の尾の住人）

加賀 山代：吉野治郎（温泉宿の主人）

：須田菁華（陶工）

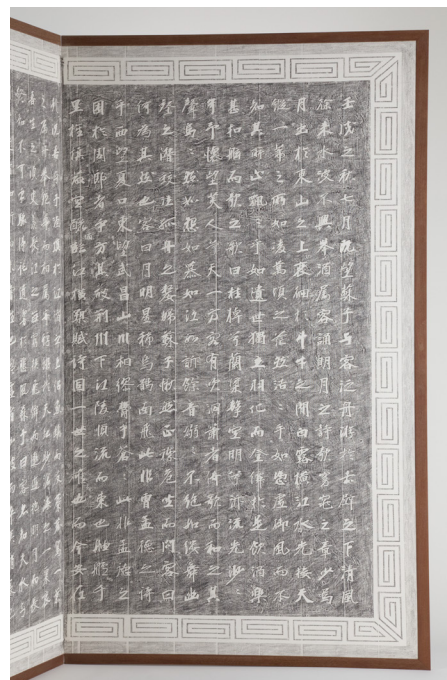
初代 須田菁華（1862～1927）は明治～大正時代の陶工で、明治 39 年（1906）、山代に菁華窯を築く。染付、祥瑞、呉須赤絵、古赤絵、古九谷などの倣古作品を得意とし、中でも菁華という号のとおり、菁華すなわち染付に秀でていた。大正 4 年（1915）、房次郎は初めて菁華窯を訪れ、ここで陶芸に開眼するが、須田菁華が師匠であったことは幸いだった。菁華は一つの流派でなく様々な陶芸のスタイルを自分のものにしており、轆轤は職人に任せていた。「轆轤を回すことから始めなさい」と言われていたら、房次郎は陶芸を手掛けなかったかもしれない。

近江の豪商・河路豊吉からの依頼によって制作されたのが「赤壁賦 板屏風」（京都現代美術館 何必館 所蔵）。宋時代の政治家で書家、詩人でもあった蘇軾（蘇東坡）の有名な詩文を彫刻したもの。魯山人は、群青と胡粉をまだらに塗った板に詩文を彫り込み、文字を白い胡粉でなぞって見事な板屏風に仕上げた。福田大観と名乗っていた頃の、書と篆刻の魅力にあふれた作品である。

「赤壁之賦 拓本屏風」



左隻



右隻

その「赤壁賦 板屏風」を拓本にしたのが本作「赤壁之賦 拓本屏風」。

赤壁賦とは、国政誹謗の罪を着せられて流罪人となった蘇軾が、流罪地を流れる長江に舟を浮かべ、赤壁（古戦場の名）にさしかかった際に詠んだ賦（韻文）で「前赤壁賦」と「後赤壁賦」とがある。「前赤壁賦」は、蘇軾が黄州で3度目の秋を迎えた元豊5年（1082）7月の作である。三国の英雄たちを偲び、自分が流人の身であることを嘆くが、大自然の中では誰もの生命がはかないもの、すなわち万物同一であることを悟り、舟遊びを楽しみ、憂いを忘れたという名文。

「前赤壁賦」（白文）

壬戌之秋

七月既望

蘇子與客泛舟

遊於赤壁之下

清風徐來

水波不興

舉酒屬客

誦明月之詩

歌窈窕之章

少焉

月出於東山之上

徘徊於鬥牛之間

白露橫江

水光接天

縱一葦之所如

凌萬頃之茫然

浩浩乎如馮虛御風

而不知其所止

飄飄乎如遺世獨立

羽化而登仙

於是飲酒樂甚

扣舷而歌之

歌曰

桂棹兮蘭將

擊空明兮溯流光

渺渺兮予懷

望美人兮天一方

客有吹洞簫者

倚歌而和之

其聲嗚嗚然

如怨如慕

（書き下し文）

壬戌の秋

七月既望

蘇子客と舟を泛べ

赤壁の下に遊ぶ

清風徐ろに來って

水波興らず

酒を舉げて客に屬め

明月の詩を誦し

窈窕の章を歌ふ

少焉にして

月東山の上に出で

鬥牛の間に徘徊す

白露江に横たはり

水光天に接す

一葦の如く所を縦にし

萬頃の茫然たるを凌ぐ

浩浩乎として虚に馮り風を御して

其の止る所を知らざるが如く

飄飄乎として世を遺（わす）れて獨り立ち

羽化して登仙するが如し

是に於て酒を飲んで楽しむこと甚しく

舷を叩って之を歌ふ

歌に曰く

桂の棹蘭の將

空明を撃って流光を溯る

渺渺たり予が懷ひ

美人を天の一方に望む

客に洞簫を吹く者有り

歌に倚って之に和す

其の聲嗚嗚然として

怨むが如く慕ふが如く

如泣如訴
餘音裊裊
不絕如縷
舞幽壑之潛蛟
泣孤舟之嫠婦

泣くが如く訴ふるが如し
餘音裊裊して
絶へざること縷の如し
幽壑の潛蛟を舞はしめ
孤舟の嫠婦を泣かしむ

蘇子愀然
正襟危坐
而問客曰
何為其然也
客曰
月明星稀
烏鵲南飛
此非曹孟德之詩乎
西望夏口
東望武昌
山川相繆
鬱乎蒼蒼
此非孟德之
困於周郎者乎
方其破荊州
下江陵
順流而東也
舳艫千里
旌旗蔽空
釀酒臨江
橫槊賦詩
固一世之雄也
而今安在哉

蘇子愀然として
襟を正して危坐し
客に問うて曰く
何為（なんすれ）そ其れ然るやと
客曰く
月明らかに星稀に
烏鵲南に飛ぶ
此れ曹孟德の詩にあらずや
西のかた夏口を望み
東のかた武昌を望めば
山川相ひ繆はり
鬱乎として蒼蒼たり
此れ孟德の
周郎に困められしところにあらずや
方に其れ荊州を破り
江陵を下り
流に順いて東するや
舳艫千里
旌旗空を蔽ふ
酒を釀して江に臨み
槊を横たへて詩を賦す
固より一世の雄なり
而して今安くにか在らんや

況吾與子
漁樵於江渚之上
侶魚蝦而友麋鹿
駕一葉之扁舟
舉匏樽以相屬
寄蜉蝣與天地
渺滄海之一粟
哀吾生之須臾
羨長江之無窮
挾飛仙以遨遊
抱明月而長終

況んや吾と子と
江渚の上に漁樵し
魚蝦を侶とし麋鹿を友とし
一葉の扁舟に駕し
匏樽を舉げて以て相ひ屬し
蜉蝣を天地に寄す
渺たること滄海の一粟なるにおいてをや
吾が生の須臾たるを哀しみ
長江の無窮なるを羨やむ
飛仙を挾んで以て遨遊し
明月を抱へて長へに終はらんこと

知不可乎驟得	驟には得べからざることを知り
托遺響於悲風	遺響を悲風に托さんと
蘇子曰	蘇子曰く
客亦知夫水與月乎	客も亦夫の水と月とを知れるや
逝者如斯	逝く者は斯くの如くなれども
而未嘗往也	而も未だ嘗て往かざるなり
盈虚者如彼	盈虚する者は彼の如くなれども
而卒莫消長也	而も卒に消長する莫きなり
蓋將自其變者而觀之	蓋し將た其の變ずる者より之を觀れば
而天地曾不能一瞬	天地も曾て一瞬なること能はず
自其不變者而觀之	其の變ぜざる者より之を觀れば
則物於我皆無盡也	則ち物と我と皆盡くこと無きなり
而又何羨乎	而るを又何をか羨みんや

且夫天地之間	且つ夫れ天地の間
物各有主	物各おの主有り
苟非吾之所有	苟そしも吾の所有に非ざれば
雖一毫而莫取	一毫と雖も取るなけれ
惟江上之清風	惟だ江上の清風と
與山間之明月	山間の明月と
耳得之而為聲	耳之を得て聲を為し
目遇之而成色	目之に遇ひて色を成す
取之無禁	之を取るも禁ずる無く
用之不竭	之を用うれども竭きず
是造物者之無盡藏也	是れ造物者の無盡藏にして
而吾與子之所共適	吾と子との共に適する所なり

客喜而笑	客喜んで笑ひ
洗盞更酌	盞を洗って更に酌ぐ
肴核既盡	肴核既に盡き
杯盤狼藉	杯盤狼藉たり
相與枕藉乎舟中	相ひともに舟中に枕藉して
不知東方之既白	東方の既に白むを知らず

大正甲寅孟春月

大觀学人書并刻

「染付詩文花入」



花入の表面に「後赤壁賦」からの引用で、山高月小 水落石出（山高くして月小さく 水落ちて石出づ）と書かれている。赤壁辺りの長江は、夏の満水期と冬の渇水期で十数メートルの水位差がある。「後赤壁賦」は冬 10 月の赤壁の夜遊を材としている。原文は「江流有聲 斷崖千尺 山高月小 水落石出」で「長江は音を立てて流れ、切り立つ崖は千尺もあろうか、山は高く聳え、山上にかかる月は小さく、水量は減り川底の石が現れて、あたりはすっかり冬景色である」の意。夏の頃と比べると「江も山もまるで見覚えのない景色だ」と驚き、天地が一体として存在していることを感得している。「水落石出」は、本来は川の水位が下がって川底の石が現れてくるという水枯れの冬景色の形容だが、転じて、隠されていた真相が露見することの譬えとしても用いられる。

「後赤壁賦」（一部）

（白文）

（書き下し文）

江流有聲

江流聲有り

斷岸千尺

斷崖千尺

山高月小

山高くして月小さく

水落石出

水落ちて石出づ

曾日月之幾何

曾ち日月の幾何ぞや

而江山不可復識矣

而るに江山復た識るべからず

このように、魯山人は創作姿勢の根本に「書」を置いている。彼はひと目見ただけで、王羲之、顔真卿、藤原佐理、小野道風、池大雅、良寛らの書をそっくりに見立てて書く事が出来たが、大陸から帰った房次郎の書風は、端正な書風を卒業して自由かつ大胆なものになっていた。

彼はその名を福田房次郎から福田鴨亭、福田大観、そして北大路姓に復帰してからは北大路魯卿、北大路魯山人と改めている。

扁額「青苔窠」



魯山人が豪商の食客となっていた頃の作であろう。「青苔窠」は、蘇軾（蘇東坡）の「百步洪二首」に登場する言葉。魯山人の漢学の知識は、金沢の細野燕臺（中国文学の大家）から得たものと考えられる。

陶芸家魯山人

大正9年(1920)、同郷の中村竹四郎と意気投合した魯山人は、東京・京橋で「大雅堂美術店」と称する美術商を始める。古陶の優品に料理を盛って客に振る舞ったところ人気を呼び、会員制食堂「美食倶楽部」が生まれる。1食2円(現在の価格で1万円強)で登録会員は200余名。会員が200名を超えとなると食器は古陶磁では間に合わない。魯山人は美食を追求する一方で「食器は料理の着物」と語り、料理を引き立たせるための焼き物作りを始める。

金沢の茶人で書家の^{ほそえんたい}細野燕臺の食客となっていた頃、魯山人は燕臺から紹介されて須田^{すだせいかう}菁華窯(九谷陶器会社)を訪れ、この時初めて絵付けを体験。その縁で、始めは須田^{みやながとうざんよう}菁華窯や京都の宮永東山窯の名だたる職人に白生地を作らせ、自身は絵付けだけをしていたが、やがて自ら轆轤も回すようになる。



「織部汁次」



「宗旦菊文鉢」



「絵瀬戸格子文台皿」

大正14年、「大雅堂美術店」が関東大震災で焼け、二人は赤坂の旧・華族会館を改築して高級料亭「星岡茶寮」を始める。経営者は竹四郎、魯山人は顧問兼料理長となった。「星岡茶寮」は皇居建築の余材で造られ、宴会のための大広間、田舎家を模した間、マントルピース付きの洋間もあった。料理人20人、仲居女中40人、その他の従業員10人を魯山人が仕切り、美食哲学を徹底的に追及した料理を、最高の食器に盛って振る舞った。魯山人41歳、竹四郎35歳の時のことである。

星岡茶寮の料金は、料理とサービス料で一人ざっと現代の10万円程だったが「星岡の会員にあらざば名士にあらざ」と言われ、公爵、政府高官、各国の大使・公使、財界人といった上流紳士が会員に名を連ねた。最盛期の会員総数は2千数百名に達し、連日大盛況だったという。

そのような中で魯山人は、作陶するにしても「自ら土を採って作るのでない限り到底自分の意に満たない」という結論に達した。そこで窯職人を呼び寄せ、北鎌倉に京風の登窯「^{せいこうよう}星岡窯」を築窯するのだが、星岡窯とは言っても単なる窯ではなく、山林や田畑を含む総面積6千6百余坪の、今日でいうテーマパークのようなものだった。まだ電気の来ていないこの地に、東京から電気さえ引いてしまった魯山人の行動力、パトロンたちにそれをさせてしまう人間力には驚かされる。そして茶寮で使用するため、染付、黄瀬戸、志野、織部、信楽、備前などの一級品を次々と生み出していく。1人前約50種類の器が、こうして魯山人によって作られたのである。

魯山人の古陶磁研究 通説を翻す発見

昭和5年(1930)4月、名古屋松坂屋での作陶展「魯山人陶磁器展観」の際、魯山人と当時星岡窯の技術主任であった陶工・荒川豊蔵は、古美術商から桃山時代の陶器「鼠志野香炉」と「志野筍絵茶碗」(関戸家所蔵)を見せてもらった。豊蔵は、瀬戸の土は白いのに、茶碗の糸底にこびりついていたハマコロ(焼成の際、釉薬がつかないよう底に受けとして置く土)が赤いのに気が付き、古志野は瀬戸で焼かれたとする通説に疑問を持った。そこで魯山人に暇をもらい、可児市に出かけて大萱、大平の古窯跡を調査した。そして奇遇にも古美術商から見せてもらった筍絵茶碗と同じ志野の陶片を発見し、志野が美濃で焼かれたことを確信するのである。

魯山人は荒川豊蔵の美濃古窯址発掘に対して、星岡窯(魯山人窯芸研究所)から金銭的援助を行い、

おおがやむたぼら

大萱牟田洞窯、窯下窯、大平窯、弥七田窯など 36 ヶ所を発掘調査した。人夫を雇って掘り出したみかん箱 32 箱分の陶片は星岡窯に送られ、星岡茶寮で名士を対象に志野発掘報告会が行われた。こうした発見により、桃山時代に全盛をきわめた黄瀬戸、志野、織部などが、瀬戸ではなく東美濃の窯で焼かれたことが判明したのである。

この歴史的発見は荒川豊蔵の功績とされているが、魯山人による後押しがあったからに他ならない。魯山人は「豊蔵はなあ、あれは君、コロンブスのアメリカ発見からいうとマストの上における見張人にすぎんのだ。コロンブスは俺なんやで」と語っている。

荒川豊蔵（1894 ～ 1985）は、岐阜県土岐郡多治見町（現在の多治見市）に生まれた。母方は多治見市高田で製陶業を営む陶祖・加藤与左衛門景一の直系で、桃山時代以来の美濃焼の陶工の血筋を受け継ぐ家柄である。上記の発見により豊蔵は魯山人の元を去り、笥絵の陶片を発見した可児市久々利大萱に、桃山時代の古窯を模した半地上式穴窯を築いて古志野の再現を目指した。そしてついに「荒川志野」と呼ばれる独自の境地を確立し、昭和 30 年（1955）、志野と瀬戸黒の重要無形文化財技術保持者（人間国宝）に認定されている。

魯山人の偉大さ

未だかつて、自作料理を盛るために陶芸の窯を開いた人はおらず、おそらく今後もないであろう。魯山人の偉大さは何といってもその点にある。そして次に手がけた焼き物の種類の多さである。



「染付赤絵葉味入」



「備前花入」



「タンパン黄瀬戸印花皿」



「赤絵汁次」



「伊賀釉平向」



「金襴手赤玉向付」



「織部蓋付田楽皿」

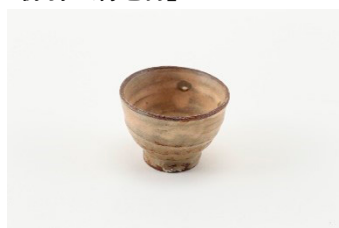


「信楽土徳利」

魯山人ほど古陶磁を研究し、広く古美術の心を汲み取り、それを自分のものにしてしまった芸術家は稀といえる。星岡窯には第1・第2参考館というのがあり、国内外のあらゆる古陶磁が陳列されていた。魯山人が金に糸目を付けずに買いまくった古美術である。彼は「古器観道楽」と称して毎日何時間もこれを眺め、それぞれの土質、形態、火度、釉薬、絵付、工匠たちの持ち味、各窯の特徴などをことごとく研究した。古美術骨董の世界では、所有することで初めて真価がわかるという。それが結果として彼の目を養う原動力になったが、こうした浪費と経営面を放漫化させたことで、昭和11年（1936）7月、魯山人は中村竹四郎から星岡茶寮を解雇されてしまう。

一方的に解雇された魯山人は、これを不当として竹四郎を告訴。民事訴訟が示談で収まり、資産問題が解決するのは9年後の昭和20年（1945）春のことであるが、その間魯山人は星岡窯に住み、作陶一本で生活した。

「粉引・刷毛目」



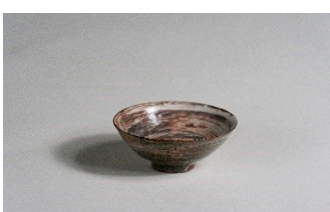
「ぐいのみ」



「刷毛目吉祥鉢」



「粉引汲出し」



「鶏龍山土刷毛目盃」

粉引^{こひき}や刷毛目といった作品は、李朝茶碗の写しになる。粉を吹いたような白釉を、刷毛目が残るように引いてある。昭和3年（1928）、魯山人は約1か月、朝鮮南部の古窯跡を視察旅行しているが、朝鮮で見て触れ、古陶磁を蒐集して得た知識が反映されている。

魯山人は初めて会った人間に喧嘩を吹っ掛ける癖があった。一種の挨拶のようなもので、喧嘩を売られないのは、よほど無視した相手だという。昭和4年、魯山人は初対面の加藤藤九郎と口論になった。「君は字が書けるかね」「いや、字は書けん」「字が書けなきゃ、やきものは出来んな」「それじゃ、字が書ければやきものはできるか」「ああできるとも」「そんなことは素人のたわごとじゃ」と。

「赤呉須黄瀬戸ぐい飲み」



そんな出会いの二人ではあったが、魯山人は昭和10年（1935）から、加藤唐九郎が星岡窯に築いてくれた瀬戸窯で本格的に志野、織部、黄瀬戸の作品を焼成するようになる。桃山時代に美濃で作られた「黄瀬戸」の再現は非常に難しかったが、魯山人はこれと格闘し、自分好みの信楽土を用いて新しい黄瀬戸を生み出した。昭和26年（1951）頃になって「最近ようやく、黄瀬戸が思いどおりに焼けるようになった」と語っている。

「染付福の字皿」



「中」



「小」

吉祥を表す「福」の字が、籠字（袋文字ともいう）で書かれている。籠字とは、文字の輪郭を書いた後に内部を埋める手法である。魯山人が記念品として何千枚と制作したものだが「同じものを2度作ることの嫌いな小生は、同じ福の字を書くことが出来ない」と語っている通り、1つとして同じ字はない。

中村竹四郎から解雇され、経済的に困窮している魯山人を救ったのは、こうした企業のための陶磁器であった。戦前からの覇員筋が、得意先に配る陶器や会社の記念品を大量に発注してくれたのである。とりわけ栄養食品会社「わかもと」の社長夫人は、魯山人を強力にサポートした。販売店の売りに応じて8円、10円、15円の「わかもと奥さま券」を発行し、これをためると桐箱入りの魯山人作品がもらえるという仕組みを考案。パンフレットには錚々たる芸術家、文化人、実業家が推薦文を寄せた。「わかもと」からの発注は群を抜いていて、魯山人は巨額を得ることができたという。

「信楽シノギ八寸」



この作品の制作方法は、まず庭にある鞍馬石の風化が作った凹凸に素地をのせ、叩き板で打ち付け、4辺を鋭く切って成形。次に表面の土を大きな蛤の殻などで、左から右へとリズムカルにえぐり取る、といったもので、魯山人はすさまじい迫力と集中力と、目にも留まらぬ早さで創作した。魯山人は恰幅も良かったが、購入した土地や建物、制作した器に至るまで、全てが大振りだった。「つばき鉢」「雲錦大鉢」は、どちらも直径が40cmを超える型破りの大作である。

「つばき鉢」



「雲錦大鉢」



茶寮追放後、魯山人の作陶に変化が見られる。支那趣味を脱却して日本的なものに目覚め、新しい境地の代表作が生み出されるのである。「つばき鉢」は尾形乾山の椿を、また「雲錦大鉢」は仁阿弥道八の色絵桜紅葉文大鉢を意識したものといわれるが、魯山人は単なる「写し」に終わらせていない。魯山人ならではの、迷いのない筆致が器面を覆っていて小気味好い。

また、日本料理の概念を打ち破り、料理に合う器を求め続けた魯山人は、中心になる料理を何か大きな器に盛ろうと考えた。星岡窯で「朝飯会」や「鉢の会」といった大勢を招いての食事会や酒宴を開いたが、百畳はある大広間で銘々好き勝手に料理を取ってもらうのに、大きい鉢ほど都合の良いものはなかった。鉢に盛られた料理は、土筆の佃煮とか防風の胡麻和えなどであったとか。

「備前土長方皿」



地味でざらついた器肌が食器には向かないとされていた備前の器に、光を当てたのが魯山人である。魯山人は前の晩から器にたっぷり水を含ませるといった心遣いを忘れなかった。

「銀三彩蟹彫文大平鉢」



「備前銀彩菖蒲絵組皿」



また、備前や志野の出来が良くなかった場合、魯山人は銀泥を施して2度焼きし、銀彩の器に作り変えてしまった。通常は焼き損じなど捨ててしまうものだが、失敗作を蘇生させたのである。

左の鉢は銀彩の渋い輝きの中に、藍や緑、黄色の水玉が飛んでいる。中央には彫線で蟹が描かれ、ここに真赤にゆで上がった蟹を盛れと言わんばかりである。右の皿は刷毛で銀彩が引かれ、彫線で菖蒲が描かれてい

る。金彩や銀彩は、焼き上がりはギラギラしていて魯山人の趣味とは異なっていたが、職人が「先生、こんなにキンキラしているのがいいのですか」と尋ねると「何を言っているか、これから10年20年経ってみろ」と笑って答えたという。

「漆塗葡萄文円卓」



戦時中、星岡窯のある北鎌倉山崎は横須賀海軍基地に近く、長時間にわたって煙を出す窯焚きが制限された。物資も不足し、昭和14年（1939）頃から敗戦までの間、魯山人はもっぱら書画、篆刻や漆芸をして過ごした。漆芸は山中塗（石川県山中町）や輪島塗（金沢市）の職人、名だたる蒔絵師らを招いて学び、碗や銘々皿、盆、膳や卓まで作っている。

「志野と織部」



「志野ドラ鉢」



「織部盃」



「織部草文直角皿」

魯山人は美濃陶の中でもとりわけ志野と織部を愛した。志野と織部を“同じ地に生まれ、育ち、死んでいった美しい夫婦”と捉えていた。そして織部については「器物の図案の奔放さ、自由さ、何と驚くべき種類の多さよ！」と感嘆している。

「総織部」



「織部鉢」



「櫛目織部釉長方皿」

魯山人の陶芸の中で最も多いのが織部で、これらは器全体に釉掛けする総織部という技法で作られている。魯山人は執念をもって古陶を追求し、織部の再現に成功した。魯山人の織部は、美濃の土ではなく粘りのある信楽の土を用いて作られているという。

昭和 30 年（1955）、文部技官の小山富士夫氏から「織部焼」の国指定重要無形文化財保持者（人間国宝）に認定するという話を打診された魯山人は「君のいうことはなんでも聞くが、それだけは断る。位階勲等は一切お断りします」といって拒否したという。

「紅志野草文ぐい飲み」



魯山人は「3つの年にオンブされて山間を歩いていたら、真赤なツツジが咲いていて『赤いなあ』とハラワタにしみて感じたんだが、この年になっても（その赤が）よう出んのじゃ」と語っている。魯山人にとって紅志野の追求は、故郷に向かうことだったに違いない。納得のいく紅志野が焼き上がるのは、昭和 20 年代後半のことであった。

最後に魯山人の偉大さをもう一つ挙げるならば、一人の作陶家が残した 20 万点余りという数の多さである。彼は午前中だけで数百点の絵付けをし、月に 1000 点前後、年平均 1 万点弱、30 年間で 20 万点以上という超人的なスピードで作陶した。手の速さはもちろんのこと、何をやっても人並み以上のことができる、いわゆる天才肌であった。「魯山人など上絵だけを描いている絵付師ではないか」と言う声もあったが、近くでその仕事を見た人は「魯山人は魔術師のようだった」と語っている。誰がやっても同じところまでは職人にさせ、頃合いを見て魯山人の手が入る。独自の手法を多く取り入れ、へらで切ったり、叩いたり、削ったり、手で押さえたりすると、素地が息づき躍動するのだという。

数の多さはギネス・ブックものであり、多くの陶芸品がちょっと無理をすれば庶民でも買えたことから、幅広い層に名前が知られ、人気を博した。つまりそれは芸術を平準化したということになるだろう。

かつて魯山人と口論した加藤藤九郎は、後に「世に“利休ごのみ”“織部ごのみ”といわれる世界を創り出した偉大な先人があったように、彼は“魯山人ごのみ”を演出するために作品を生み出したと言ってもいい」と語っている。当館のコレクションからも、その“魯山人ごのみ”が十分堪能できる。

【参考文献】

『知られざる魯山人』 山田 和著 文芸春秋

『毀誉褒貶 だから魯山人』 馬場啓一著 夏目書房新社

『魯山人の世界』 梶川芳友 林家清三 吉田耕三 他著 とんぼの本

『北大路魯山人 美と食を極めた芸術家』 公益財団法人足立美術館発行

『魯山人への手紙』 梶川芳友著

『別冊太陽 北大路魯山人』 平野雅章監修

中学校出前授業「光ミュージアム出張美術館」における 日本画の画材の紹介についての事例報告

光ミュージアム 学芸員 稲垣 幸祐

1. はじめに

光ミュージアムでは、2004 年より高山市内の小中学生に向けて「光ミュージアム出張美術館」という名称で出張授業・出前授業を行っている。その中で、中学校向けのプログラムでは、「本物の浮世絵版画と肉筆浮世絵を見る」「日本画の画材の紹介」の二本立てで行っている。著者は、この二つのうち「日本画の画材の紹介」について、2022 年より担当することになった。前任者の内容を元にしつつ生徒たちの反応を見ながら手探りで始まったが、学校の先生方からご助言をいただきながら三年の月日を重ね、その試行錯誤もある程度まとまった形を成してきた。そこで本稿では、この項目を紙面にまとめて報告したい。

2. 光ミュージアム出張美術館の概要

光ミュージアム出張美術館のプログラムは、小学生向けと中学生向けのものがある。
小学生向けでは、45 分の授業の中で以下のような流れで行っている。

- ・挨拶と導入（4 分）
- ・浮世絵の鑑賞と版画体験の 2 グループに分かれる（18 分×2 セット）

児童ができるだけ近くで作品を見られるように、また一人当たりの版画作製時間をできるだけ確保するため 2 グループに分けて、入れ替わる形をとっている。各パートの内容は以下の通りである。

- (1) 本物を自分の目で見るというテーマのもと、6 年生の社会科の教科書で取り上げられている歌川広重の東海道五十三次シリーズの中から年度ごとに選んだ 6 点を鑑賞し、浮世絵版画に何が描かれているのか、その当時の様子はどうだったのか、それを表すためにどのような版画の技術が使われていたのかを学ぶ
- (2) 多色摺りの木版画がどのようにできるのか学び、6 年生の社会科の教科書で取り上げられている葛飾北斎の富嶽三十六景の神奈川冲浪裏を 3 色摺りにリメイクしたものを使って多色摺りの版画の体験する

- ・児童の感想発表とまとめ（5 分）

一方、中学校向けでは、50分の授業の中では以下の様な流れである。

- ・挨拶と導入（4分）
- ・浮世絵の鑑賞と日本画の画材紹介の2グループに分かれる（21分×2セット）

生徒ができるだけ作品を近くで見られるように、また画材に触れられるように2グループに分けて、入れ替わる形をとっている。各パートの内容は以下の通りである。

(1) 小学校に引き続き本物を自分の目でみるというテーマのもと、中学の美術の教科書で取り上げられている歌川広重の名所江戸百景から6点、肉筆浮世絵1点の鑑賞を通し、広重の構図、ジャポニスム、版画の技術、浮世絵版画と肉筆浮世絵の違いや当時の風俗について学ぶ

(2) 日本人でありながらあまり知らない、日本画を描くために使われている画材について解説する

- ・生徒の感想発表とまとめ（4分）

3.「日本画の画材紹介」について

日本画の画材の紹介のパートでは主に筆、紙、絵の具、膠、金箔について紹介している。



3-1. 導入

まず、「日本画」という言葉について説明する。日本画という言葉自体は明治時代に造られた言葉である。明治の文明開化と共に美術の分野においても西洋画が入ってきた。その「西洋画」という言葉に対して、日本

で作られた絵画を一括りに「日本画」と呼ぶようになった。日本画という言葉自体は新しいものではあるが、そこに使われている技術、材料などは明治以前にあった浮世絵や大和絵など古くから使われていた。

3-2. 筆

日本画制作で主に使われる筆やそれに関連する道具の名前や用途などを紹介する。

筆の種類としては、彩色筆、平筆、面相筆、隈取筆、刷毛、連筆を紹介し、実際に触ってもらう。また筆と関連する道具として、筆を洗うための筆洗、携帯用筆記用具として使われた矢立などを紹介する。

3-3. 紙

和紙の紹介と、生徒たちが普段使っているノートやプリント用の紙（洋紙）との違いを比較する。

まず初めに和紙を配り、実際に触ってもらう。そして、これが何かと質問する。ついで普段使っているノートやプリントの紙にどのような呼び名（洋紙）があるかを尋ねてみる。それから和紙と洋紙の比較に入る。違いとしては、繊維の長さがあげられる。その特徴を見るため、生徒たちには和紙を光に透かして見てもらう。洋紙はパルプを原料としているので繊維は短く見た目にも繊維がわからないが、和紙の場合は繊維が長く、繊維同士が絡まっている様子がよく見えるものが多い。そこから生まれる和紙の特徴として、丈夫で長持ち、水に濡れても破れにくい、の3つが挙げられる。

そして、こういった和紙の特徴を生かして作られた世界で一番薄いといわれる紙を取り出し、触ってもらう。この和紙は1mの大きさで1gしかなく、レースのように透けて見える。これは文字を書くなどの通常の用途ではなく、古文書や絵画などの文化財の修復に使われる。しかも日本の文化財だけでなく、海外の美術品の修復にも使われている。

絵を描く上での紙のデメリットとして、吸水性が挙げられる。和紙に何も処理をしていない状態で絵の具を塗るとすぐに滲んでしまうし、絵の具が乾いた後も剥がれやすくなってしまふ。そうならないために、絵を描く前にはしみ止めのためのドーサ液というものを紙に塗る。これは膠液（膠液については絵の具の後に説明する）とミョウバンも混ぜたものである。

3-4. 絵の具

絵の具の種類を大きく分けると染料と顔料がある。染料は主に草花など植物由来のもので可溶性、顔料は主に岩石など鉱物由来のもので不溶性である。

染料としては藍、紅花などあるが、その代表的なものとして、藍色の原料を取り出して見てもらう。

次に顔料の説明では、材料として使われているラピスラズリ、孔雀石（マラカイト）、黒曜石、サンゴ、ホタテ貝を回覧し、触れてもらう。その際には材料を提示しながらこれが何かを当ててもらふクイズ形式で紹介する。ラピスラズリは1年生の美術の教科書の表紙に載っているフェルメールがよく使っていたことや当時は金と同じくらいの価値があったこと、孔雀石はクレオパトラがアイラインに使っていたこと、黒曜石は縄文時代の石器の材料だったこと、岩石以外にサンゴや貝殻なども使われていることを紹介する。ホタテ貝を取り出したところで胡粉の説明をする。白色の絵の具として使われる胡粉はホタテやカキの貝殻を材料にしたもので、質のいいものはイタボガキというカキの貝殻を5年ほど天日にさらして風化させ、不純物を取り除き、細かく砕いて出来上がる。胡粉は購入時には小さなダマ状になっているので乳鉢と乳棒を使って細かくしてから使う。

続いて、小瓶に入った天然岩絵の具のセットを取り上げる。天然岩絵の具のセットの中には、同じ色の名前でも粒子の細かさが違うものが入っている。粒子の細かさが違うと同じ色でも色の濃さが変わって見える。そこで同じ色の名前の付いた粒子の粗い小瓶と粒子の細かい小瓶を2つセットにして生徒たちに渡す。そして生徒たちに同じ名前の色なのになぜ色が違うのかを問う。そこで、実際に小瓶を振ったりしてもらって粒子の細かさの違いを見比べてもらう。粒子が粗いほど色が濃くなり、粒子が細かいほど色が薄く、白っぽくなる。粒子の細かさを变えることで1種類の石から10段階の色ができる。粒子の細かさを区別するための番号があり、5～13と「白（びゃく）」の10段階である。この番号が小さいほど粒子が粗く、番号が大きいほど粒子は細くなり、「白」と書かれたものは一番粒子が細かい状態のものである。

天然岩絵の具は、高価で希少な岩石が材料になっているものが多く、手に入れることが難しいものも多い。その代わりに新岩絵の具というガラスを使って造られたものがあることを紹介する。

天然岩絵の具にせよ、新岩絵の具にせよ顔料は不溶性、つまり細かくした石またはガラスの粒なので水に溶けない。この水に溶けない顔料を絵の具として使うにはどうするのか疑問を投げかけて、膠の説明に移る。

3-5. 膠

絵の具として使えるようにするための接着剤の役割を果たすものとして、日本画では膠を使う。見本として、名前を伏せて三千本膠と鹿の膠を配り、触ってもらいながら、これは何かを問いかける。これが膠であることを伝えてもピンとこない事が多いので、耳なじみのある言葉としてコラーゲンであることを伝える。ちなみにコラーゲンのコラーは膠、ゲンは元という意味だそうだ。

その後に膠の使い方を説明する。膠と水を膠鍋に入れて沸騰しないように温めて溶かし、膠液を作る。（膠液を作る方法としては湯煎で作る方法もある。）絵皿に絵の具を適量取り、絵の具がダメにならないように膠液を少しずつ注いで、指の腹を使って捏ねるように混ぜる。そして水を少しずついれて適当な濃度に仕上げていく。こうして出来上がった絵の具を使って絵を描いていく。

3-6. 金箔

日本画では金箔が使われることがある。その金箔がどのようにできるのかを説明する。

まず金箔を目の前で見せてその薄さを見てもらう。そしてどのくらいの薄さかを尋ねる。ここで見せている金箔の薄さはおよそ10000分の1mmである。

金箔の生産量の約99%が石川県金沢市である。また、金箔を作る際に充てる紙が油取り紙としても使われる。さらに、金箔の切れ端を砂子という道具に入れてふるうと金粉ができる。

以上が、日本画の画材の紹介内容である。

4. 授業での生徒の反応など

筆の紹介のパートでは、彩色筆、平筆、面相筆、刷毛は同じような形状のものを美術の絵画制作で使うので、生徒たちも「見たことある」といった反応だが、独特の形状をもつ連筆を取り上げると興味深そうに耳を傾け、触った際には毛のしなやかさを試したりしていた。

紙のパートでは、和紙を渡して「これは何か？」と尋ねてみると、たいていの場合は「和紙！」と元気よく

答えてくれるので、和紙の認知度は高いようである。ただ、あまり触れる機会はないので、和紙は昔の紙といったイメージを持っている生徒が多いが、日本だけでなく海外の文化財の保護に使われている事を知ると、「和紙ってすごいんだ」といった感想が出てくることが多く、生徒たちの興味を引いたようである。

絵の具のパートでは、生徒たちに「同じ名前の色なのになぜ色が違うのか？」を問うと、「採れる石によって色の濃さが違う」など石の個性差を挙げることが多くみられる。確かに石の個性差によって色の違いはあるが、同じ石でも粒子の細かさの違いで色が10段階も作られることは驚きのようだ。

また絵の具の材料となった鉱石の一つであるラピスラズリは、とあるゲームでアイテムとして登場するようで、ラピスラズリの名前を言うと「ゲームの中で出てくるやつだ!」と数名の生徒がしゃべりだし、本物が見られたことで親近感が湧くようである。

膠のパートで、「これは何か？」の問いに対してよくある回答としては、「飴」や「ゴム」などがある。やはり膠という言葉には馴染みはないが、コラーゲンと言い換えると殆どの生徒が首肯するような反応が見られた。

金箔のパートでは、実際に金箔や金粉を取り出すと注目度が一段と上がってくる様子が見受けられた。また金箔の薄さやそれを作る技術の高さも興味を引いたようだ

5. まとめ

光ミュージアム出張美術館の中学校バージョンでは、「本物の浮世絵版画と肉筆浮世絵を見る」「日本画の画材紹介」を行っている。本稿ではその中から「日本画の画材紹介」における出前授業の実践例を紹介し、授業を受けた生徒たちの反応を取り上げてみた。

日本人でありながらあまり触れる機会もなく、知らないことが多い日本画の画材ではあるが、知らないだけで興味がないわけではないことが生徒の反応からもわかる。特に絵の具の材料については、美術的要素だけでなく、理科の地質に関する視点や、社会科の歴史に関する観点からなど、別の教科と関連付けることができる。また授業の科目だけでなく、ゲームやアニメ、漫画などで（実物でなかったとしても）見聞きしているものの中に関連する事柄が見つかったりする。美術が得意ではないという生徒に対しても、そういった別のアプローチから入っていくことで、巡り巡って美術にも興味を持てる糸口になる可能性がある。また和紙や金箔などの話から、画材をきっかけとして日本の伝統工芸や文化遺産について話題を発展させることができる。

そして何よりも、言葉の説明だけは伝わりにくいことも、実際にモノを見たり触ったりしてもらうことで、解説の内容と体感したことが結びついて記憶に残りやすい様子が見られる。

「日本画」「画材」など日常生活の中ではあまり見聞きすることがない生徒のほうが圧倒的多数であるが、出張美術館をきっかけに、日本画で使われている画材が自分の身近なものと感じられていることを感じられたようである。

本物の作品に触れることとあわせて、それらがどのような材料を使って出来上がっているかを知ること、また普段の授業と違ったスタイルの授業を通して、生徒たちに新たな興味関心や様々な学びのアプローチを生むきっかけとなるのではないかな。

謝辞

出張美術館を実施させていただきました高山市内の各中学校の校長先生および教職員の方々に深く感謝いたします。

美術の先生の中には、日本画を専攻されていた方々もいらっしゃり、授業前後のお話や後日いただいた感想の中で、様々な助言をいただくことができました。それらのアドバイスによって、出張美術館の実施を重ねながらより良い授業内容を作り上げることができ、本稿をまとめるに至るほどの授業内容に充実させることができましたことに御礼申し上げます。

目次

美濃の御物石器

1. はじめに・・・・・・・・・・	23
2. 御物石器の定義と呼称・・・・・・・・	24
3. 美濃の御物石器解説・・・・・・・・	27
4. 異形石器について・・・・・・・・	37
5. 異形石棒・老いねずみ石冠について・・	38
6. 正誤表について・・・・・・・・	44
7. 考察・・・・・・・・	51
1. 分布について	
2. 文様について	
3. 石材について	
4. 長さ・重量について	
5. 底面形態について	
6. 被加熱・破碎個体について	
8. おわりに・・・・・・・・	56
9. 御物石器文献目録	

美濃の御物石器

吉朝則富

日本考古学協会 会員

日本旧石器学会 会員

飛騨考古学会 編集局

1.はじめに

御物石器の集成に関しては、2012年の筆者による『飛騨の御物石器』（光記念館研究紀要 自然科学 第7号 光ミュージアム）において、岐阜県飛騨地方出土資料の全てを集成し、加えて全国の出土数と型式を一覧表にて示した（文献200）。

その後の資料の追加にかかわる文献は、管見ながら見当らず発掘事例もない様である。また挿図のまちがいと縮尺のまちがいに関しては、正誤表を送付して訂正を行っている。

今回、美濃地方出土の御物石器について、その全容を把握し検討を行う必要性を感じ、未発表資料をふくめた51点の資料を集成し図化した。これは2012年の集成時には48点であったものに、新たに3点を確認、追加したことによる。

資料の多くは、過去の報告や市町村史において紹介されているが、なおいくつかの未図化資料や、神社に神宝として秘かに祀られている資料などもあって、全容を知るには至っていない。著名な資料については過去、小川栄一・林魁一・吉田富夫・天羽利夫・大参義一・橋本正・佐藤とき子・増子誠ににより紹介されてきたが、近年では特に沢田伊一郎による、飛騨考古学会機関紙『どこいし』誌上における大和町・美並町・白鳥町等の御物石器の紹介が特筆される（文献157・162・170・171・202）。

その後、飛騨考古学会による旧板取村・旧明方村方面での調査活動により新たな資料の増加を見ることとなり、この集成の契機となっている。地名や図の不備・混同、異形石器との判断基準等、様々な問題点も浮き彫りとなったが、ここに一応の統一見解としての『美濃の御物石器』集成を試みたいと思う。

極力正確な図化を試みたが、写真や略図で判断せざるを得ない資料もあり、今後の課題として期待を寄せるものである（註）。

縮尺については問題点も多々あり文中に示したが、一応9分の2（4分の1と5分の1の中間）に統一を試みた。御物石器の部位名称や型式分類は、橋本文献（第1～3図、文献90）に従った。ただ若干見解の異なる部分もあり、その都度提示を行っている。

研究史については、『飛騨の御物石器』に示した以上の変更はなく、これを参考にしていきたい。測図や写真については、各文献を参考とさせてもらった他、沢田文献よりいくつかを使用させていただいた。協力して下さった方々を巻末に明記して、感謝に換えたい。なお文中の敬称は多くを省略した。

（註）美濃の御物石器集成図版5は、略図あるいは写真で残された資料から採ったものであり、縮尺も不明である。

2. 御物石器の定義と呼称

ここで改めて御物石器の定義と呼称について触れておきたい。

御物石器の部位名称案は過去、天羽・大参・増子らにより示されているが、混乱を避けるため橋本による呼称法を紹介しておく（第1図）。御物石器を昆虫個体に擬した立場で命名したものであり、例えば天羽の上部、大参の前部は頭部、天羽の背面、増子の底面は腹面と呼称される。但し天羽の使用した旧荘川村出土御物石器のサンプル（第2図）は、渦巻文のある部分が実は肉薄で、橋本の規定によれば明らかに下部（腹部）にあたることを指摘しておいた。

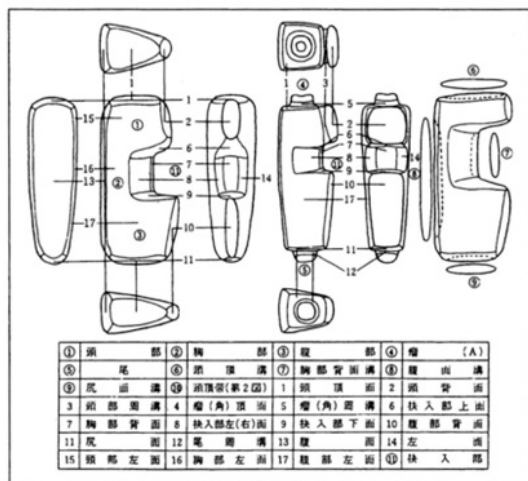
御物石器の大別は、腹面のあり方でまず決定される。天羽は御物石器の断面形を三角状・楕円形状・逆三角形状の3態に分けたが、断面を頭部に限定すると三角形状と逆三角形状の2者に統括できる。前者は飛驒・美濃地方を中心に分布しており、濃飛型、後者は北陸地方にその過半数が存在することから北陸型と呼称する。材質的には濃飛型には砂岩・安山岩を原材とし、北陸型は黒色粘板岩・緑色片岩を原材とするものが多い点が指摘されている。

次に御物石器頭部の形状から3つに中別できる。第1は甲冑の面包に似た形状をもつもので面包頭式と呼ぶ。第2は頭部に周溝を巡らせ重ね餅状となる偏平頭式、第3は細長く棒状に突出した頭部となる棒状頭式である。棒状頭式は濃飛型のみに存在する。

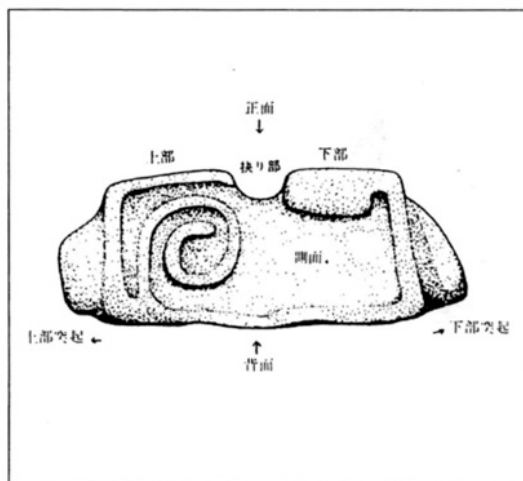
瘤・角・尾が付設されることによりさらに細別され、橋本は計19の型式を認定している（第3図）。ただ神村透が指摘する様に、濃飛型面包頭2式は唯一の長野県新床資料が北陸型であってこの型式が存在しない事も考えられる（文献136）。

この他、断面形が四角なもの存在や、底面の様相についての観察の問題など、検討に値する部分は多くあり、直接資料に触れての正確な情報が必要とされよう。

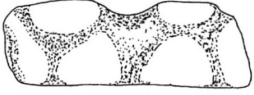
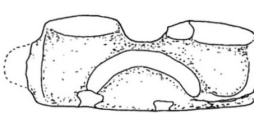
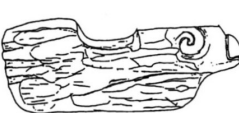
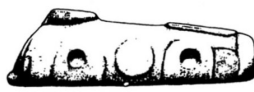
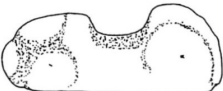
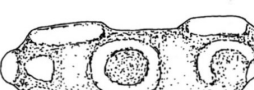
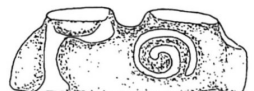
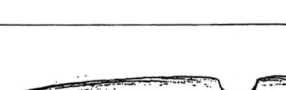
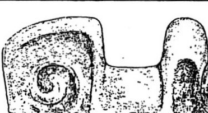
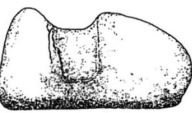
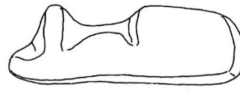
これらの点を踏まえつつ、資料の検討にあたることにする。



第1図 御物石器の呼称 (文献90)



第2図 御物石器各部の呼称 (文献63) 実際は右が上部。

濃飛型	扁平頭式	1式		濃飛型	面包頭式	1式	
		2式				2式?	
		3式			面包頭式 瘤付		
		4式					
		5式			偏平頭式		
	棒状頭式	1式		北陸型	面包頭式		
		2式			瘤付面包頭式	1式	
		3式				2式	
		4式				3式	
	棒状頭式 角付				面包頭式 角付		

第3図 御物石器分類図

第1表 美濃の御物石器集成表

	遺跡名	所在地	型式	長さ(推定長)	石質	文献
1	北屋敷	岐阜市佐野	濃飛型棒状頭3式	30.0cm	硬質砂岩	95・197
2	下島	中津川市福岡町高山	〃 偏平頭4式	33.0	砂岩	15・37・57・63・90
3	後田	〃 駒場	—	—	—	—
4	森腰	恵那市笠置町河合	〃 偏平頭2式	(35.0)	砂岩	11・37・57・90・162
5	木根	〃 串原町木根	〃 棒状頭3式	24.0	—	71・90・101
6	—	〃 岩村町	〃 角付棒状頭	31.5	ハンレイ岩	199
7	—	加茂郡富加町滝田	〃 角付棒状頭	(28.0)	安山岩	—
8	中之平	〃 白川町黒川	〃 面包頭1式	—	—	—
9	六軒	各務原市那加中野	北陸型瘤付面包頭1式	41.0	(粘板岩系)	23・37・39・71・90
10	長尾神社	関市板取町田口	濃飛型棒状頭1式	26.0	—	63・71・90・194
11	(白山神社)	〃 〃 中切	〃 偏平頭3式	—	—	—
12	(剣神社)	〃 〃 岩本	〃 角付棒状頭	25.0	砂岩	201
13	八王寺	〃 〃 九造	〃 面包頭式	38.5	砂岩	201
14	八王寺	〃 〃 九造	〃 棒状頭式	20.2	流紋岩	201
15	初音	郡上市八幡町初音	〃 棒状頭3式	(30.0)	—	22・37・71・90
16	川佐	〃 〃 旭川佐	〃 棒状頭2式	(30.0)	—	106・191
17	(八幡神社)	〃 〃 小野	〃 偏平頭4式?	(29.0)	(粘板岩系)	191
18	中山薬師	〃 大和町栗巣	〃 角付棒状頭	29.4	砂岩	78・90・106・170
19	中山薬師	〃 〃 栗巣	〃 偏平頭3式	33.8	(凝灰岩系)	78・106・170
20	中山薬師	〃 〃 栗巣	〃 偏平頭3式	26.2	(凝灰岩系)	78・106・170
21	中山薬師	〃 〃 栗巣	〃 棒状頭2式	27.1	(火山岩系)	78・106・170
22	(常広)	〃 〃 落部	〃 棒状頭2式	(25.0)	砂岩	78・90・106
23	長石谷	〃 〃 島	〃 瘤付面包頭式	35.4	(火山岩系)	90・106
24	落合	〃 和良町下土京	〃 偏平頭4式?	(24.0)	流紋岩	152・157
25	井ノ向	〃 〃 浜井場	〃 偏平頭2式	37.9	安山岩	106・152・157
26	大矢	〃 美並町大原	〃 偏平頭4式	34.9	玄武岩	65・71・88・90・171・195
27	赤池	〃 〃 山田	〃 面包頭2式	32.6	(凝灰岩系)	37・65・71・88・171・195
28	大粥	〃 〃 高砂	〃 偏平頭3式	37.4	(砂岩系)	14・22・37・65・90・171
29	大粥	〃 〃 高砂	〃 棒状頭3式	26.5	流紋岩	65・71・88・171
30	(新田)	〃 〃 大原新田	〃 偏平頭3式?	18.5	(火山岩系)	88
31	(石亀新田)	〃 〃 大原石亀新田	〃 棒状頭式	—	(凝灰岩系)	88
32	(白山神社)	〃 高鷲町鷲見	—	—	—	106
33	安久良	〃 白鳥町越佐	北陸型面包頭式	30.0	砂岩	79・90・106・192・196
34	前田	〃 〃 前谷	濃飛型面包頭1式	30.3	(火山岩系)	32・37・66・71・79・90・190・192
35	前田	〃 〃 前谷	〃 面包頭1式	(28.0)	(砂岩系)	32・66・79・90
36	松本	〃 〃 六ノ里	〃 瘤付面包頭式	(28.0)	砂岩	—
37	田口	〃 明宝町気良	〃 偏平頭4式	(24.0)	—	198
38	田口	〃 〃 気良	〃 偏平頭4式?	(31.0)	砂岩	198
39	田口	〃 〃 気良	〃 棒状頭2式?	(25.0)	—	160
40	(白山神社)	〃 〃 西気良	〃 棒状頭3式?	—	—	198
41	森本	〃 〃 小川下岩切	〃 棒状頭2式	(21.0)	(砂岩系)	198
42	—	〃 〃 小川	〃 偏平頭1式	(29.0)	—	22・37・71・90・191
43	—	〃 〃 小川	〃 偏平頭3式?	(28.0)	砂岩	22・37・71・90
44	—	〃 〃 小川	〃 面包頭1式	—	(花崗岩?)	22・71
45	(店町)	〃 〃 畑佐	〃 棒状頭3式	(22.0)	(花崗岩?)	—
46	—	〃 〃 大谷	〃 偏平頭3式	(27.0)	砂岩	—
47	—	〃 明宝町	〃 偏平頭3式	29.0	(凝灰岩系)	—
48	—	〃 明宝町	〃 棒状頭3式	(22.0)	砂岩	—
49	—	〃 明宝町	〃 偏平頭3式	(27.0)	砂岩	—
50	いんべ	揖斐郡藤橋村門八石谷	北陸型面包頭(1式?)	—	粘板岩	156
51	前田	郡上郡白鳥町前谷前田	偏平頭式?	—	—	—

3. 美濃の御物石器解説

1. 昭和 55 年の岐阜市埋蔵文化財展パンフレットに解説があり、53 年岐阜市佐野地区土地改良工事現場にて、石刀と共に発見されたとある。頭部側面に 4 個の円形突起が作り出され、他にあまり例を見ない。底面は平坦で安定性があり、全体を敲打で仕上げている。長さ 30.0cm、高さ 13.3cm、厚さ 8.2cm、硬質砂岩製である。
2. 昭和 3 年の林魁一報告（文献 15）に「恵那郡福岡村より出土した」との文献が敲矢であるが昭和 13 年の報告（文献 37）では何故か「諸岡村高山」となっている。現在の福岡町高山下嶋が正しい地名であろう。紅村弘（文献 57）によれば、大正 10 年の開墾によって多数の縄文時代遺物が出土し、高山小学校に保存されていた。勝坂から安行 2 式まで時期は広いが、他に四頭石斧・独鋤石（挟入石斧）・石刀等も発見されているとある。頭部周溝が目立たず瘤・尾がつく偏平頭 4 式に分類され、頭部に円形の凹みがつく。底面はほぼ平坦で、紅村は後期の所産であろうとしている。長さ 33.0cm、高さ 16.3cm、厚さ 5.5cm、砂岩質とされる。
3. 『瑞浪市史』に中津川市後田（駒場）において御物石器出土の記載があるとされるが未確認。後田遺跡は 3 地点に分かれ、局部磨製石鏃も出土している（紅村）。
4. 山本栄一報告（文献 11）にあり、他に石棒・石槍等が出土している。林文献（37）では笠智村土木とあるが、正しくは現笠置町河合区道木字森腰である。林は猪の変形と見立てている。『岐阜県史』P150 の図はスケールが間違っているが、約 35cm の大型品である。隆帯により円文・半円文が施され、頭部の周溝が深く尾がつく偏平頭 2 式は希少な例である。底面は平坦、砂岩質とされる。
5. 県史（71）に記載されるが出典は不明である。『東海の縄文時代展』パンフレット（文献 101）には、写真と共に「木根地区所有」とある。腹部上端を欠失し、底面は平坦であるがやや反りをみせている。腹部と頭部には下方からの 2 条と 1 条の浅い挟りが入る。約 24cm の寸法は県史の図に拠った。
6. 橋詰文献（159）に測図があり、岩村町歴史資料館が所蔵する。橋詰氏からの手紙によれば、胴ヶ平あるいは塔ヶ根遺跡からの昭和初期の発見とされ、斑レイ岩とある。滑らかな頭部を有するシンプルな作りで、自然礫を利用して最少の加工を施した感がある。わずかに背面溝の痕跡が残り底面は平坦である。一部破損。長さ 31.5cm、高さ 10.0cm、厚さ 9.5cm。
7. 平成 9 年 4 月 29 日、津保川左岸において東山熙氏が拾得し、県博に寄贈したと坂口学芸員からの手紙がある。やはり 6 と同様の自然礫を活用した様相がうかがわれ、腹部に自然面が残り底面も自然面で少し凹凸がある。安山岩系の石材で長さは推定 28cm 位、遺跡地図からすると井高遺跡の可能性が高い。
8. 田口省吾氏所有で頭部端を欠く。出典不明、略図のみ。白川町黒河（川）中之平には岩出遺跡がある。
9. 林 1932（文献 23）他に報じられ、吉田（39）により再び詳細な図と考察が与えられた。昭和 8 年頃、飛行場工事箇所から西本政登氏により発見されたとある。他に石剣・石斧等が出土している。黒色の石で長さ 41cm は最大級である。肉彫風に輪郭をとり、頭部に瘤状突起、底面は少し反りをみせ断面は逆三角形の北陸型である。高さ・厚さともに 9cm。吉田は型式分類案としての a-2 類に分類し、祖形の 1 つと考えた。そして何かを模倣したものとして、大野雲外のマキリ説を受けて着装刀剣の模倣と結論づけたいきさつがある。
10. 渡辺（194）に文献、県史（71）に写真がある。県史では長尾神社、『遺跡地図』（1976 年）では長屋神社となっているが長屋であろう。田口八王子遺跡にて発見され、長屋忠義氏をへて渡辺彦治氏に所蔵されたとある。天羽（63）にも田口として地図上に示される。腹部に十字形の沈刻があり、頭部に瘤、尻面にわずかに尾が付く。長さ 26cm は橋本の図から割り出したものである。
11. 板取町長水寺住職山本氏及び佐藤とき子氏より伺った、中切白山神社所蔵のもの。写真のみあるが大きさ等は不明。瘤・尾が付く偏平頭 3 式の優品である。

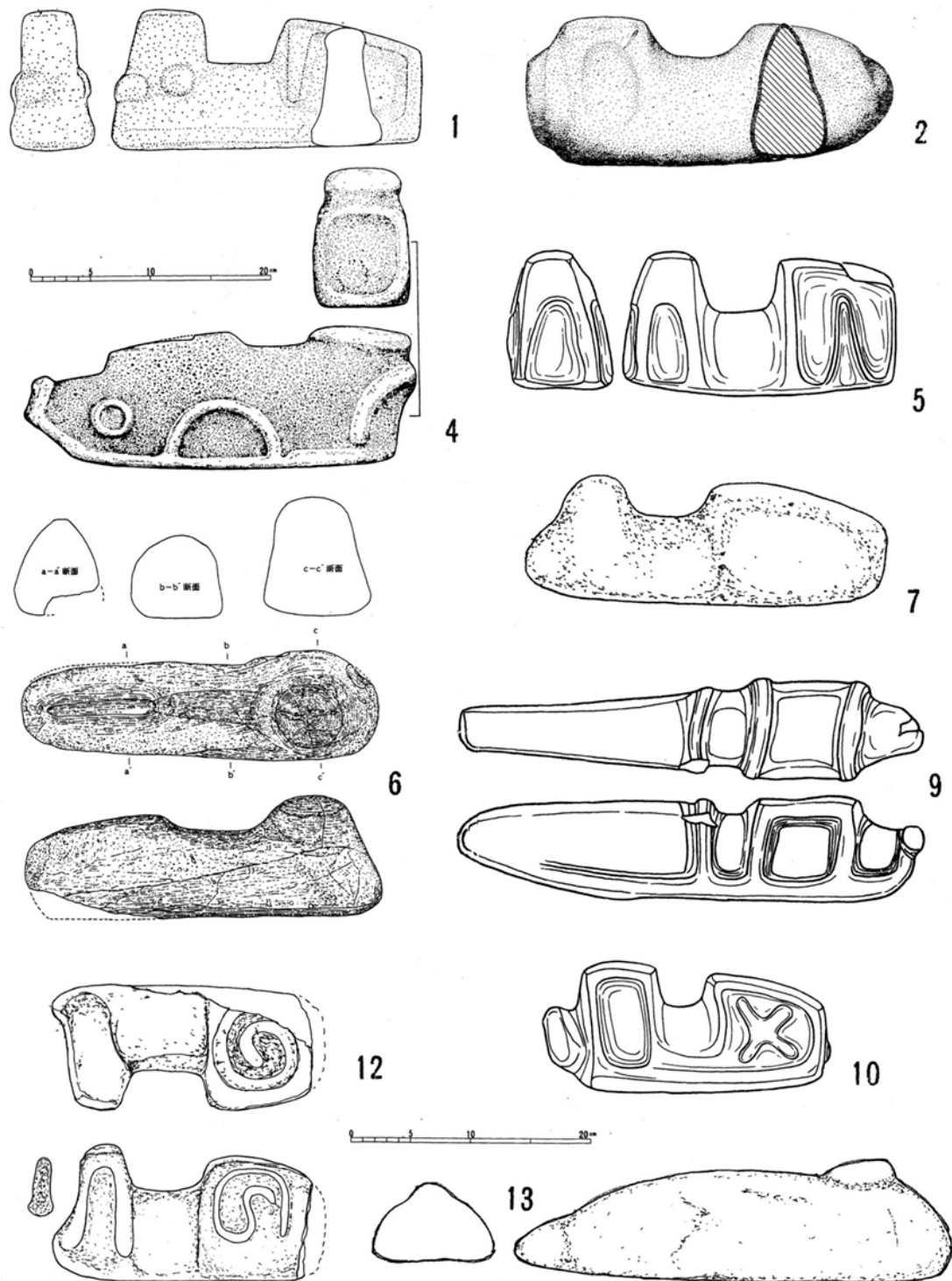
12. 飛騨考古学会による平成 25 年 6 月の、板取方面調査の際の実見試料。岩本地区の剣神社に神宝として祀られているもので、棒状頭部に小さく角が付き、腹部に渦巻文が浮彫される。一部欠失、頭頂溝あり、底面平坦、砂岩製、現長 25.0cm、推定長 27cm、高さ 13.5cm。同類は明宝町畑佐 (No.45) 及び下呂市小坂町大垣内にあるが、面白いことに渦巻文は通常上方から見て左右対称となるべきものが、本例は片側が S 字状となっている。途中で方向を変えたのかも知れない。
13. おなじく板取地区調査において確認された、長水寺所蔵の資料の 1 つで近くの八王子遺跡の発見である。ナメクジ形をした長大な川原石に、頭部のみ丸く作り出して偏平頭をなしているが製作途上であろう。長さ 38.5cm、高さ 11.1cm、厚さ 12.1cm、砂岩製。
14. 長水寺蔵のもう 1 点は、棒状頭部と挟り部のみが作り出され、他は大きな剥離面となって原材が流紋岩の角礫であった事が知られる。尾部を作りかけて破損し、製作を中止した可能性があるが、これから底面を作り出す工程を考えると、理解に苦しむ素材選択である。完成してもかなり小形の部類に属するものであろう。最大長 20.2cm、最大高 18.9cm、厚さ 7.8cm である。
15. 林 (22) に報告があり、「郡上郡川合村初音安楽寺裏の溝川よりの発見品は、磨製にして僅に曲線の彫刻あり。其の底部にはあたかも石冠底部の如き凹みありて、幾分か石冠に近き使用法ありしと思はる。」と記される。同じく林 (37) に略図 (約 30cm) と出土地が記されるが、橋本 (90) はこれを古城郡河合村と勘違いして、河合村羽根西沼資料に比定してしまった。底部に挟りを備える個体はごく少数であるが、存在することは重要であり、特に古いねずみ石冠とのかかわりの強さを示していると言えよう。後述する。
16. 郡上市の八幡ミュージアムに展示される資料で市島地区出土とされる。文献 191 にも写真がある。ケース越しであるが全体に黒光りしてウルシを塗ったような感覚がある。背面溝・頭頂溝を備え、巾もあるどっしりとした造りである。推定約 30cm。
17. 同じく文献 191 に同町小野八幡神社に収蔵されるとあり、小野遺跡出土の可能性もある。写真によると推定長 29cm、偏平頭 4 式の完形品である。なお同書には郡上郡内で 45 点の御物石器が確認されているとあるが、本稿では 36 点にとどまっており、異形石器等も含まれていると思われる。
18. 大和町の中山薬師遺跡では 4 点の御物石器が出土しており、文献 78 に詳細な計測値が示される。また沢田 (170) にも再論され、遺跡立地についての論及もある。遺物は薬師堂に保管されている。18 は無文で一部に原石痕を残す砂岩製である。頭部は円柱状、端部を少し古折、底部はやや不安定であるが滑らかで一部少しく凹む。長さ 29.4cm、高さ 12.7cm、厚さ 7.7cm、3.88kg を量る。
19. 角と瘤を持つ偏平頭式で周溝は深い。一面に円形・三角形・X 字形の浅い浮文があるが、他面はワラビ手文の様な浮文である。瘤の端部にも三角の沈文が入る。灰色の軟質な石材を用いている。長さ 33.8cm、高さ 13.2cm、厚さ 8.6cm、重さ 5.43kg。大型の部類である。
20. 安定性があり後端部を破損する。両側面は対称の X 字状浮文・沈文と三叉状文である。瘤端にも円形沈文が施される。頭部は大きく隅丸方形に造られ、鞍部は非常に狭い。黒灰色の軟質石材が用いられる。長さ 26.2cm、高さ 12.5cm、厚さ 10.9cm、重さ 5.05kg。(沢田写真)
21. 棒状頭式の典型タイプで、十字文・U 字文の浮文の他頭部端にも三角状浮文 (頭頂帯) がある。瘤・尾はなく特徴的な背面溝が備わり、飛騨の古川町岡前資料とよく似ている。長さ 27.1cm、高さ 12.1cm、厚さ 8.0cm、重さ 3.54kg。黒灰色の多孔質な硬い石材である。
22. 文献 78 に写真があり、シンプルな棒状頭式であるが鞍部は幅広く、背面溝がしっかり備えられる。長さは橋本によれば約 25cm である。灰色砂岩製。『大和村史』(文献 106) には落部字古畑出土とあり「大門幸採集」の記事もある。
23. 大和村島字長石谷において田中善児により採集されたと文献 106 にある。橋本文献では福田とされる資料。灰白色のザラザラした石質で、文様はなく蚕のような形をしている。頭部は尖り、鞍部は狭く浅い。

- 橋本分類では瘤付面包頭式とされるが、尾もしっかりと付いている。長さ 35.4cm。
24. 『和良村の文化財』（152）に紹介され、沢田（157）に詳細な解説がある。和良川と土京川の合流点に近い段丘上の落合遺跡における、蒲重太郎氏の発見とされ、3 分の 1 を欠失するが両端に瘤・尾が付くタイプと思われる。頭部下に円形のふくらみを持ち、底面は滑らかで若干反りをみせる。現長 19.1cm、推定長 24cm、高さ 11.4cm、厚さ 9.1cm、重さ 2.65kg、流紋岩。文献 152 によると、高さ 45cm の立石、直径 2.5m の配石中より出土したとの記録があり、注目される。（第 11 図）。（沢田写真）
25. 江戸時代に発見されていたものが遺跡近くの稲荷神社に祀られ、その後東野白山神社ご神体となって現在に至っていると、沢田（157）にある。淡灰緑色に白く細かいゴマ粒上の粒子のある安山岩製とされ、重さは 6.0kg を量る。偏平頭部や瘤が突出し、側縁部には波状に大きくうねる浮文が巡る。瘤が省略されたとして森腰例（No.4）と同様の 2 式とされるが、3 式とも言いえる形状である。長さ 37.9cm、高さ 10.6cm、厚さ 13.2cm、極めて安定性がある。川の水辺（井ノ向）に立てられていたとの伝承もあり、実に魅力的な資料である。（沢田写真）
26. 榊原（65）に初出、沢田（171）に細説がある。大原大矢石亀社遺跡出土、河合逸子氏蔵とされる。県史の図では渦巻文風に描かれるが、太い浮文で区画され底面のみ凹凸のある原礫面を残す。長さ 34.9cm、高さ 13.5cm、厚さ 9.6cm、6.06kg と大型である。玄武岩製。
27. 林（37）の地名表に「嵩田村赤池稲荷祠内にあり」とあるが図はない。文献 195 によると最初塩竈神社の祠に安置されていたらしい。蚕のような形状をなし、対向三叉文や工字文風の浮文が全体に施され、挟入部側面にも楕円形の浮文が入る。偏平頭部は低く明瞭ではない。一部に朱色の付着物がみられる。底面は原礫面の凹凸が少しあるが平滑で安定性は良い。長さ 32.6cm、高さ 9.6cm、厚さ 10.6cm、5.12kg、凝灰岩質石材である。（沢田写真）
28. 林（14・37）に粥川小字大粥にて石神様に祀られていたものを、その後粥川小学校山田氏により保全されたとある。37 には写真と図があり、また橋本（90）にも大粥 1 号として掲載されているが、何故か『美並村の遺跡』（88）に記載はなく、このためか沢田（171）は新発見として扱っている。見落としであろう。偏平頭部が大きく突出し、腹部には連結三叉文状の浮文が大きく描かれる。頭部にも突起を作出するための沈文が巡る。断面形は楕円形に近く、北陸型のように安定性のない形状をなす。従って橋本分類の濃飛型は、北陸型とする方が正しい。長さ 37.4cm、高さ 13.5cm、厚さ 7.3cm、重さ 5.81kg。硬質な砂岩系石材である。（沢田写真）
29. 文献 88 に粥川出土とあるが、嵩田村クジ本が本来の出土地であろうとされる（沢田 171）。弧状の浮文が両面にあり、挟部の一部は欠けている。底面に原礫面を残し安定性がある。流紋岩質の硬質な石材で長さ 26.5cm、高さ 11.6cm、厚さ 9.4cm、重さ 3.0kg である。（沢田写真）
30. 文献 88 では異形石器として扱っている。摩耗が著しく原形の復元は困難であるとするが、鞍部や両側の突起もあり、御物石器としてよからう。灰黒色石材でザラザラしている。摩耗痕をこの石器の用途を示唆するものとの見解も述べられている。断面は楕円形に近く安定性はあまり無い。長さ 18.5cm、高さ 8.0cm、厚さ 5.0cm。
31. 同じく異形石器として扱われているもので、大部分を欠失するが黒色軟質の石材で丁寧に研磨されている。鞍部の位置が問題となるが、一応濃飛型の棒状頭式としておく。現長 15cm、断面は方形である。
32. 『大和村史』（106）の鷲見の白山神社に御物石器が納められているとの記述があるが未確認。なお同地の敬願寺遺跡からは 1990 年代の発掘調査において、石冠・石刀をはじめ縄文晩期の呪術用石器群が多数出土している。出土地の可能性は高いと思われる。
33. 『白鳥町の遺跡』（79）に図があり『大和村史』（106）にも記述がある。山間部の越佐阿倉（安久良）出土とされ、長さ 30.0cm、高さ 7.2cm、厚さ 9.3cm の砂岩製である。X 字形沈文と半月形の浮文があり、

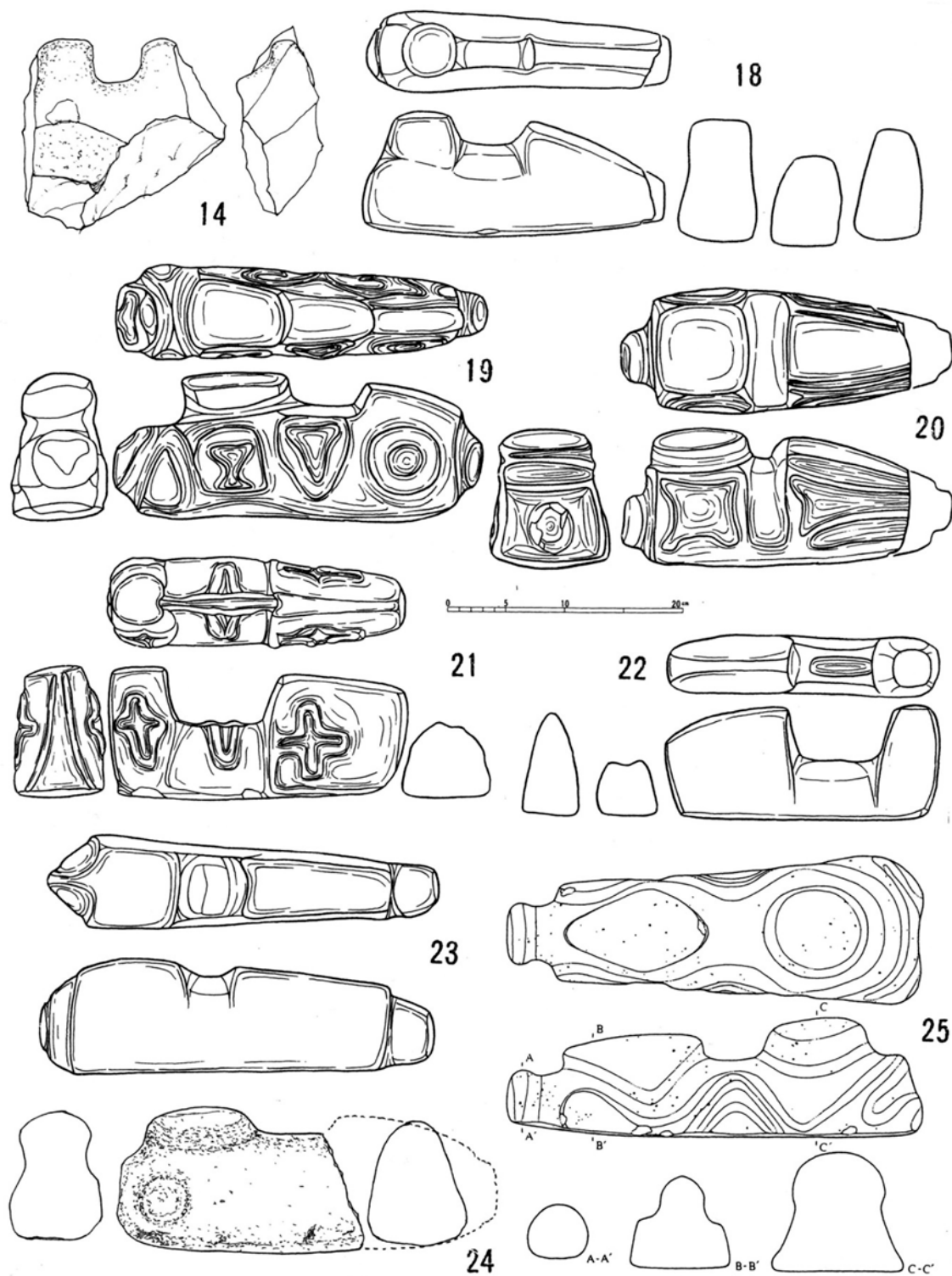
腹部下縁を少し欠損する。断面形は逆三角形の北陸型で底面やや外弯し滑らかである。

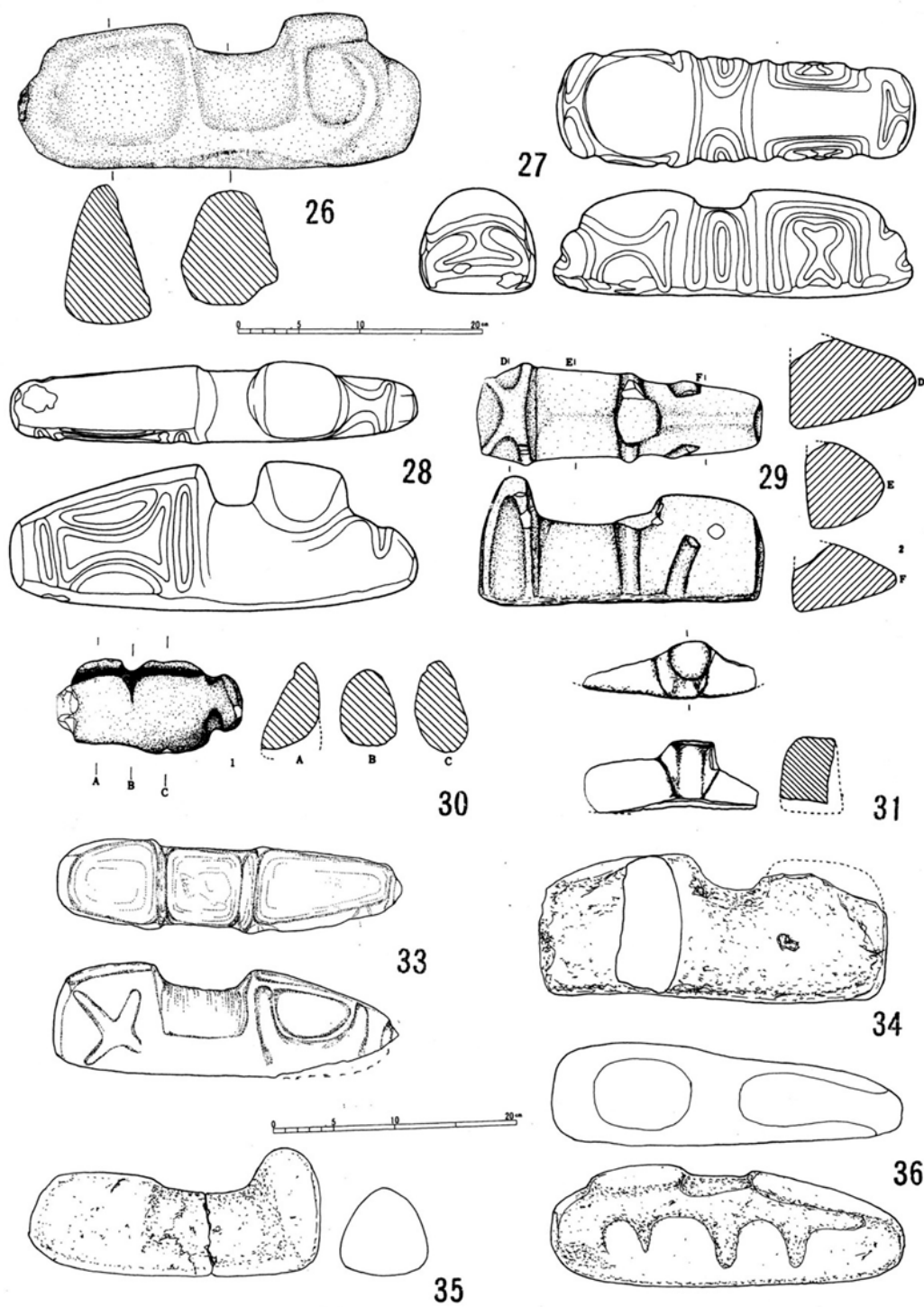
34. 著名な前田遺跡資料で林（32）や大参（66）、県史（71）などで紹介される。前田遺跡の遺物 636 点は県の文化財に指定されている。日置又左エ門氏によって明治 30 年代以降に蒐集されたもので、御物石器 2 点と異形石器 1 点が含まれる。本資料はシンプルな面包頭式で赤褐色を呈し粗製で、大参は退化現象としての後出形式ととらえている。林の計測では長さ 30.3cm、高さ 12.0cm、厚さ 6.6cm である。
35. 大参（66）の報文中にあり写真で示される。長さ約 28cm、高さ 12cm の無文の面包頭式で 2 つに割れ、色調が異なって下半部が新鮮である。底面は平坦で鞍部が広く作られる。
36. 『白鳥町史』通史編上巻 P72 に紹介される。佐藤とき子氏の教示によると六ノ里の松本遺跡の出土で字橋詰牛道川左岸の段丘上、渡瀬橋の東方約 100 m の地点とされる。白山文化博物館にて実見。加工は最少限になされ頭部は低く鞍部も浅い。波の様な文様が浅く敲打で残される。頭部下にススけた様な痕跡がある。長さ約 28cm、砂岩製。底面はほぼ平坦である。
37. 『明宝村史』通史編（198）に No.38 と並んだ写真がある。頭部先端を欠くが、瘤・尾を備えると思われる。鞍部は狭く文様は不明である。図は写真を参考にした。長さ約 24cm。
38. 明方村立博物館（旧）に展示される多数の御物石器の 1 つで、田口出土、鷺見清正蔵で砂岩製である。偏平頭式と思われるが特異な形状をなし、大きな瘤が突出する。腹部に三角形の浅い彫り込みが対向し、頭部に続いている。同様の文様は、飛驒の金山町中切資料（No.102）にもみられる。瘤先端に敲打痕が残し、安定し、現長は 22cm を量る。断面は長方形である。砂岩。
39. 2004 年の『岐阜県新発見考古速報』に記載があり、図によると 3 分の 1 を欠失する棒状頭式と思われ、無文で尻面溝と背面溝を備える。腹部断面はゆがんだ楕円形であるが挾部は円形に近い。未製品かも知れない。もう 1 点出土とあるが未確認。現長 20cm。
40. 『明宝村史』（198）に写真があり、西気良の白山神社に収蔵される。中程で 2 つに割れているが完形で、波形の浮文が不明瞭ながら見られる。平置され安定している。法量不明。
41. 明方村立博物館（旧）に収蔵されるうちの 1 点で、腹部のみであるが尻面溝と背面溝がみられる。よく研磨され三日月状の浮文が両面に施される。底面はやや反り加減である。現長 14.5cm、推定長 21cm、断面長方形。
42. 林（22）に初報告され、同 37 に解説がある。加工はやや粗く円文と三角浮文が両面にあり、挾部は浅く小さい。橋本（90）の図では小さく示されるが、林によると長さ 9 寸 6 分、高さ 3 寸 7 分、厚さ 3 寸 2 分とあり、29cm 程になるはずであるが未確認。
43. 林文献に略図（22）と写真（37）があるが不正確であり、腹部（橋本では頭部）が折損しているか否かで異なる。橋本は森腰例（No.4）を参考にしていただと思われるが、図版 5 の 43' のようにも考えられる。いずれにせよ偏平頭 2 式か 3 式であろう。自然面が残り粗製である。砂岩製、現長 28cm。
44. 林（22）に「自然石を凹字形に打ち欠きたる未成品とも云うべき」ものとし、花崗岩に似るとされる。写真では文様のない面包頭式である。法量不明。
45. 明方村立博物館（旧）の 1 つ。畑佐中学校蔵とされるが文献等はない。大きな渦巻文と、挾部下に U 字文、頭部に円文が浮文で表され、頭頂溝と尻面溝を備える優品である。No.12 資料や下呂市小坂町大垣内資料によく似る。長さ 22.0cm、高さ 11.2cm、厚さ 5.0cm、花崗岩系の石材である。
46. 同じく同館所蔵品。大谷の大坪喜男屋敷より出土とあり、砂岩製でよく研磨される。約 3 分の 2 を欠失し、頭部先端にわずかに突出部がある。断面はレール状で文様は無いようである。推定長 27cm。
47. 同じく同館所蔵品。鷺見清正所蔵で全体に粗く研磨される、凝灰岩系の石材である。頭部は明瞭に造り出され、瘤の部分を欠失する偏平頭 3 式である。No.37 資料によく似ているが、挾部の幅が大きく異なる。安定して置ける。現長 29cm。

48. 同じく同館所蔵品。腹部のみの2分の1個体で、清水孝一所蔵、砂岩製。腹面に四角に彫り込みがある。断面は長方形、推定長22cm。
49. 同じく同館所蔵品。原哲氏蔵、砂岩製の役4分の1個体、推定長約27cmの中型品である。厚みのある腹部に2本のノの字状浮文が並ぶ、珍しい例である。
50. 藤橋村門入石谷の『いんべ遺跡』（156）における発掘資料で、粘板岩製の頭部破片である。北陸型面包頭式と考えられ、かなり大型であろう。19s グリッドの土器棺墓近くにおいて被火熱の状態で発見されている。同様の発掘事例は飛驒の宮川町家ノ下遺跡でもみられる。
51. 白鳥町前田の日置家所蔵のもので、他に御物石器2点・異形石器1点がある。板状に敲打された体部の一端に大きな瘤状の突起が備わるもので、袂部等はみられない。No.30、No.38 資料と同類か、あるいは未製品と思われるが一応御物石器の範疇でとらえておきたい。現長約20cm。

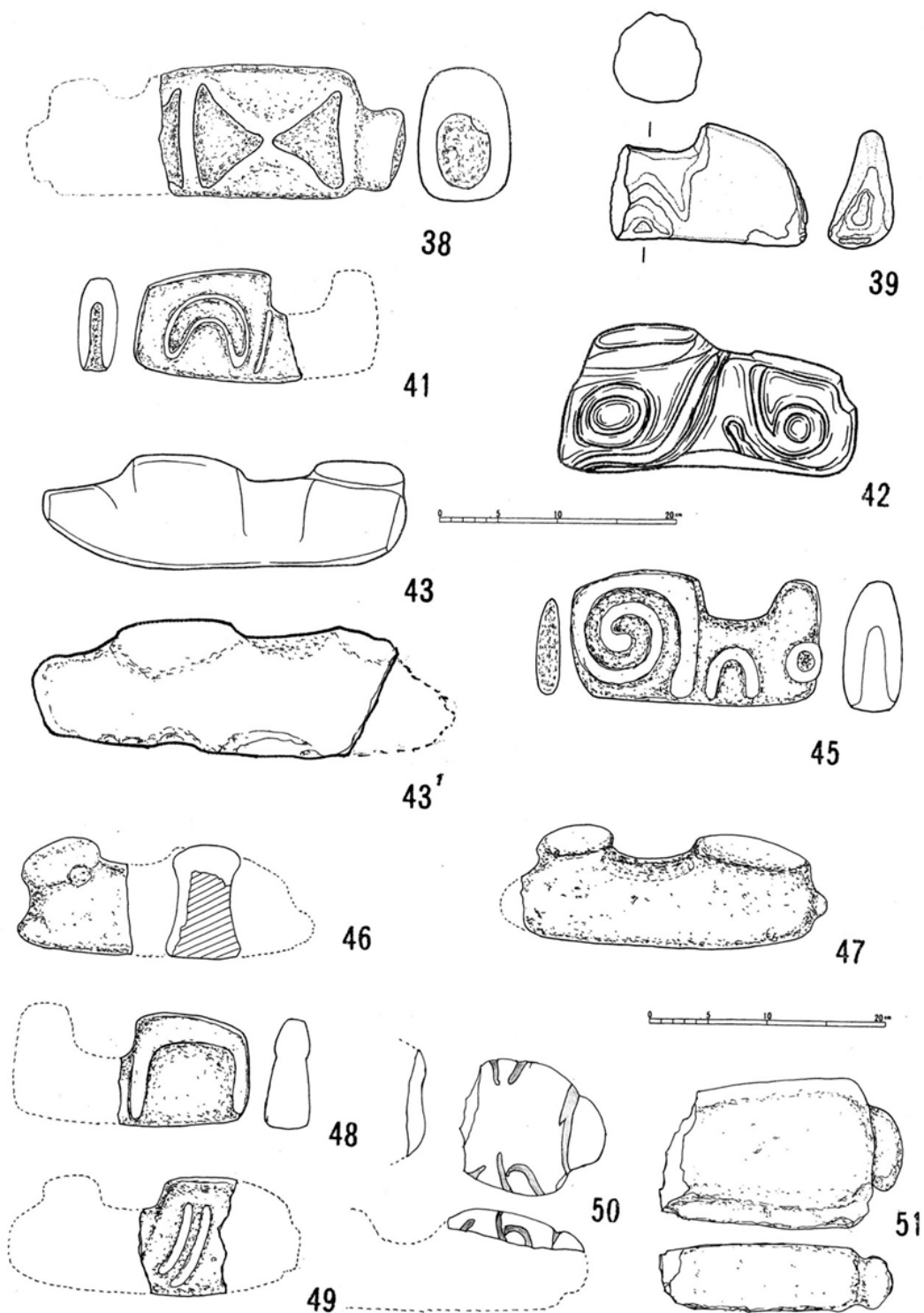


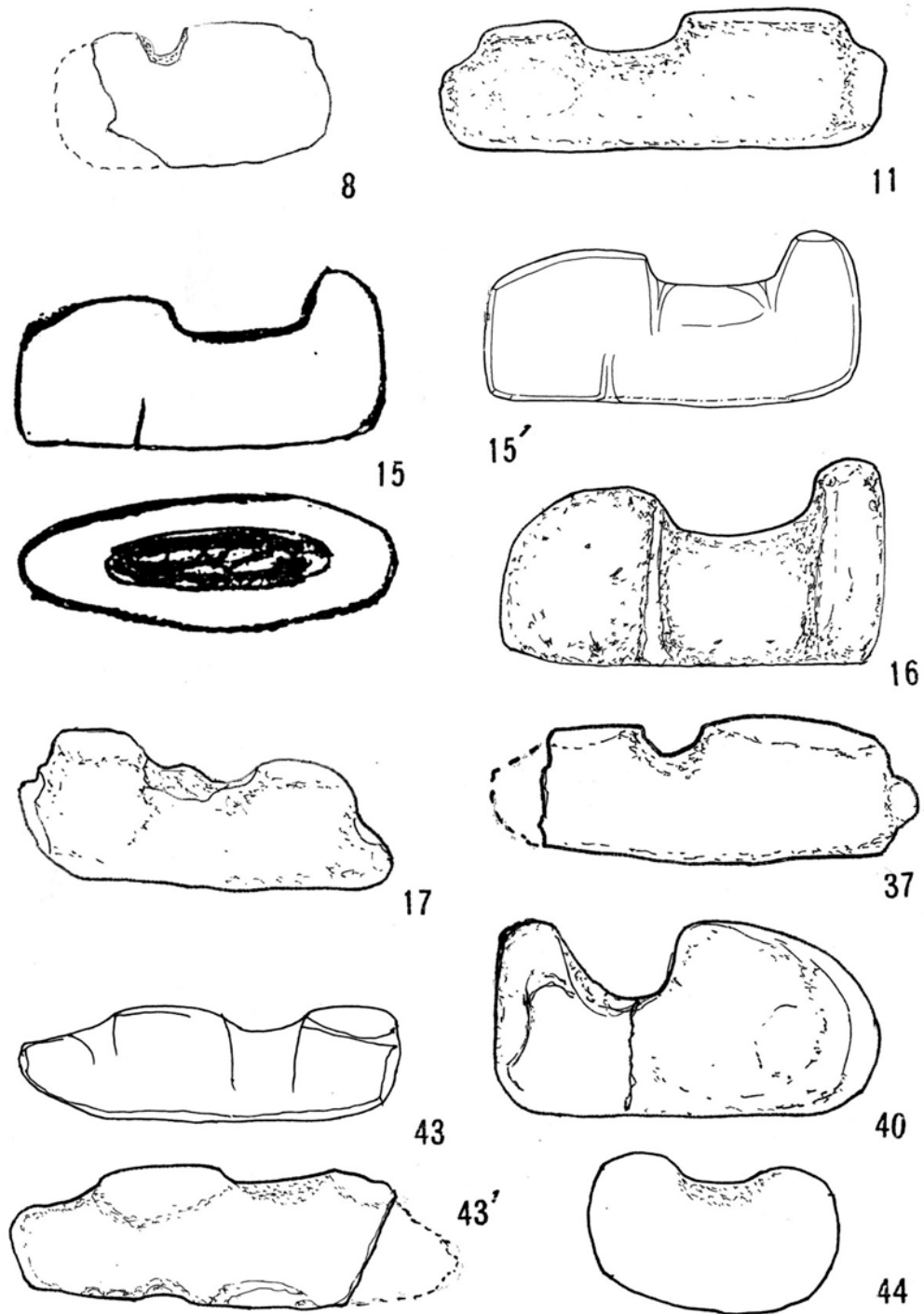
美濃の御物石器集成図版 1





美濃の御物石器集成図版 3





美濃の御物石器集成図版 5 略図・写真で示された資料 縮尺不明

4. 異形石器について

異形石器として分類したのは、橋本『御物石器論』(90)において異形石器と総称された猪頭石棒・古いねずみ(石冠)等の石器群をさす。他に魚形石製品(かつをぶし形石器)や海獣形石製品、芋虫形石器等も含めてよかろう。これらは縄文時代後期から出現しているといわれ、分布域は飛騨・美濃・北陸及び関東地方の一部と、比較的局所的である。

特徴として魚・猪・イルカ・海獣など、動物を原形としている事、腹面に抉りを備える例が多い事などで、石冠と共通した機能がうかがわれると橋本は述べている。ただそこには御物石器とともにスリ石を原形とした磨擦器形祭器として捉える考え方が根本にあるため、動物模倣の意図が全く意味を持たない事になっている。この点については後に述べたい。

橋本は、異形石器の一部は御物石器の直接的な祖形ではなく、その成立に関与した石器として評価されている。結論は異なるが、筆者も同様の観点で異形石器を見てみたいと考える。ここでは美濃地方の異形石器4点を紹介しておこう(第4図1～4)。

1. 美並町の石亀社に御物石器と共に収蔵されるもので、文献88に異形石器として、沢田(171)に御物石器として紹介されている。全長40.8cm、重さ7.75kgの大型品で抉部は見られない。瘤と尾は表現され、前方1側面に円形の突起がある。全体に敲打痕がみられ、底部は平坦な節理面である。やはり魚形あるいは両棲類の感を抱かせる造形である。(沢田写真)
2. 白鳥町前田遺跡出土品で、林(37)に略図で示され魚形をなす、御物石器の一種としている。尾部を少し欠損するが、長さ31cm、推定長32.5cmの安山岩製である。頭部と思しき部分は抉りを一周させて区分し、口の様な造形がある。背の部分は3ヶ所に抉りを入れて波打つ形に前向きに造形され、断面は卵形、底面は巾は狭いが平坦に擦られて平置が可能である。部分的に敲打痕を残すがよく調整されている。橋本は、抉りが一周するため御物石器とは区別しているが、飛騨の古川町黒内細野資料のように抉りが一周するものもある。なお橋本はこの資料を「国府町荒城神社」出土と誤記している(文献90)。
3. 林文献22に写真で提示される資料。砂岩質で上部中央は少し凹み、粗製で無文であるとされる。林は異形石器に分類しているが、未製品の可能性もある。この報文中で林は、御物石器の精巧品と粗製品を区別し、粗製品は飛騨地方を中心に、比較的多く発見されているとしている。
4. 『大和村史』(106)に紹介される西村家保管の資料で、御物石器として扱っている。写真があるが不鮮明で、大きさ等も良くわからないが長楕円形で先が尖り、前部両面に円形の突起がある。魚形石製品に近いのかもしれない。

この様な異形石器については、他にもその類例を見る。性格不明の大型石器、時に石冠として報告されることもある。例えば第4図6は、高山市国府町西の野遺跡の縄文中期住居址内床面より出土した大型石器(?)で、長さ40cm余り、断面三角形で両端に御物石器の瘤・尾の様なくびれを持ち、自然石に最少限の加工が加えられている感がある(文献168)。異形石器として報告されている。

美濃にも同様な例があり、第4図5は、可児市の宮之脇A地点遺跡第25号住居址内より出土した大型石器で、時期は中期末、断面三角形の長さ44cmの流紋岩川原石に敲打と研磨を加え底面を平坦にする調整もなされている。報告者は石冠類型として扱い、その祖形となる可能性を示唆している(文献205)。中期の段階で

のこの様な大型石器の出現は、類例が少ないという点でほとんど検討される事も、注目される事も無かった。かつて西脇対名夫が「御物石器は、新潟県寺地遺跡の配石遺構に使われた例にみるように、時に非常に大きなものであり、うずくまった猪を思わせる形態を備えていた。あるいはほぼ実大で猪を模した石像が、この石器の起源であったかも知れない」「全体として矮小化する動きを見せ」と述べたような見解（文献 118）は、その後何らの進展も無い様である。

5. 異形石棒・老いねずみ石冠について考察

橋本(90)に示された異形石棒は 15 点であるが、いわゆる「老いねずみ」を含めた総称として扱われている。特に規定のあいまいな現段階での区分は難しいが、底面に凹みを有するという、橋本の規定でもって「老いねずみ」とするならば(註 1)、図示した橋本の 1～4 及び獣形の 5(文献 174 他)は異形石棒と呼びうる(第 5 図)。

4 の資料を報告した林は、魚形石器の名を用い「あたかもひれのない鯰か、溪流にすむ俗称ハンザコの手足のないものに似ている」と記す(206)。富山県中新川郡の資料(6)は、「確実にシャケの体形をとる」と橋本も述べるが、「老いねずみ」として扱っている。筆者は 4・6 も異形石棒とした(174)。今後の課題である。

他の資料についても触れるならば、1 は『宮村誌』(67)に紹介される一之宮町砂畑資料で、紅レン絹雲母片岩製の後期型異形石棒類品とされる。偏平で頭部は大きく作られ、くびれ部が浅く備わる。やはり鯰を思わせる造形である。長さ約 26cm。2 は県史(71)に写真があるが、詳細は不明である。橋本図では約 27cm、横から見たもので頭部は肥大し、次第に細まって尾の様な突起がつく。白鳥町の前田遺跡資料にも同様のものが存在している。約 35cm(7)。3 は林(206)に写真があり、2 と似た形状をなす。長さ 26.6cm、胴部は湾曲し腹部には 13.6 × 2.4cm の浅い凹みがある。頭は四角形に近く突起があり、尾部は瘤状で断面三角柱状をなすとある。林は魚形石器と呼んでいる。

4 は前述した様に文献 206 に写真があるが、目と口の表現と腹部の挟り・瘤状の尾部(挟り入り)を備え、長さ 23.6cm、黒色の石で作られる。なお原文には 5 寸 5 分とあるが、7 寸 5 分の誤りであろう。

筆者はかつて「異形石棒について」の論考(207)において、3 点の石棒を紹介したことがある(図 8・9)。長さ 25～27cm の中型石棒で、両頭・偏平を特徴としまた少し湾曲する。これらは魚を模した異形石棒の類型として扱いうると提言したもので、両頭石棒の出現が魚を模した異形石棒とかかわる可能性がある事を、魚の尾部表現と考える事で納得できるとした。勿論、魚形石製品(型石冠)(第 6 図 1・2・9)、とのかかわりも強い事も、筆者の「かつをぶし形石器考」(175)において論じた点であり、据え置くという要素も 1 つの観点である。ただⅡ b 型斧状石冠の横長タイプ(Ⅱ 3・4・5)との類似において区分の困難な資料が多い点は、折衷あるいは過渡期のものとして扱うよりほかは無かる。

これらの異形石棒が、更に変化を遂げたと思われるのが「老いねずみ」であろう。獣形をなす異形石棒(5 図 5)や福島県冷水の著名な海獣を模したとされる資料(6 図 6・7)あるいは芋虫形石冠(同 8)とも、かかわりは深いと思われる(註 2)。橋本文献では 9 点の「老いねずみ」が紹介され、飛驒の 2 点が含まれる。筆者は、2010 年に「老いねずみ石冠考」(文献 174)を発表し、この中で分布地域の飛驒・富山・石川・福井・長野の資料 29 点を集成し、検討を草えた。先ずいわゆる「老いねずみ」を哺乳類の動物模倣から派生した初源的な石冠の一種とみなし、「老いねずみ石冠」と呼称した。その特徴として、

- ①左右非対称
- ②底面に舟底状の凹みを備える

③長さ と 高さの比において、寸詰まりとなる傾向がある

④頭部形態（5 分類）に最も注意が払われている

等があげられる。①の左右非対称は、御物石器と共通する重要な要素であり、一部の魚形石製品（型石冠）の初期形態にもみられる（6 図 9、文献 175）。他の石冠類型の球頭形・斧状・山形・石鋸形とは異なる部分であるが、省略化の過程で山形石冠に近いものになった要素もうかがえる（6 図 10・11）。

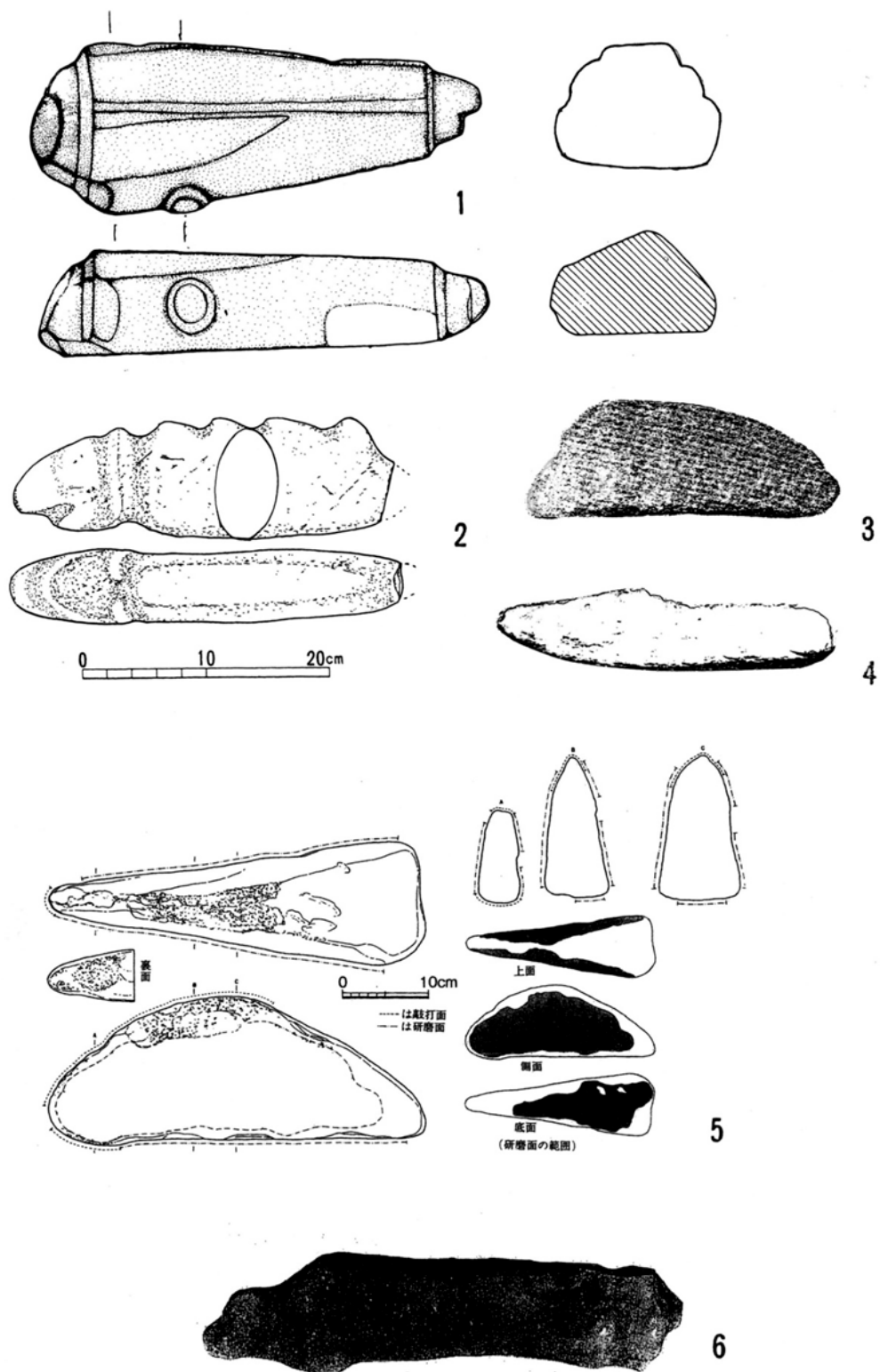
形象形祭器として始まった異形石棒が、橋本のいう磨擦器とは無縁である事の理由が、次の底面の抉りにもうかがわれる。抉りを持たない老いねずみ石冠もいくつかあるが、8 割が抉りを備え、ほぼ確実に丸い深い凹み、舟底上の深い凹み、舟底上の浅い凹みの 3 種のいずれかが備わる。製作当初から備え付けられているとみられる。動物とのかかわりから類推して、生殖にかかわるものとの想定も無謀ではなかろう。ちなみに球頭形石冠の凹み保有率は A タイプ 45%（文献 208）、斧状石冠では A タイプ 82%（文献 209）で、基底部との区分のある斧状石冠の保有率の高さが注目される。いずれの場合も、連結三叉文等の複雑な凹みから円形そして省略といった方向性がうかがわれるのである。

頭部形態である 5 分類は、1. 動物頭部状（7 図 3～6）、2. 亀頭（石棒）状（9）、3. 瘤状（8）、4. リング状（11）、5. 特殊形（12）を指す。即ち初期ほどリアルに表現されたものが瘤やリング状に変化し、最終的に省略されるか頭頂帯に形骸化するものもある。御物石器においては、瘤や角、頭頂溝（帯）との関連がうかがわれる。もともと頭頂溝・尻面溝・背面溝の存在は、その出自が問題となるが、動物表現の一端と考えれば納得のゆくものがある。一部の老いねずみ石冠（14・15）や、6 図 12・13 に示した 2 点の特殊石器（石冠）の頭頂溝（尻面溝）も、御物石器につながる 1 つの造形として無視できないものがある。

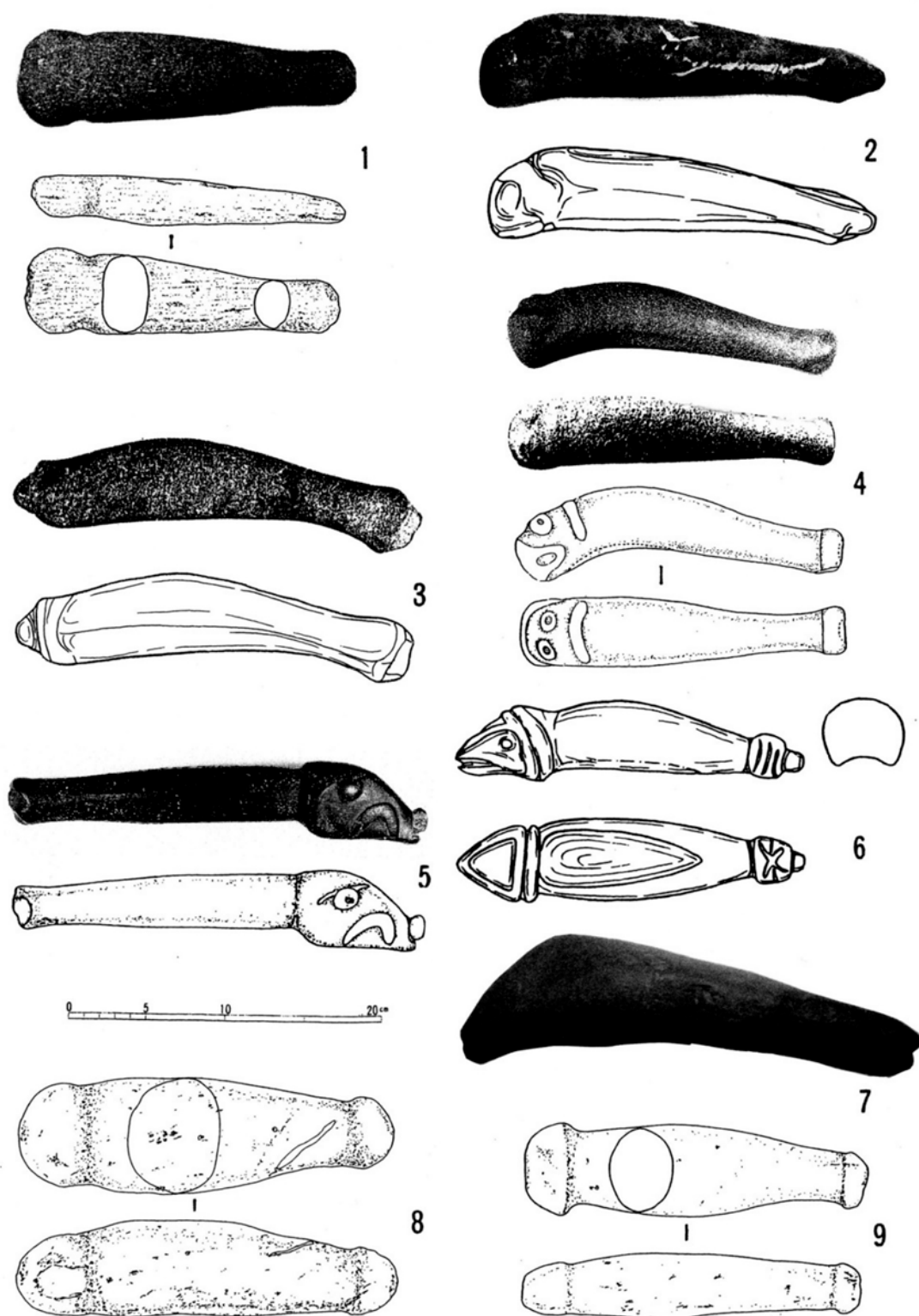
これら、御物石器との何らかのかかわりを持つと思われる石器群にも考慮した上で、最後に美濃の御物石器についての考察に入りたいと考える。

註 1. 筆者の集成した老いねずみ石冠 29 点中、底面の抉りを有しない資料は少なくとも 7 点ある

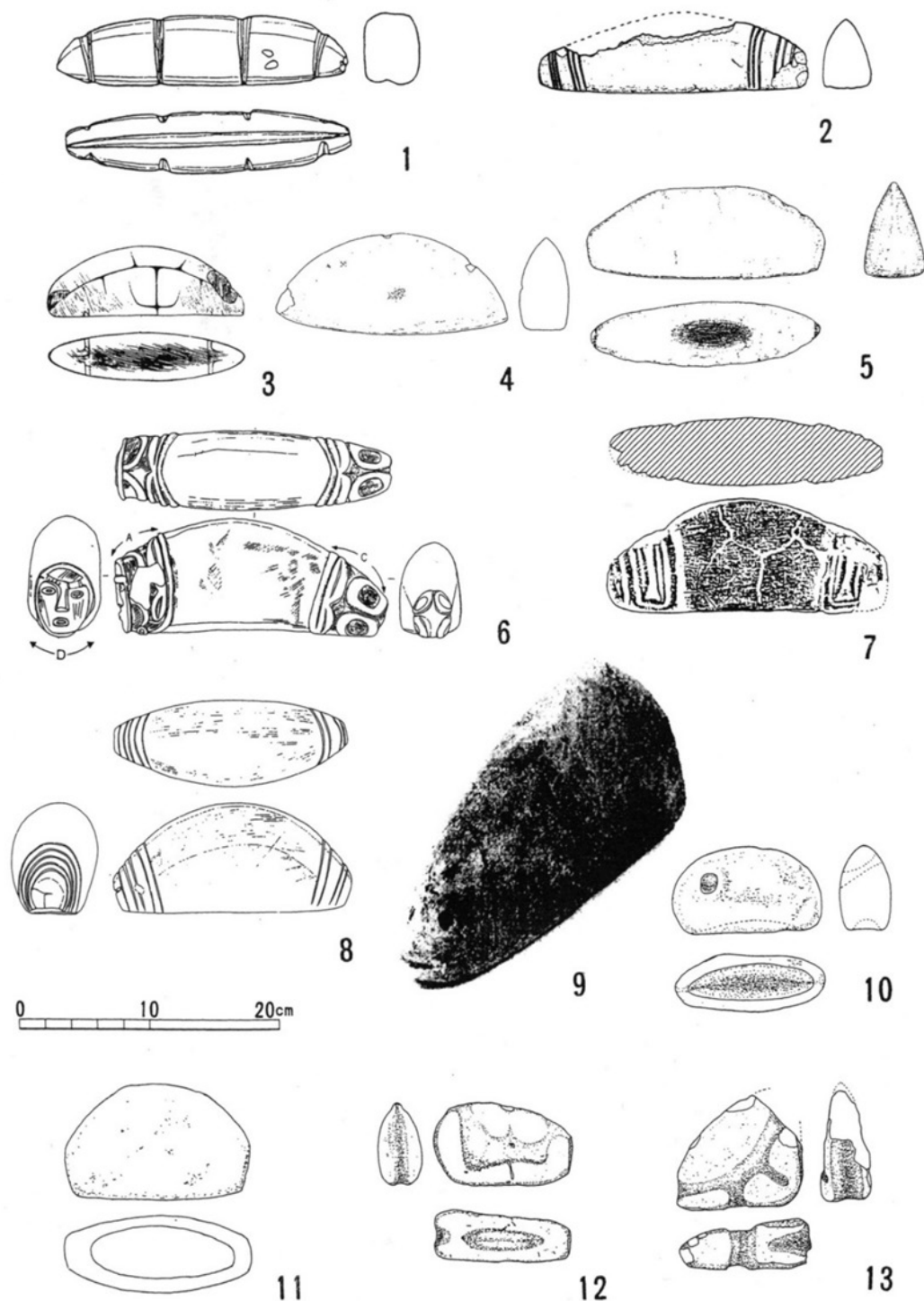
註 2. 富山県の浦山寺蔵遺跡では、縄文中期前葉から後期初めにかけての土器・土製品・石製品が出土しており、その中には石棒・石冠等が含まれる。特に老いねずみ石冠に似た置物もあり注目される（文献 211）。



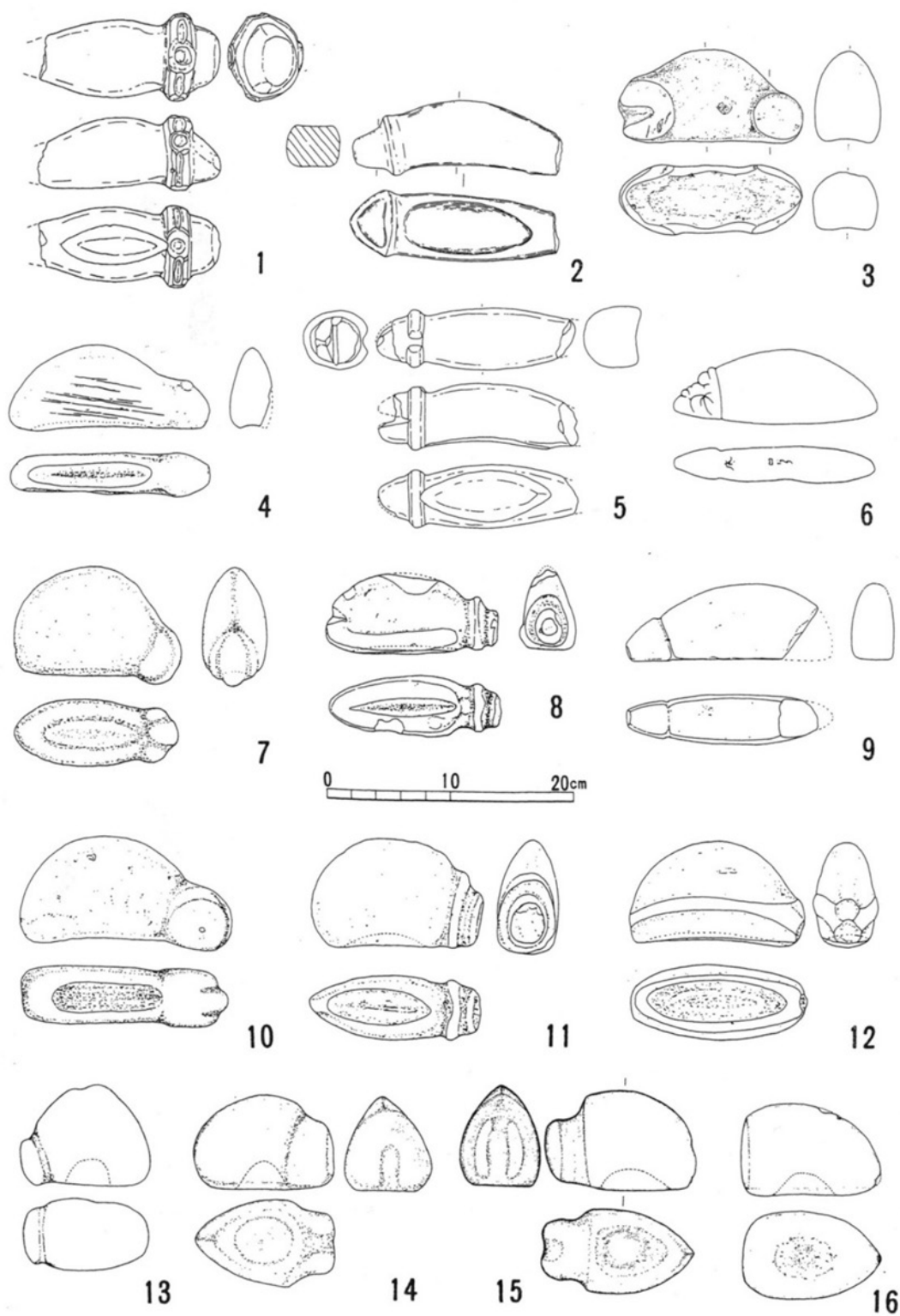
第 4 図 美濃の異形石器



第 5 図 美濃・飛驒の異形石棒



第6図 種々の石器



第7図 老いねずみ石冠

6. 正誤表について

拙著『飛驒の御物石器』（光記念館研究紀要 第7号 2012・3）における訂正部分に関しては、かつて文書にて正誤表を送付した経緯があるが、ここに改めて再録するとともに新たに判明した部分についても言及しておきたい。

○本文訂正箇所

- P13 第1表 38 文献 193 → 文献 173
- P14 同 114 白川村 → 伝白川村
- P16 2行目 No.28 → No.29
- P16 7行目 地各表 → 地名表
- P18 30行目 西村 → 西沼
- P18 第14図 西村 → 西沼
- P19 14行目 1964年 → 1954年
- P36 文献 22 典明方村 → 奥明方村
- P37 文献 70 古代文化論攷 → 古代文化論攷
- P38 文献 103 大江命 → 大江まさる

○集成図版 訂正箇所

集成図版 1～6において、縮尺のまちがいを岡本孝之氏より指摘され、ここに訂正し正確な図版を提示します。

訂正する図 : 37・103・108・111・112

挿図の訂正

P18 No.58の資料について、筆者の基礎となった『栗山コレクション目録』（文献 115）の、笹津と塩屋の資料が間違っに入れ変わっていた由を、製作者から連絡がありました。従って P18 の文と P27 11 行目の文、及び第 13 図を訂正し、橋本文献（文献 90）が正しかったことを明記し、お詫び致します。

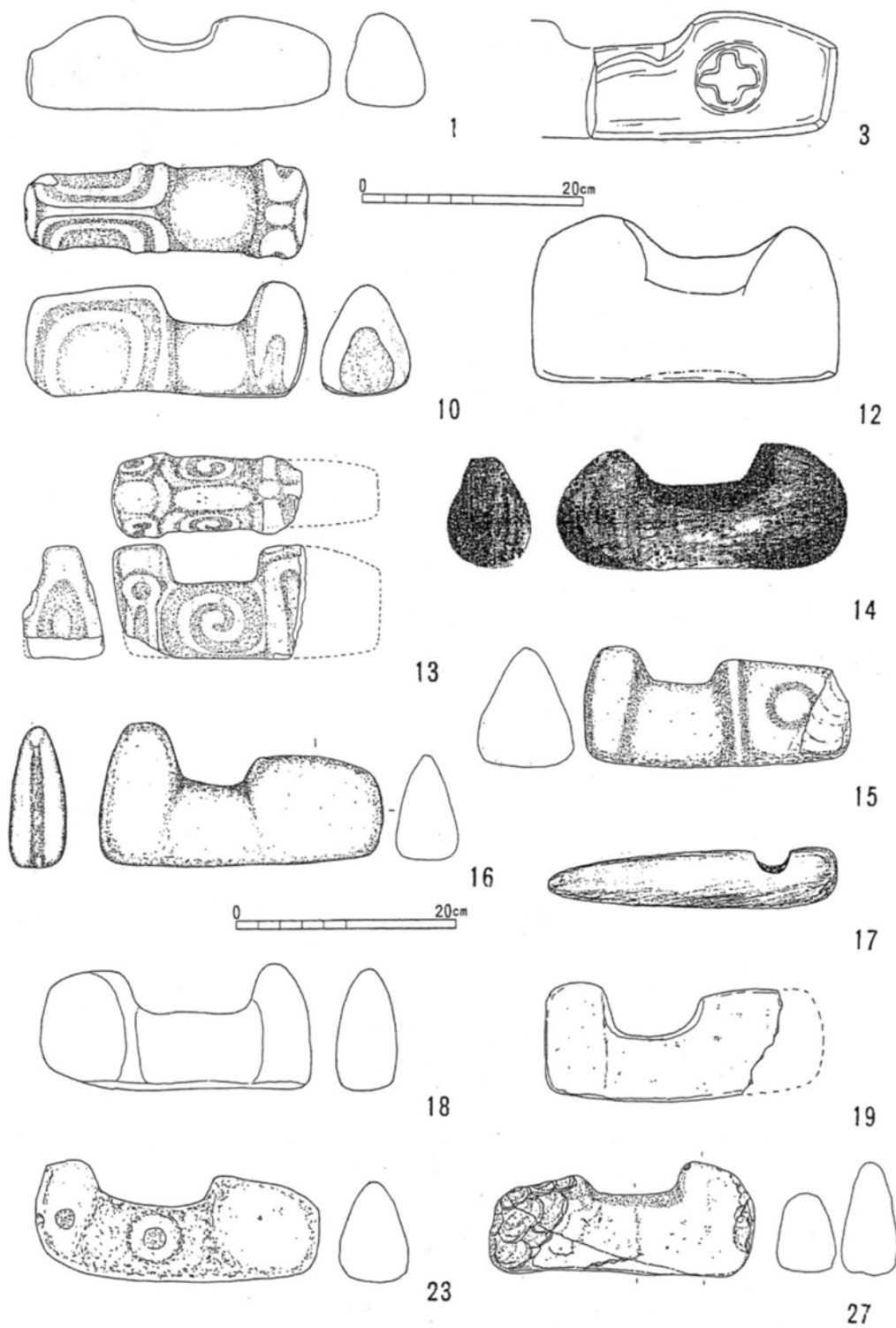
○一覧表の訂正部分について

10 年前の 2012 年に集成した『飛驒の御物石器』における第 3～5 表の数値については、その後の再検討による型式認定の変更や、判別基準の相違などにより若干数値の変動をきたしている。ただ基本的に大きく相違する変動とはなっていない点でご了承願いたい。最終的な数値として認識して戴ければ幸いである。

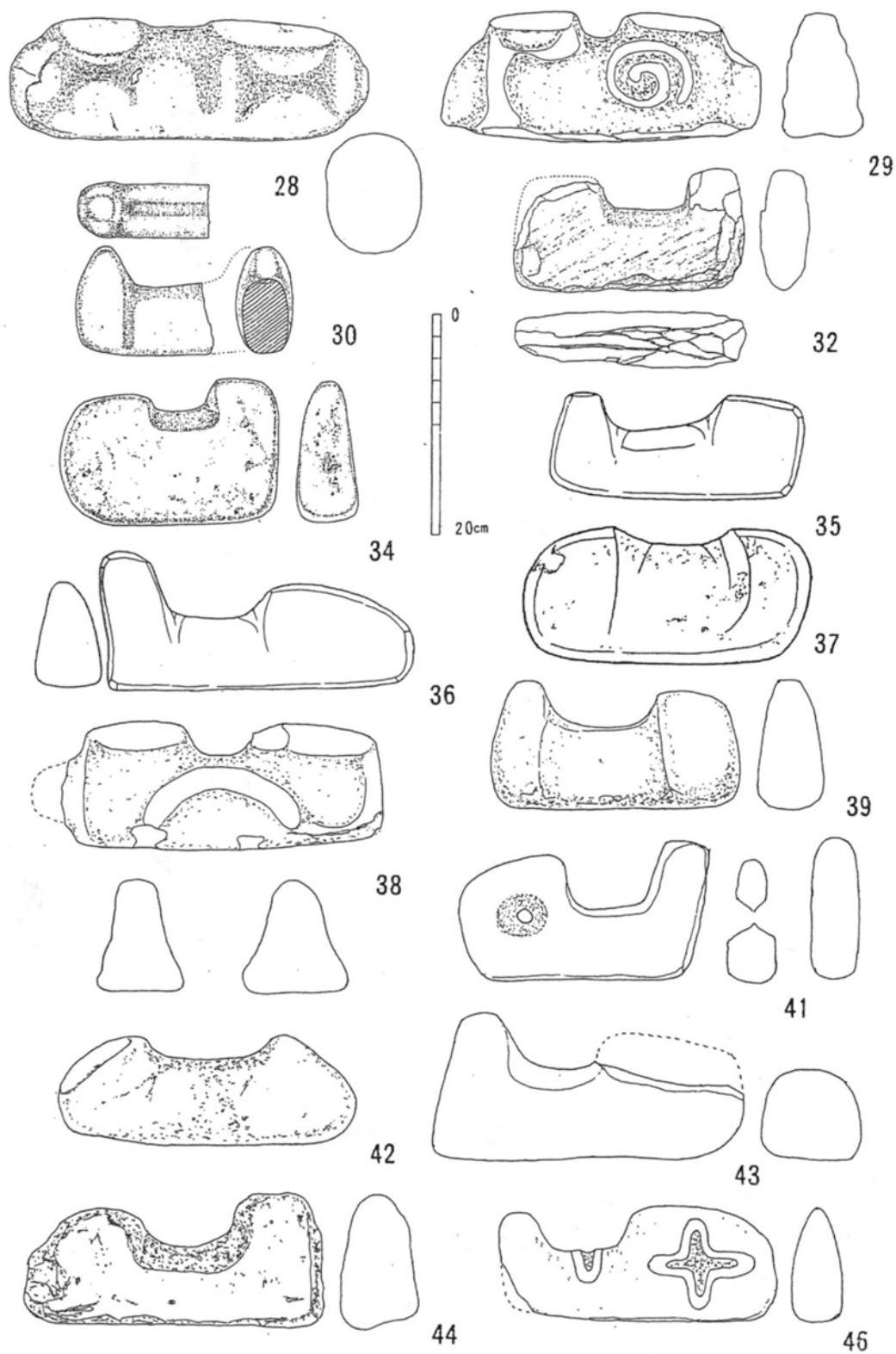
（型式変更）

- No.28 偏平頭 3 式 → 4 式
- No.35 棒状頭 4 式 → 2 式
- No.50 棒状頭 3 式 → 2 式
- No.64 棒状頭 2 式 → 瘤付棒状頭式
- No.84 偏平頭 2 式 → 4 式
- No.85 偏平頭 1 式 → 新型式（註）

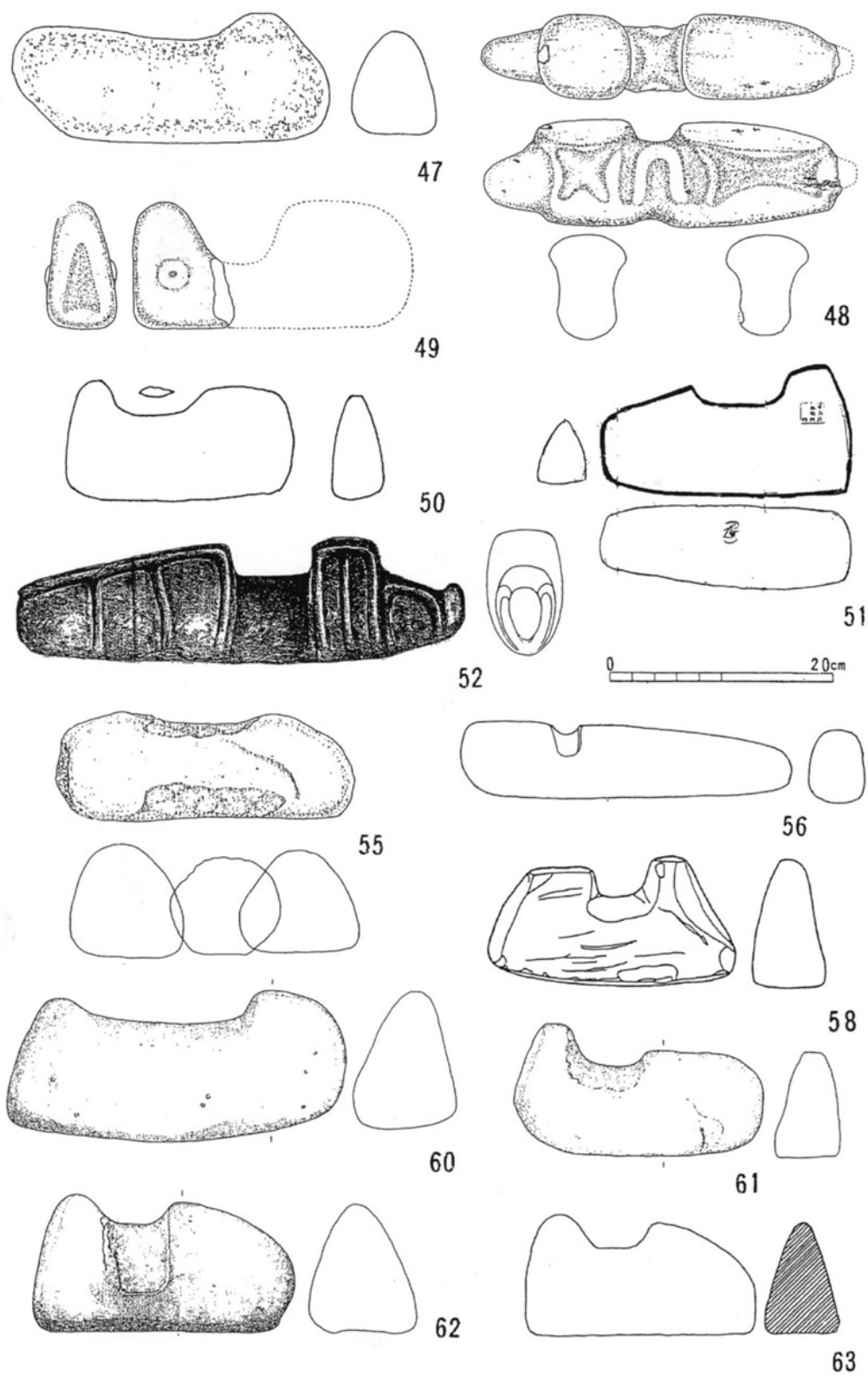
（註）頭部周溝が消え、瘤も尾も無いため、偏平頭 6 式を設定する必要がある。

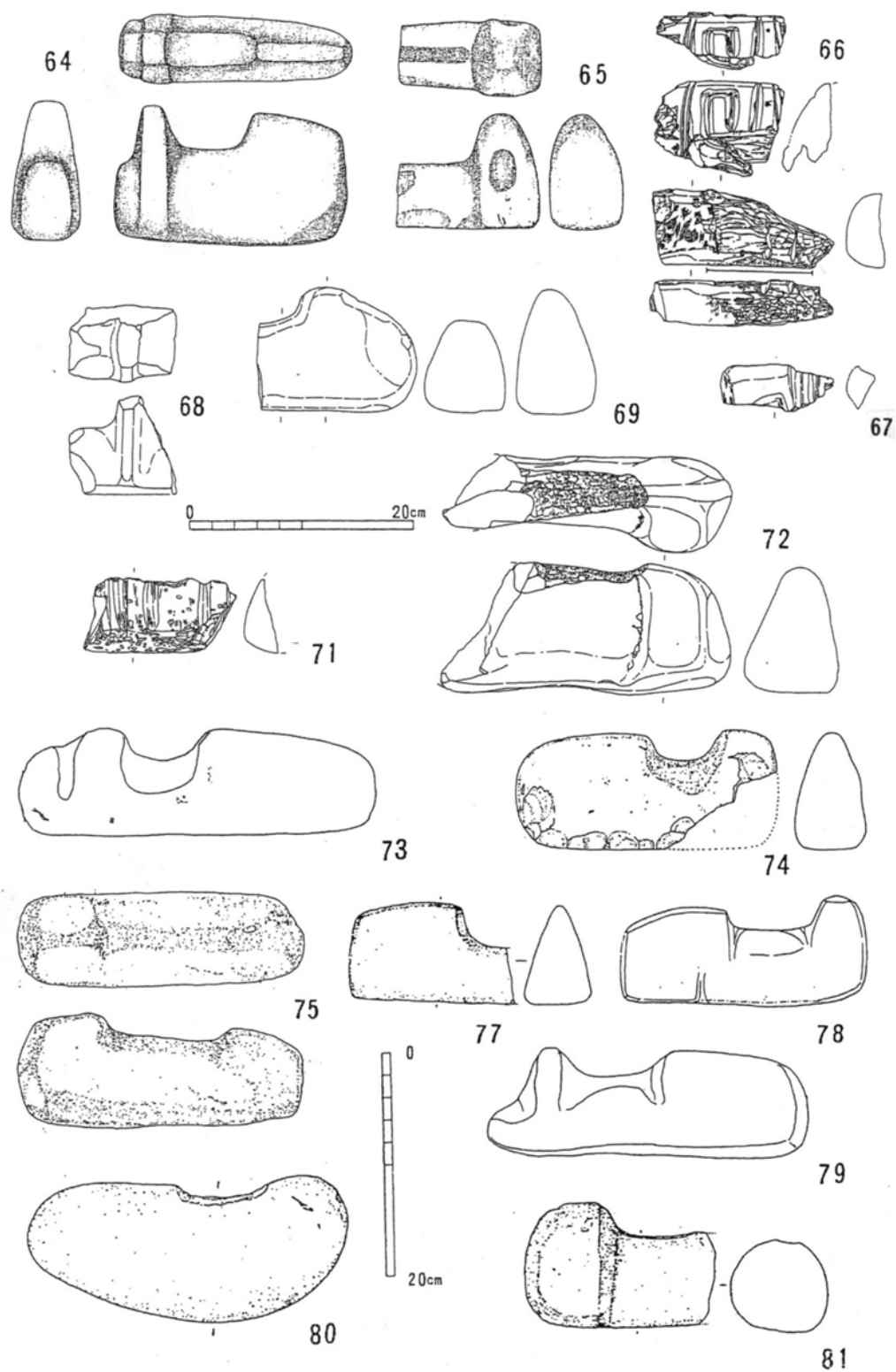


飛驒の御物石器集成図版（正）1

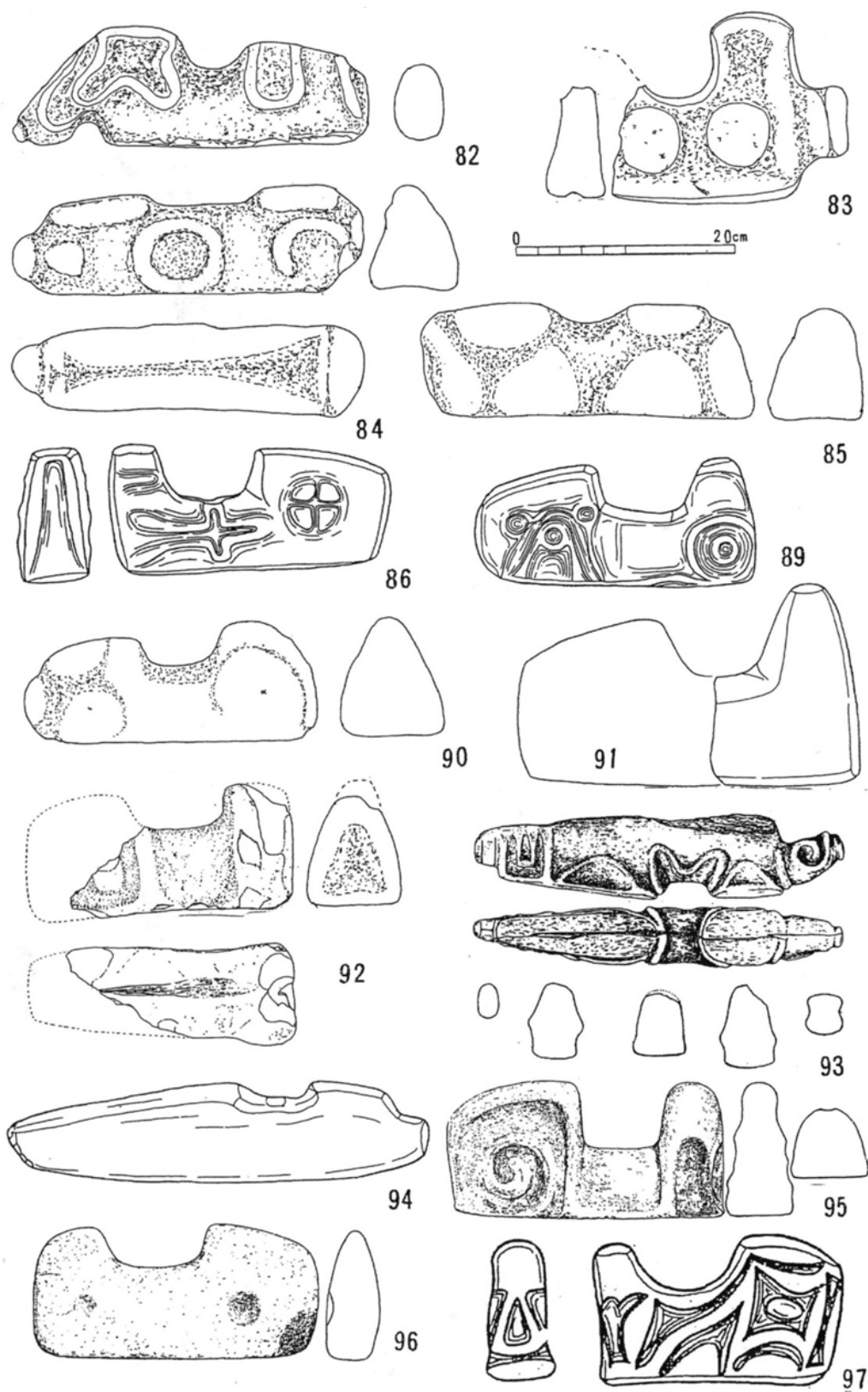


飛驒の御物石器集成図版（正）2

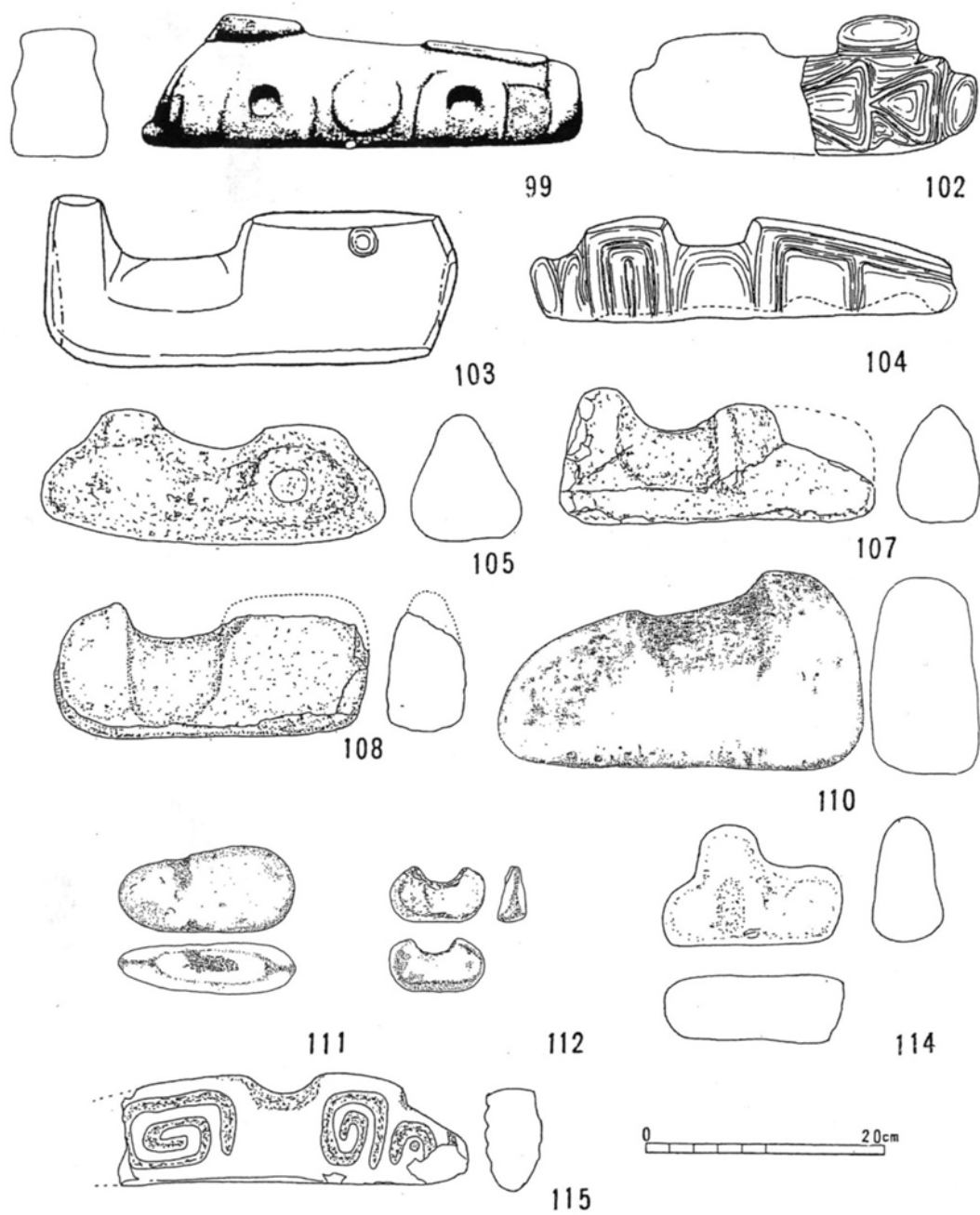




飛驒の御物石器集成図版（正）4



飛驒の御物石器集成図版（正）5



7. 考察

1. 分布について

美濃地方における御物石器の分布については、型式、正確な出土地点の判明する資料 45 点から分布図を作製し、これに飛驒地方の 96 点の分布状況を加えたものを第 14 ～ 17 図として提示した。全図の数量分布については第 2 表にて示した。

岐阜県全般における型式別の分布状況についてみてみよう。

先ず濃飛型偏平頭式の分布は、飛驒南部と美濃の北部山間地帯に集中し、北飛驒や西濃地方に見られない事が特徴的である。これは増子文献（142）のⅠ期と同様の傾向を示す。円文や浮線文が主体で、瘤や尾のつくものが多い。水系は太平洋側であるが、分水嶺上である（第 14 図）。

濃飛型面包頭式は、やや飛驒に分布を広げているが美濃山間部にも散在し、無文個体が多くなる。宮川水系（日本海側）が数を増す（第 16 図）。

北陸型も散漫な分布を示すが、特に北飛驒に片寄る傾向は、北陸地方とのかかわりが強い事を示し、石材の変化にも反映している（第 17 図）。

偏平頭式と棒状頭式の分布状況についての傾向は、橋本（90）及び増子が論じた部分が大きく異なる点はない様であるが、数量においては美濃と飛驒では逆転し、飛驒が圧倒的な量を占める点については、重要な変化としてとらえられる。棒状頭式は最も御物石器の隆盛期とみなされる分布を示し、飛驒と美濃に全く似た形状や文様を持つ個体も多くみうけられる。特に頭頂溝・尻面溝・背面溝の具備は、特徴的といえよう。大きさも重量も小型化・軽量化の傾向がある（第 15 図）。

2. 文様について

御物石器の無文個体の比率は、面包頭式で 4 分の 3、棒状頭式で 2 分の 1、偏平頭式は美濃のみで 3 分の 1、北陸型は飛驒のみで 3 分の 1 である（第 4・5 表）。

橋本は、一部の沈文を除いて土器文様との関連が不鮮明であり、むしろあまり関連性を持たないとするのが正しいようであるとする（文 90）。増子は、Ⅰ期：美濃を中心に連結三叉文、南飛驒を中心に円文が広がる。Ⅱ期前半：玉抱き三叉文。Ⅱ期後半：E 字状文・E 字状渦巻文という地域性を導き出した。

今回の集成においても、連結三叉文・浮文は美濃の偏平頭式に特徴的に使われ、円文は棒状頭式に多く採用され全地域に広がりを見せる、十字文は連結三叉文の変化において好んで用いられている事が明確となった。

最も特徴的な部分は、棒状頭式に頭頂溝・尻面溝・背面溝が多く備えられる点であり、これは異形石器の項で述べた様に、動物表現の一環として表された文様（瘤・尾・角を含む）として捉えられる要素でもある。

石器の表と裏とで文様が異なる資料は美濃に 2 点（No.4・19）あり、また裏に文様のない資料も、飛驒（84）と美濃（24）に 1 点ずつある。これは、御物石器が置かれる事を前提とした場合、正面を意識していると解釈されよう。一方、加刻説も橋本の論じている部分である。

3. 石材について

使用石材についての飛驒と美濃の傾向については特に相違は見られないが、外縁帯に属する飛驒での深成岩・変成岩の比率の多さと、河川における火山岩や砂岩の転石を利用した状況を反映する美濃のあり方などに、異なる部分があると思われる。いずれにしても砂岩系石材の多さが特筆される。

4. 長さ・重量について

美濃の例から見た御物石器の長さの相違については、北陸型平均 35.5cm、面包頭式 32.1cm、偏平頭型

29.6cm、棒状頭型 26.0cm で棒状頭型が最も小さく厚みも薄い傾向がある。飛驒でも、北陸型 34.3cm、偏平頭型 32.8cm、面包頭型 25.2cm、棒状頭型 25.1cm と、やはり棒状頭型が最小である。

重量に関しては沢田氏による貴重な報告があるが（文献 157 他）、測定資料の少なさは否めず、十分な検討は出来ない。10 点の資料であるが、偏平頭・面包頭（平均 5.1kg）に比して、棒状頭（平均 3.4kg）が軽い傾向はある。

5. 底面形態について

北陸型の特徴として逆三角形の断面を持つという事は、平置を前提としない点において大きい。濃飛型に比して確かに安定性に欠ける形状ではあるが、美濃の No.18・34・39・41・45・48 や飛驒の No.32・34・41・46・50・73 のように、不安定と記述される、長円形・長方形断面のものもいくつかみられる。逆に北陸型面包頭とされてきたもの（飛驒 60）が実際は方形で、安定性がある事も判明している。これは、濃飛型と北陸型が並行して存在している可能性が考えられる部分であろう。

橋本は、北陸型の一部に使用による「荒れた」部位があると解釈しているが、増子はこれを、製作時の研磨の過程として捉え、技術の相違を論じた（文献 142）。濃飛型には全くみられない要素であり、別の観点が必要とされよう。

底面の状況について、凹みや刻文を備える資料は美濃で 2 点、飛驒で 6 点あるとされるが、美濃の 15・18 は文献のみで未確認、飛驒の 12・83 も確認出来ていない。石冠によく見られる様な顕著な凹みではないが、飛驒の 10（棒状頭）・85（偏平頭）は円形の敲打の凹み、同 84（偏平頭）は連結三叉文が底部全体に浅く刻み込まれる。同じく 92（棒状頭）は、滑らかな底面に線状の溝が走るが、後世に砥石として使用された可能性もある（写真図版 5-1・2・3）。

84 の資料における連結三叉文の沈刻は、貴重な例と見たい。新潟県細池遺跡の例（第 9 図、文献 80）は、御物石器最北の出土例であると共に、発掘調査出土品である点で重要度が高い。報告書によると、Ⅲ-2 号土壌内より骨片と共に出土したとあり、破損品であるが瘤・尾のつく偏平頭 3 式（橋本による）で晩期前半の時期が与えられ、御経塚遺跡例とほぼ同じ時期とされる。底面には四角く深い抉り込みが備わり、今のところほとんど類例を見ない（写真図版 5-4）。

6. 被火熱・破砕個体について

御物石器の遺存率については、完形ないしほぼ完形個体が全体で 72% を占め、4 分の 1 以下の破片で発見される個体は 5% に過ぎない（第 6 表）。これは御物石器が毀される事の少ない種類の祭祀遺物であった事を示しているが（註）、一方で美濃の旧明方村立博物館の資料群のように、3 分の 1 や 4 分の 1 個体が集中している地域のある事、また北陸型に被火熱・破砕個体が発掘によって示されている事など、通常とは異なる様相もみられる。飛驒宮川町宮ノ前遺跡では 8 片の粘板岩製御物石器が焼けた状態で出土し、細かく打ち砕かれた意図的なものであるとされる（文献 150、第 12・13 図）。いんべ遺跡出土品（美濃 50）も破砕個体であり、火熱によって割れ易くなる粘板岩系の石材である事も考慮しつつ、ある時期、何らかの火を伴う儀礼の存在を想定する必要がある。

発掘調査による成果として、金沢市米泉遺跡の被火熱例（文献 119）、御経塚遺跡の埋納例（文 47、第 8 図）新潟県寺地遺跡の人骨を伴う遺跡からの出土例（文献 116）などが挙げられ、正式ではないが美濃の土京例（No.24）のように立石遺構からの出土例（文 152）もある。将来いっそうの発掘調査の成果が待たれる面は大きい、あまり期待できない部分でもある。この点で、遊離資料として扱われる既存の資料に対し、現在出来る限りのデータを集積し、検討を加える努力が望まれよう。関係者による証言、例えば湧水地点における発見（飛驒 34・93）、川辺での発見（美濃 7）、水辺で直立状態であったという知見（美濃 25）等、生活空間

ではない場所での何らかの行為の痕跡も視野に入れつつ、研究を進めることが必要とされよう。

(註) ちなみに、石冠の遺存率は、球頭形 (I A) で 112 点中 80 点が完形ないしほぼ完形 (71%)、斧状 (II A) は 137 点中 117 点 (85%)、独鈷石では I-3 型石錘タイプを除く 66 点中 44 点 (67%) というデータが出ており (文献 208・209・213)、これらも基本的には毀される事の少ない遺物であったと捉えられる。等が含まれる

		面包頭	扁平頭	棒状頭	北陸型	不明	計
岐阜	飛驒	23	7	54	12	18	114
	美濃	8	18	19	3	3	51
富山		4	1	14	6	4	29
石川				11	9	3	23
愛知		1	1	4	3	3	12
新潟			2	4			6
福井		1	1	1	1		4
長野		1	1		1		3
静岡			1	1			2
岡山					2		2
滋賀		1			1		2
和歌山					1		1
兵庫				1			1
奈良					1		1
三重					1		1
鳥取				1			1
大分					1		1
不明				1	1		2
計		39	32	111	43	31	256

第2表 全国の御物石器の型式一覧表（2022年現在）

	飛驒 (%)	美濃 (%)	計
濃飛型 面包頭	23 (24)	8 (17)	31 (22)
濃飛型 扁平頭	7 (7)	18 (38)	25 (17)
濃飛型 棒状頭	54 (56)	19 (39)	73 (51)
北陸型	12 (13)	3 (6)	15 (10)
計	96 (100)	48 (100)	144 (100)

第3表 飛驒と美濃の御物石器の一覧表
(第5章参照)

	面包頭	扁平頭	棒状頭	北陸型
無文	18		33	4
円文	2	2	7	
十字文			4	
三叉文		1	1	1
渦巻文		1	2	
浮線文		5	9	6
沈線文		1		
E字文				9
有孔			2	
頭頂溝			9	
尻面溝			2	
背面溝			12	
角			7	2
尾		4	1	2
瘤	1	6	3	4
底面凹み	3	2	1	

第4表 飛驒の御物石器の文様及び属性一覧表
(第5章参照) (文様の重複あり)

	面包頭	扁平頭	棒状頭	北陸型
無文	6	6	8	
円文		3	4	
十字文	1	1	1	1
三叉文	1	3	1	1
渦巻文			2	
浮線文		6	7	4
沈線文	2		2	
E字文				
有孔				
頭頂溝		1	5	
尻面溝			3	
背面溝			6	
角			4	
尾	2	16	2	1
瘤	2	15	3	2
底面凹み			2	

第5表 美濃の御物石器の文様及び属性一覧表
(文様の重複あり)

	飛驒	美濃	計
完形～ ほぼ完形	67 (72%)	35 (73%)	102 (72%)
3/4～ 1/2	20 (21%)	7 (15%)	27 (19%)
1/3	1 (1%)	1 (2%)	2 (1%)
破片	5 (5%)	2 (4%)	7 (5%)
未製品	1 (1%)	3 (6%)	4 (3%)
計	94	48	142

第6表 御物石器の遺存率（不明文を除く）

堆積岩	砂岩	22
	泥岩	1
	粘板岩	5
火山岩	安山岩	6
	流紋岩	9
	凝灰岩	7
深成岩	花崗岩	3
	花崗閃緑岩	3
	花崗斑岩	1
変成岩	緑色片岩	4

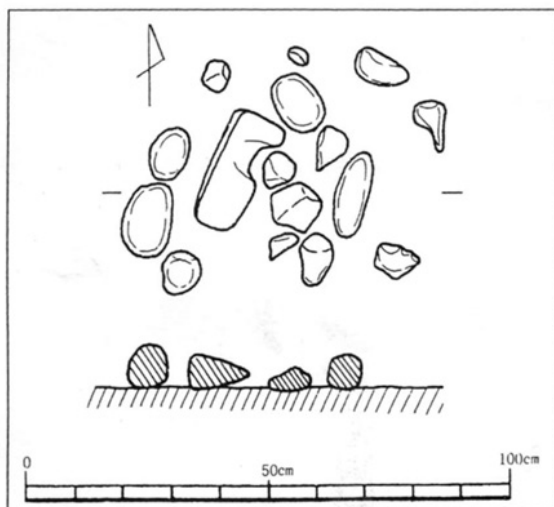
第7表 飛驒の御物石器石質一覧表

堆積岩	砂岩（系）	17
	粘板岩（系）	3
火山岩	火山岩系	5
	安山岩	2
	流紋岩	3
	凝灰岩	5
深成岩	花崗岩（系）	2
	ハンレイ岩	1

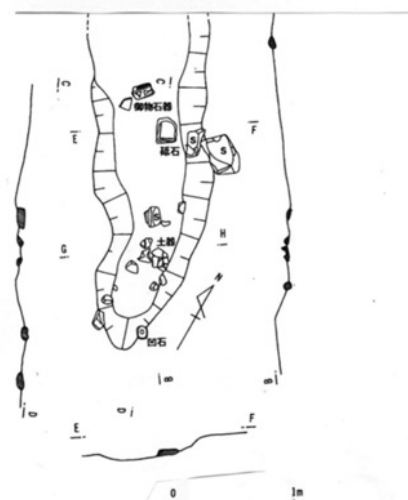
第8表 美濃の御物石器石質一覧表

石冠	数量	凹み有	%
	83	38	46%
	80	66	83%
	18	5	28%

第9表 石冠（ⅠA・ⅡA・ⅢA）の凹み保有率
(文献208・209・212)



第8図 御経塚遺跡の御物石器埋置遺構実測図(文献47)



第9図 細池遺跡第2号土壙実測図(文献80)



第10図 細池遺跡御物石器出土状況(第2号住居址)



第11図 土京落合の立石(旧)



第12図 宮ノ前遺跡第2次調査御物石器出土状況(文献150)



第13図 宮ノ前遺跡第2次調査御物石器

8. おわりに

筆者が飛驒の御物石器について初めて見解を述べたのは、1991 年「御物石器研究の視点」（文献 123）であった。橋本正氏による磨擦器型祭器論に対し、「——御物石器研究の視点に機能論を加えた事は重大な展開である。しかし変質を遂げてしまった特殊石器に本来の機能の痕跡を求める事は困難を伴うであろうし、祭祀の形態そのものが形式化している場合も多いであろう。まず御物石器の初源形態とその時期の特定が、最も重要な課題であり、そしてより多くの資料による厳密な観察をととして研究を進めてゆかねばならない。御物石器に、頭初猪頭形と名付けたその感覚の様に、形態模倣説はなお有効であろうし、一部の石冠に魚の造形をみるように、御物石器に動物の表徴を求める事は、縄文人の豊猟儀礼の切実さに基づいた、蓋然性の高い視点と思われる。——」と記したこの提言は、今もって変わらぬ筆者の視点である。1999 年には『縄文時代』10 号に「遺物研究 御物石器」を執筆し（文献 153）、2012 年に至ってようやく『飛驒の御物石器』を上梓することが出来た（文献 200）。

その後は、独鈷石や石冠類型についての論考に追われ、御物石器からはやや疎遠になっていたが、所属する研究会の活動で美濃方面に出かけた折の新たな資料に刺激を受け、岐阜県全域を網羅する責務に追われることとなった。幸いにも美濃の沢田伊一郎氏によるレベルの高い報告が会の機関紙『どっこいし』になされた事で視界は開けた感があったが、全ての資料を確認することはほぼ不可能であり、いきおい文献に頼らざるを得ない部分が多かった点は、自らの非力によるものである。

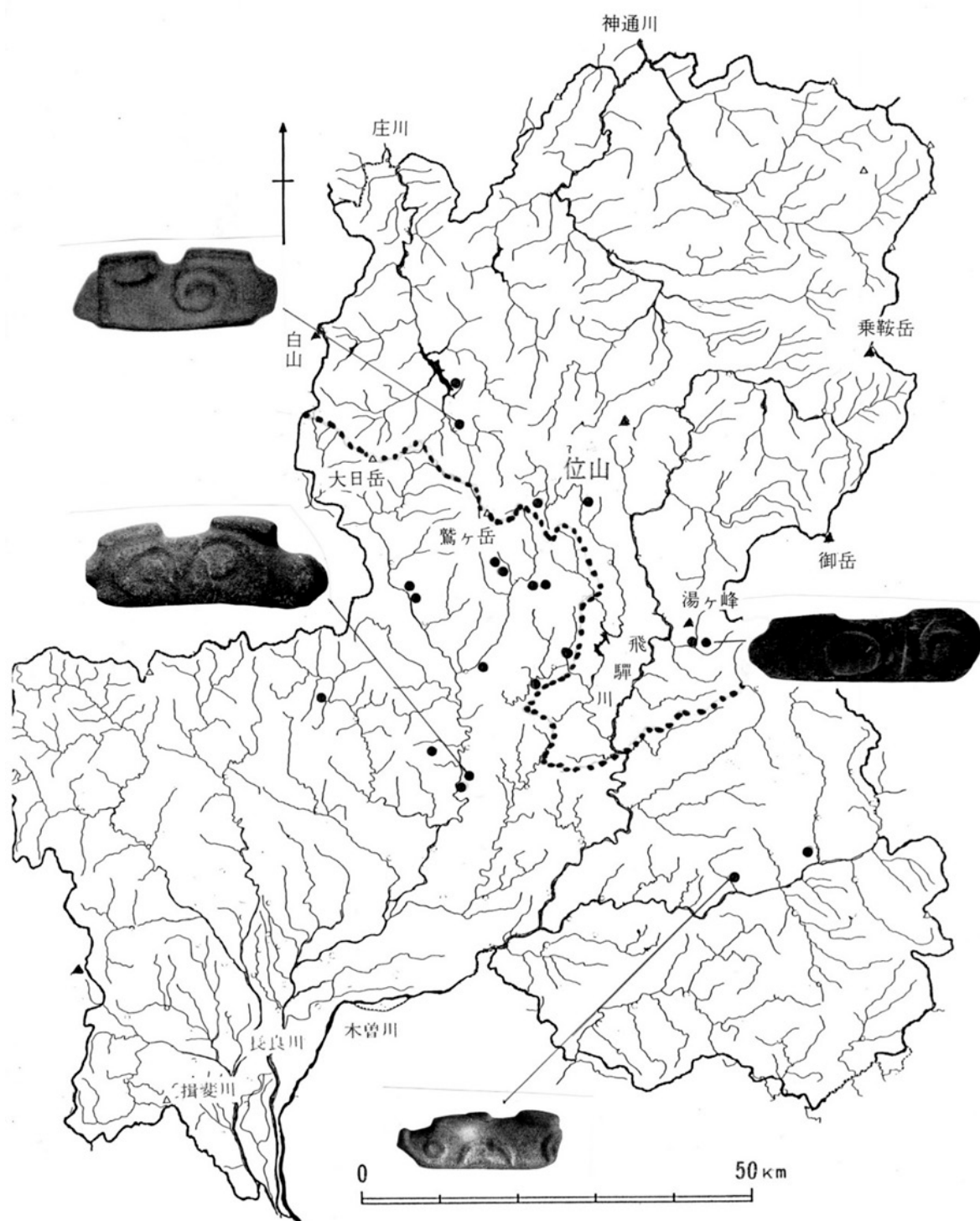
御物石器研究は、1996 年の橋本正氏の研究により確固たる位置付けがなされ、まさにバイブル的存在としてなお定説の地位を保っていると言っても過言ではなかろう。それでも過去幾多の研究者が感じ、言及して来たように、動物がモデルとなっているとする考え方には根強いものがある。単なる「思いつき」と橋本氏は切り捨てたが、全国の 65% が集中する岐阜県におけるその実態の把握なしには、御物石器は説明出来ないと考える。

今回の集成と考察で御物石器誕生前夜の様相を探ることにより、少し視界が開けてきた気がする。頭頂溝や背面溝、瘤・尾といった属性がどう生まれ消えていったかの過程を探ることで、1 つのヒントが生まれ、また底面形態の不安定な要素が早い段階にも存在するといった点でも、新しい発想を生み出す可能性がある。

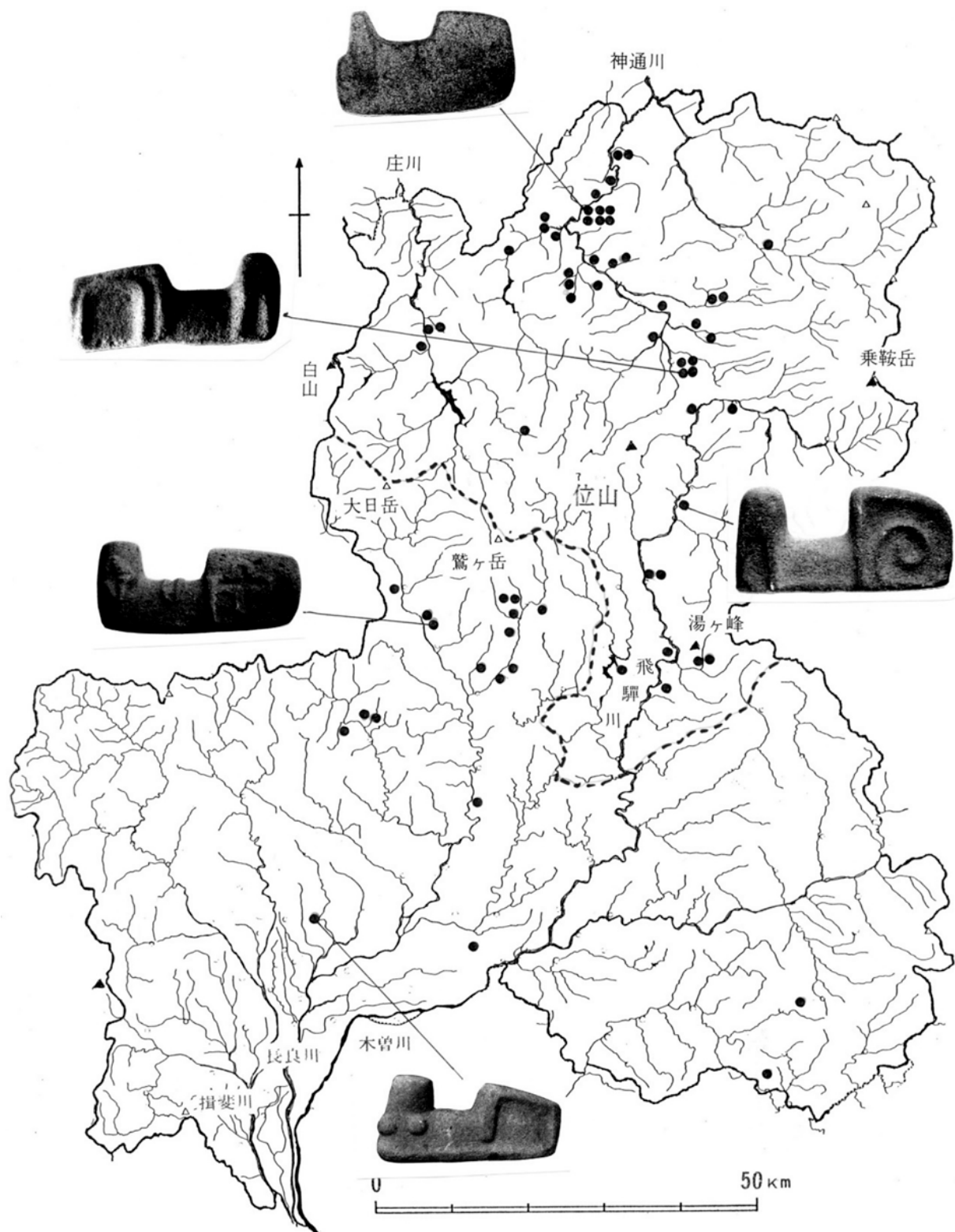
それにつけても、御物石器は不思議な存在である。美濃や飛驒の神社にご神体あるいはご神宝として祀られている資料の多さは驚きに値する。得体のしれない不可思議な造形に対する特別視や畏敬の念といったものは、縄文時代も今も変わらないのであろう。地元の宝として守り続けるその思いが、時に神社に奉納され今に残されているのである。それは、天然記念物オオサンショウウオの一大棲息地である奥美濃の山間地帯での、それらに対する想いと変わるものではなかろう。異形石器と呼ばれるものの存在は、その地域における種々の要素と深くかかわっていると考え、それらをよく観察し、発想を豊かにする試みによって、必ずや思いつきではない何かを発見する事が出来るであろう。

相も変らぬ、はなはだ雑駁な論ではあるが、発表の機会を与えて下さった光ミュージアムの方々に深甚の謝意を表すとともに、お世話になった方々のご芳名を記して感謝の意に変えたいと思う。

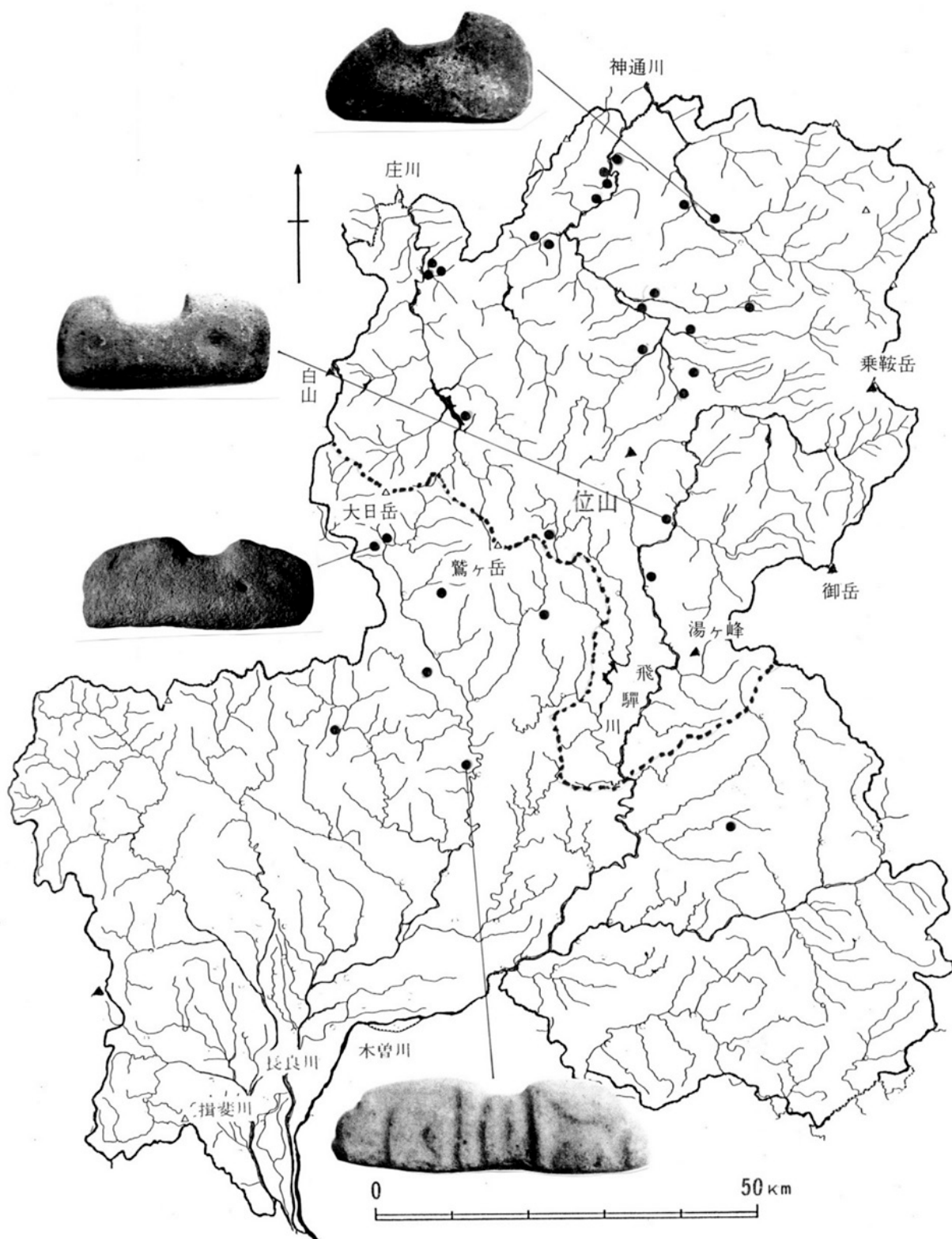
岡本 孝之 佐藤 とき子 沢田 伊一郎
岐阜県博物館 明宝歴史民俗資料館（旧明方村立博物館） 長水寺



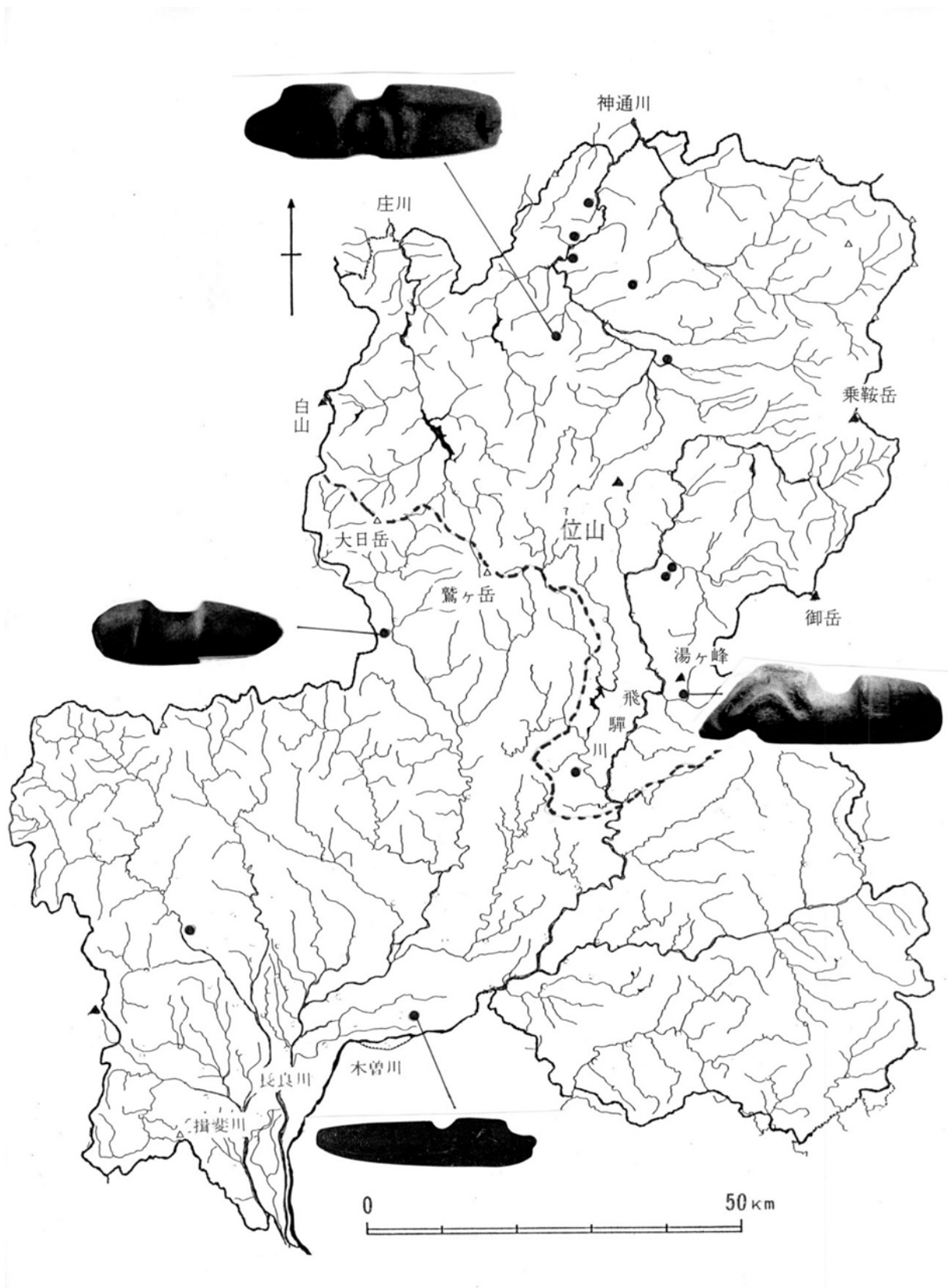
第 14 図 濃飛型偏平頭式分布図



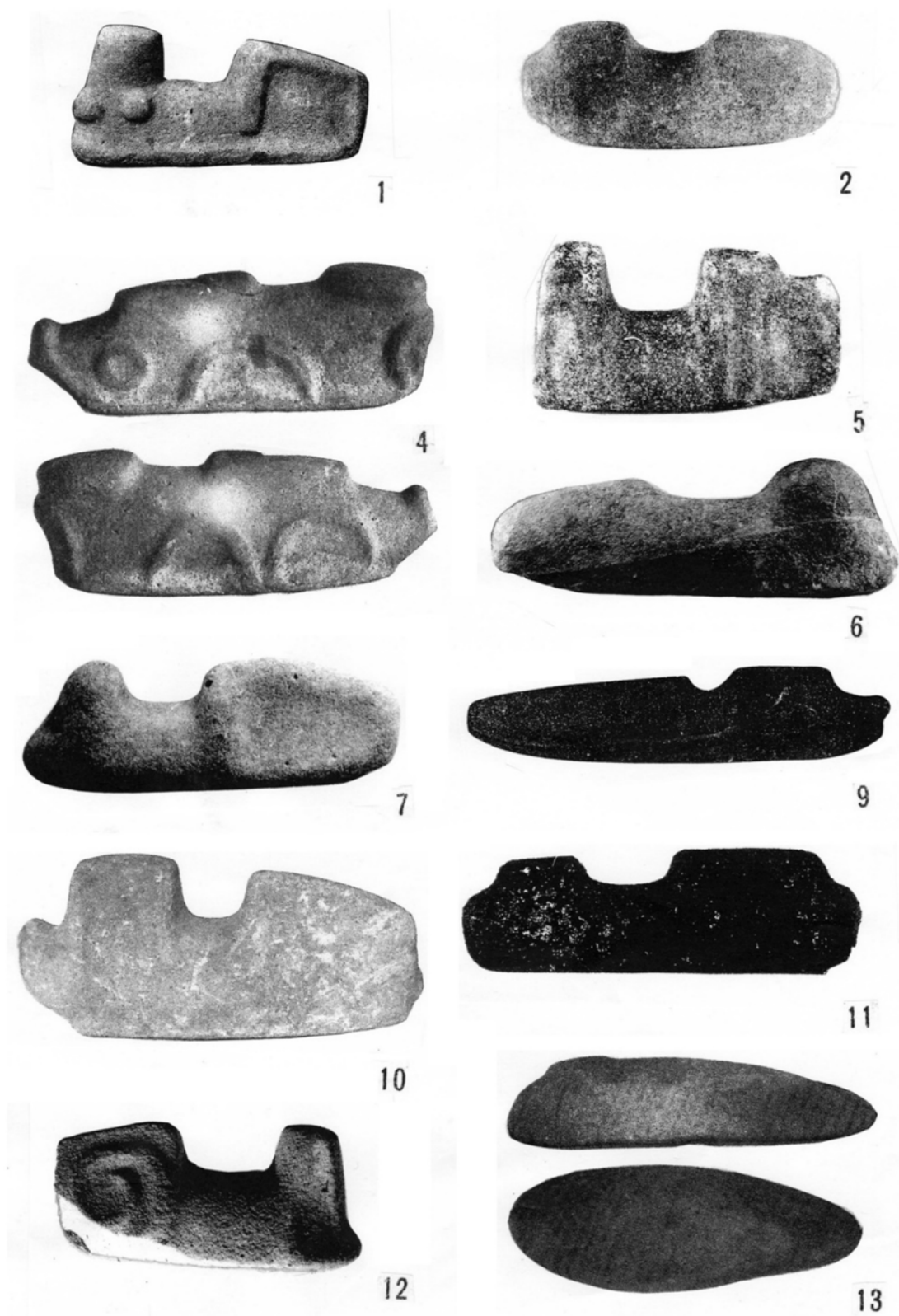
第 15 図 濃飛型棒状頭式分布図



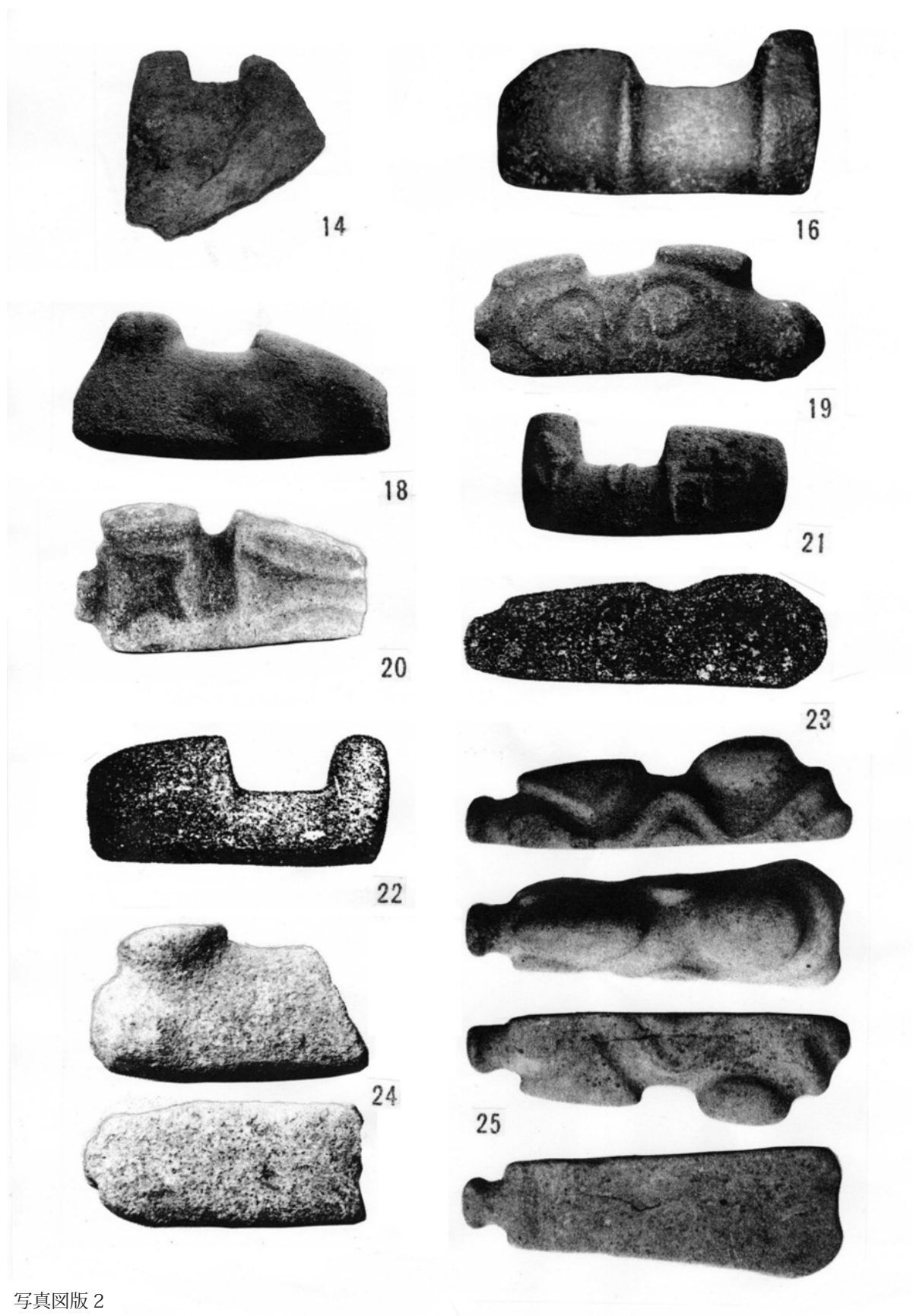
第 16 図 濃飛型面包頭式分布図



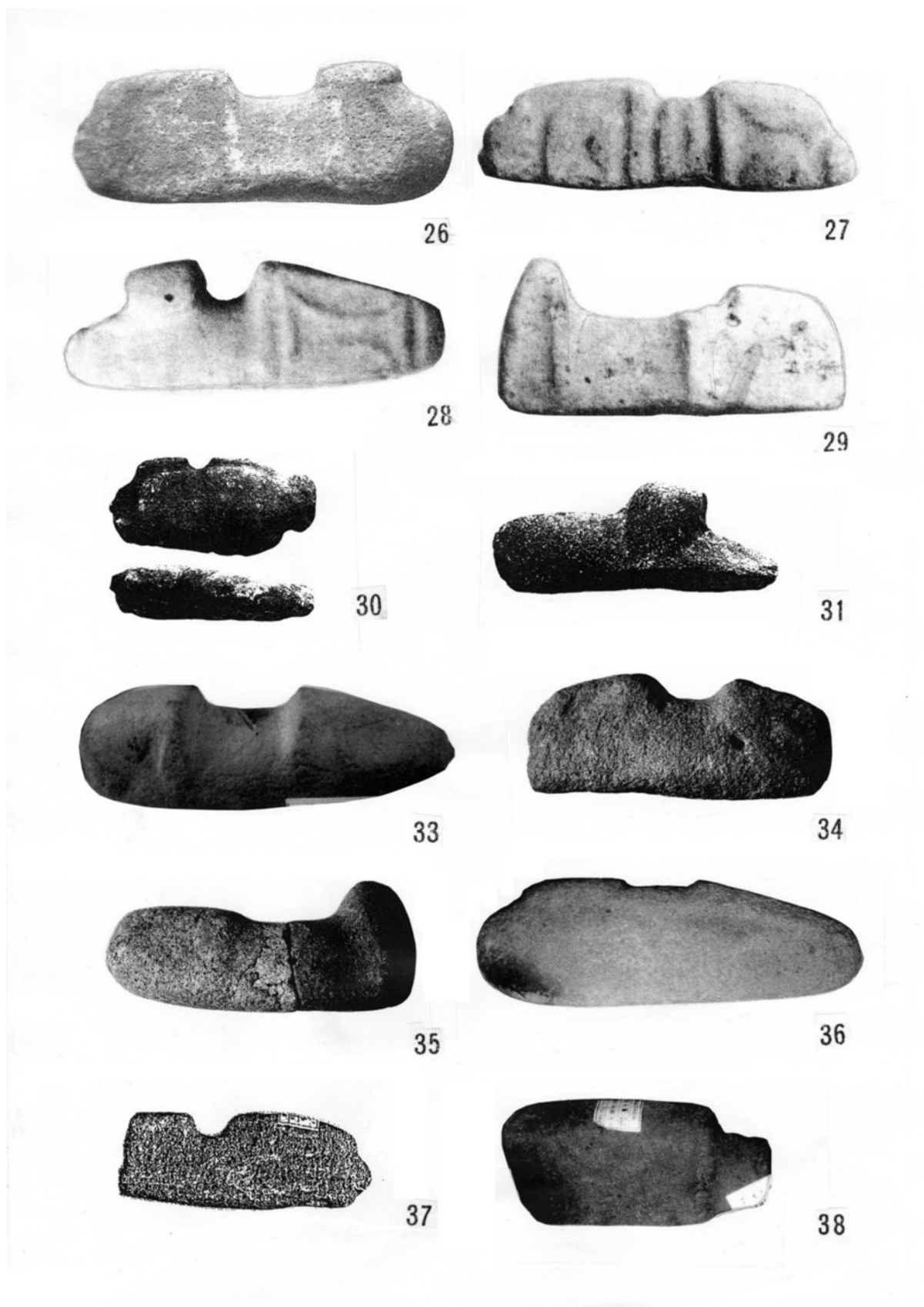
第 17 図 北陸型面包頭・偏平頭式分布図



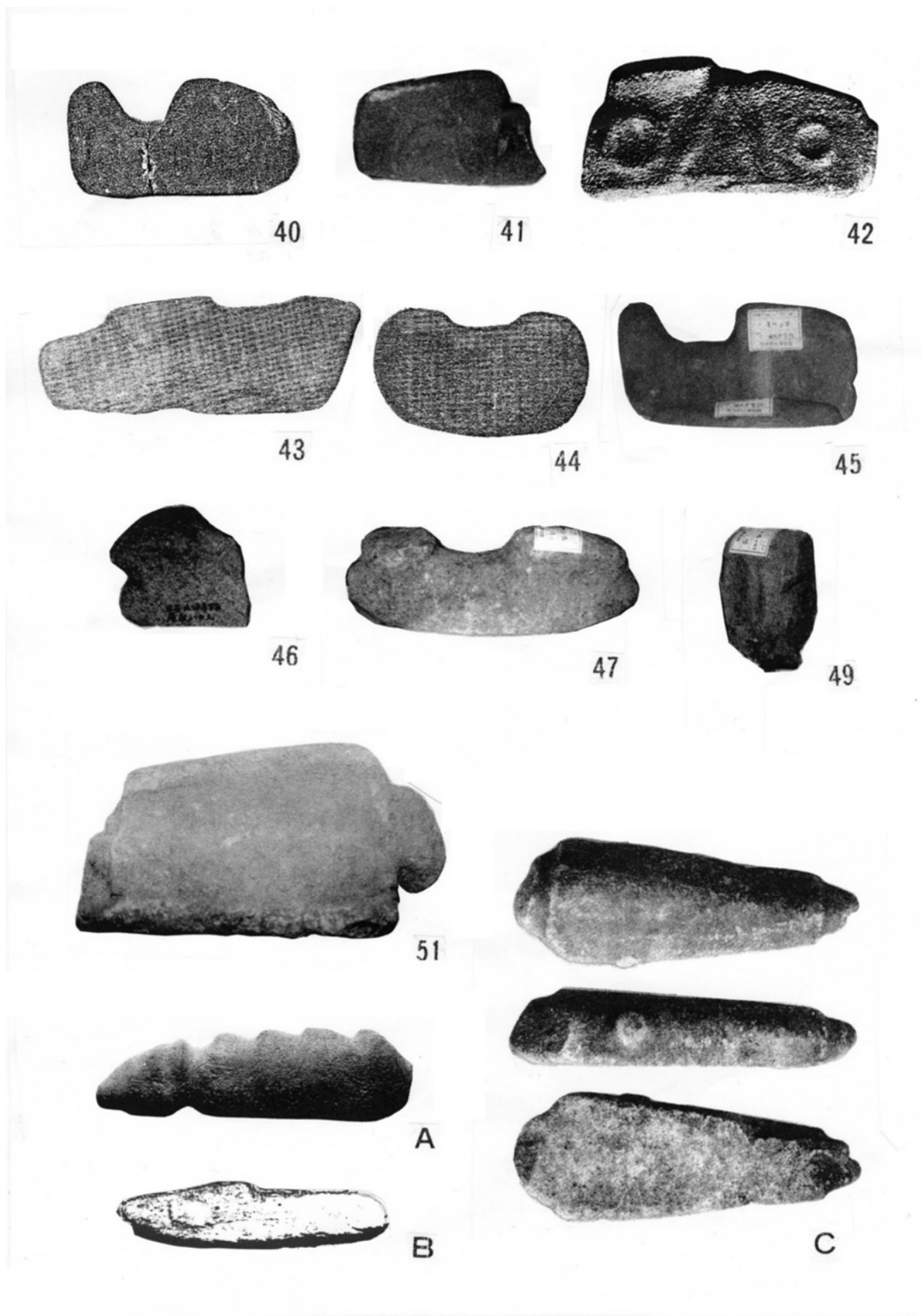
写真図版 1



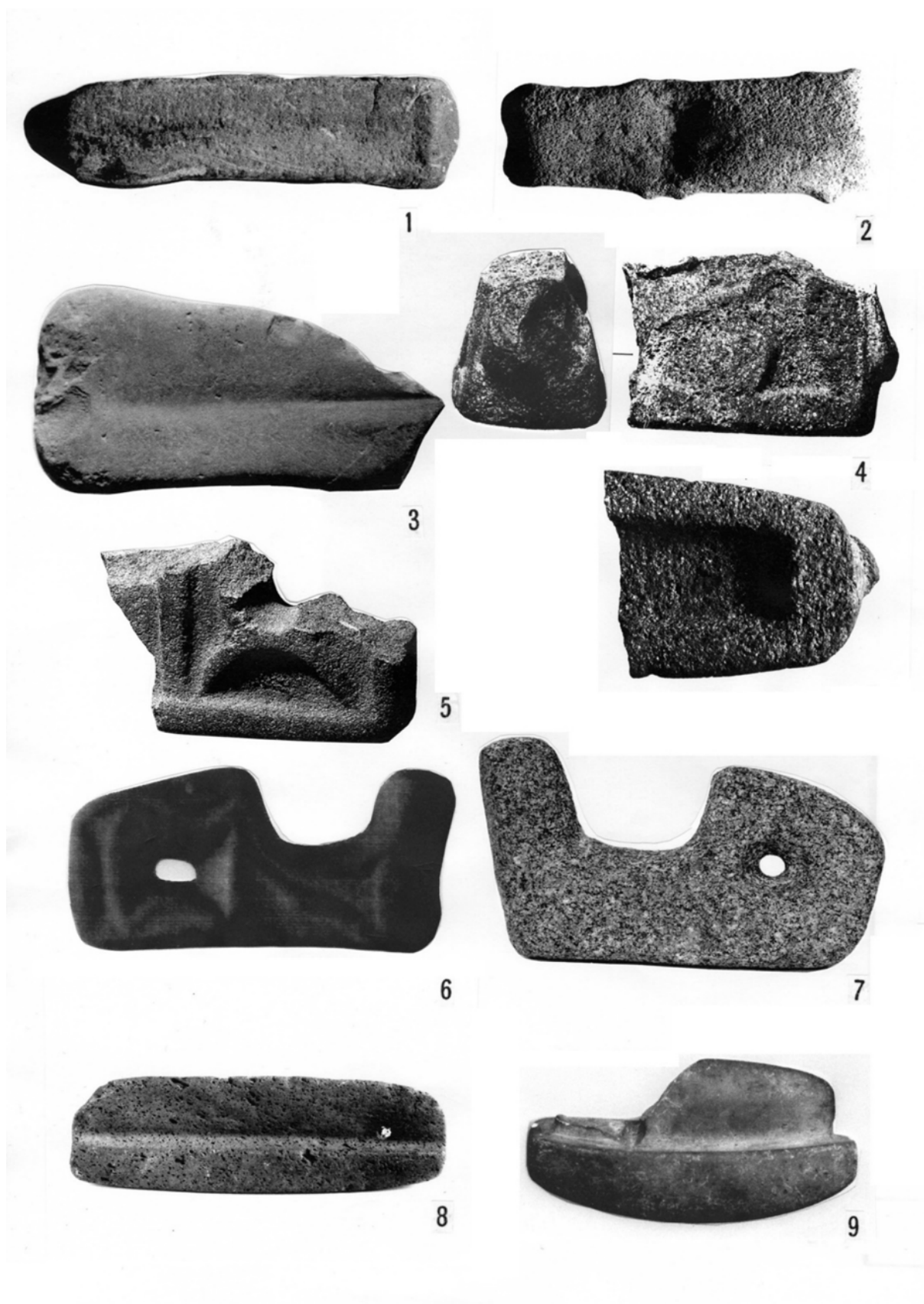
写真図版 2



写真図版 3



写真図版 4



写真図版 5

9. 御物石器文献目録

1. 神田孝平 1886 『日本大古石器考』
2. 佐藤泰郷 1886 『日本古物小集会図録 千代の鏡』
3. 神田孝平 1888 「御物大石器に似たる石器」『東京人類学会雑誌』4-32
4. 神田孝平 1889 「第27版図解」『東京人類学会雑誌』4-41
5. 大野雲外 1904 「飛驒発見石器に就て」『東京人類学会雑誌』19-220
6. 柴田常恵 1912 「飛驒国益田郡小坂町長瀬発見の奇形石器
7. 袖川村 1917 『袖川村誌』
8. 朝戸高山 1919 『鶯夢軒所蔵石器図 石のまきもの』
9. 大野雲外 1921 「或る奇形の石器に就て」『民族と歴史』6・2
10. 岡村利平 1921 『飛驒編年史要』
11. 山本栄一 1935 『恵那郡の石器時代』
12. 早川荘作 1926 『越中石器時代民族遺跡遺物』
13. 島田貞彦 1928 『有史以来の近江』
14. 林 魁一 1928 「美濃郡上郡の異形石器」『考古学雑誌』18・9
15. 林 魁一 1928 「美濃国恵那郡福岡村の石器時代遺跡及び遺物」『人類学雑誌』43-11
16. 犬塚行蔵 1929 「御物大石器と飛驒の異形石器」『考古学雑誌』19-11
17. 犬塚行蔵 1929 「益田郡萩原町縣神社石器時代遺物観察記」『飛驒史壇』8-12
18. 中谷治宇二郎 1929 『日本石器時代提要』
19. 倉田一郎 1930 「越中国高岡に於ける石器時代遺跡」『人類学雑誌』45-5
20. 林 魁一 1930 「御物石ニ就イテ」『山美水濃』5
21. 林 魁一 1930 「美濃国郡上郡東村の石器時代遺跡及び遺物」
22. 林 魁一 1930 「美濃国郡上郡奥明方村小川の遺跡」『人類学雑誌』45-10
23. 林 魁一 1932 「美濃国発見御物石の2例」『人類学雑誌』47-12
24. 林 魁一 1933 「飛驒高山附近の石器時代遺物及遺跡」『史前学雑誌』5-2
25. 加藤輝次 1935 「朝戸高山師遺稿抄」『飛驒考古学会会報』2
26. 喜田貞吉 1933 「所謂御物石器に関する一考察」『考古学』4-7
27. 羽柴雄輔 1933 「神田孝兵氏一行の飛驒旅行 ― 青山入夢日記より」『ひだびと』11-3
28. 家高荒次郎 1935 「木曾に復御物石器」『信濃』4-5
29. 加藤輝次 1935 「二つの異形枕石」『ひだびと』3-8
30. 飛驒考古土俗学会 1935 『飛驒石器時代遺跡地名表』
31. 林 魁一 1936 「益田郡川西村出土の御物石器」『ひだびと』4-8
32. 林 魁一 1936 「美濃北濃村前谷の遺跡及び遺物」『考古学論叢』3
33. 赤木清 1937 「白川村木谷の石器時代遺跡」『ひだびと』5-8
34. 赤木清 1937 「吉城郡坂下村打保出土の石冠と枕石」『ひだびと』5-10
35. 小林行雄他 1938 「近江坂田郡春照村杉沢遺跡」『考古学』9-5
36. 江馬三枝子 1938 「表紙の枕石（御物石器）について」『ひだびと』6-3
37. 林 魁一 1938 「御物石器即ち俗称枕石に就いて」『人類学雑誌』53-9
38. 赤木清 1938 「大八賀村山口の森下遺跡(2)」『ひだびと』6-7

39. 吉田富夫 1940 「第八高等学校収蔵美濃国稲葉郡蘇原村の石器」『考古学』11-4
40. 多賀秋五郎 1941 『飛驒史の研究』
41. 後藤吉郎・多賀秋五郎 1943 『飛驒文化史概説』
42. 藤沢宗平 1949 「木曾谷の御物石器」『信濃』1-3
43. 小林行雄 1951 『日本考古学概説』
44. 高山市 1952 『高山市史』上
45. 信濃史料刊行会 1956 『信濃考古総覧』下巻
46. 岐阜県教育委員会 1957 『荘白川総合学術調査報告書』
47. 高堀勝喜 1958 「金沢近郊出土の御物石器」『古代文化』2-5
48. 大江まさる・下形武 1958 『上宝村の先史時代』
49. 国府村 1959 『国府村史』全
50. 小林行雄 1959 「御物石器」『図解考古学辞典』創元社
51. 澄田正一 1960 「荒城神社縄文時代遺跡」『岐阜県指定文化財調査報告書』4
52. 久永春男 1961 『愛知県守山市牛牧遺跡』
53. 丹生川村 1962 『丹生川村史』全
54. 岐阜県教育委員会 1962 『岐阜県遺跡目録』
55. 萩原町 1962 『萩原町誌』
56. 成瀬満 1963 『木曾川流域の石器時代文化』
57. 紅村弘 1963 『東海の先史遺跡』総括編
58. 辻合喜代太郎 1964 「十字文様のある石製品」『飛驒春秋』9-2
59. 吉田格 1964 「石製品」『日本原始美術』2
60. 高堀勝喜 1964 「金沢市近郊八日市新保並びに御経塚遺跡の調査」『押野村史』
61. 大江まさる 1965 『飛驒の考古学Ⅰ』
62. 小坂町 1965 『岐阜県小坂町誌』全
63. 天羽利夫 1966 「御物石器の研究」『考古学雑誌』52-1
64. 橋本澄夫 1967 「石川県鶴川町発見の御物石器」『古代学研究』47
65. 榊原芳久 1968 「岐阜県美並村発見の御物石器」『文化人類学研究会会報』4-1
66. 大参義一 1968 「御物石器」『岐阜県指定文化財調査報告書』11
67. 宮村 1968 『宮村誌』
68. 白川村 1968 『白川村史』
69. 大参義一 1968 「前田遺跡出土石器類」『岐阜県指定文化財調査報告書』11
70. 吉田富夫 1969 「御物石器用途新考」『古代文化論攷』財団法人古代学協会
71. 大参義一・安達厚三 1972 『岐阜県史』通史編原始
72. 岡本東三 1972 「奈良市発見の御物石器について」『考古学雑誌』58-2
73. 河本清・枝川陽・栗野克己 1972 「岡山県真庭郡落合町西原出土の線刻石製品」『考古学雑誌』58-2
74. 巽三郎 1972 「紀伊発見の御物石器」『考古学雑誌』58-2
75. 橋本正 1972 「縄文後・晩期」『富山県史考古編』
76. 四柳嘉章 1973 「晩期遺跡の立地と石器」『日本考古学協会昭和48年度大会発表要旨』
77. 橋本澄夫 1973 『野々市町御経塚遺跡』
78. 大参義一・巽淳一郎他 1974 『大和村の遺跡』大和村教育委員会
79. 小島一夫・巽淳一郎・高木洋・大槻伸 1974 『白鳥町の遺跡』白鳥町教育委員会

80. 寺村光晴・中島宏 1974 『細池遺跡』糸魚川市教育委員会
81. 高堀勝喜 1974 「今田の御物石器」『富来町史資料編』
82. 十日市町教育委員会 1974 『十日町市苗場山麓地域農業開発事業予定区域内分布調査(第1次)概要』
83. 荘川村 1975 『荘川村史』
84. 金山町 1975 『金山町誌』
85. 江坂輝弥 1975 「なぞの古代遺跡と遺物」『日本古代史の旅 2. 縄文・弥生 日本のあけぼの』
86. 岩野見司・能登健 1975 『一宮市文化財調査報告 2 馬見塚遺跡範囲確認調査報告付載馬見塚遺跡出土の御物石器・祭祀遺物』
87. 橋本正他 1975 『富山県朝日町柳田遺跡・柳田古墓緊急発掘調査概報』
88. 美並村 1976 『美並村の歴史』
89. 土田吉左衛門 1976 「家ノ下遺跡の石冠および御物石器について」『飛驒春秋』21-10
90. 橋本正 1976 「御物石器論」『大境』6
91. 清見村 1976 『清見村誌』
92. 岐阜県立博物館 1979 『濃飛の先史時代』特別展図録
93. 萩原町教育委員会 1980 『萩原の史跡と史話』はぎわら文庫 3
94. 下呂町 1980 『飛驒下呂』図録
95. 岐阜市教育委員会 1980 『岐阜市埋蔵文化財展』資料
96. 鈴木道之助 1981 『図録 石器の基礎知識Ⅲ 縄文』柏書房
97. 能登健 1981 「信仰にかかわる遺物(Ⅰ)」『神道考古学講座』第1巻 前神道期
98. 金沢市教育委員会 1981 『金沢市中屋遺跡』
99. 加藤三千雄 1982 「御物石器の概要」『能登町史』
100. 金子裕之 1982 「縄文時代Ⅲ(後期・晩期)」『日本の美術』191 至文堂
101. 名古屋市博物館 1982 『東海の縄文時代』特別展図録
102. 高堀勝喜 1983 『野々市町御経塚遺跡』野々市町教育委員会
103. 大江まさる・野村宗作・垣水富郎 1983 『巾通り遺跡』白川村教育委員会
104. 辻森由美子 1983 「石製品」『御経塚遺跡』
105. 渡辺誠 1983 「御物石器」『日本考古学小辞典』ニューサイエンス社
106. 佐藤とき子 1984 『大和村史』原始・古代第1章 大和村教育委員会
107. 金沢市教育委員会 1984 『チカモリ遺跡 石器編』
108. 林直樹 1984 「岐阜県宮川村金清神社遺跡」『月刊文化財出土情報 3月号』
109. 能登町 1984 『真脇遺跡発掘調査概報』
110. 小島俊彰 1985 『越中五箇山平村史』
111. 古川町笹ヶ洞区 1985 『笹ヶ洞沿革史・恵比須の里』
112. 加藤三千雄 1986 「御物石器の出土状況」『真脇遺跡』
113. 南久和 1986 『金沢市新保本町チカモリ遺跡』
114. 稲野裕介 1987 「呪物」『季刊考古学』21 雄山閣
115. 富山市考古資料館 1987 『栗山コレクション目録』
116. 寺村光晴・青木重孝・関雅之 1987 『史跡寺地遺跡』新潟県青海町
117. 河合村教育委員会 1987 『下田遺跡』
118. 西脇対名夫 1988 「御物石器」『考古資料図録』辰馬考古資料館

119. 石川県埋蔵文化財センター 1989 『金沢市米泉遺跡』
120. 垣水富郎 1990 「古川町中野出土の猿石について」『どっこいし』34
121. 大江まさる他 1990 『河合村史』通史編
122. 関西大学考古学等資料室 1990 『石器資料の石質調査』
123. 吉朝則富 1991 「御物石器研究の視点」『会報斐陀』創刊号
124. 早川正一・林直樹 1992 「岐阜県古城郡宮川村家ノ下遺跡」『日本考古学年報』45
125. 三重県埋蔵文化財センター 1992 『三重の縄文時代』
126. 長浜城歴史博物館 1992 『まじない・まつり・いのり 湖北の埋蔵文化財』
127. 林直樹 1992 「柱状節理利用の石棒製作址」『季刊考古学』41
128. 岐阜県文化財保護センター 1993 『荒城神社遺跡』
129. 名古屋市博物館 1993 『縄文から弥生へ』特別展図録
130. 吉朝則富 1993 「飛驒の刻文入石皿について」『会報斐陀』3
131. 吉朝則富 1993 「飛驒のおいねずみ型石冠とその類型について」『どっこいし』44 飛驒考古学会
132. 戸沢充則 1994 『縄文時代研究辞典』東京堂出版
133. 吉田英敏他 1994 『川合遺跡群』可児市教育委員会
134. 吉朝則富 1994 「飛驒の縄文後・晩期特殊石器群」『郷土研究岐阜』69
135. 石川県立歴史博物館 1995 『真脇遺跡と縄文文化』特別展図録
136. 神村透 1995 「考古学に見る飛驒と木曾の交流」『飛驒と考古学』
137. 丸山和雄 1995 「三種の神器 石冠・御物石器・どっこいしを取りまく諸問題」『飛驒と考古学』
138. 飛驒みやがわ考古民俗館 1996 『大昔のみやがわ』
139. 藤田富士夫 1996 「婦中の先史」『婦中町史』
140. 氷見市立博物館 1996 『図録 縄文人の祈り』
141. 朝日村教育委員会 1996 『ごうろう遺跡』
142. 増子誠 1996 「御物石器の基礎的研究」『筑波大学先史学・考古学研究』7
143. 藤本健三 1997 『丹生川村史』資料編I
144. 沢田伊一郎 1997 「縄文文化における楽器についての試論 (2)―石冠・御物石器に想定される楽器―」『どっこいし』54
145. 宮川村教育委員会 1997 『家ノ下遺跡発掘調査報告書』
146. 藤田富士夫 1998 『豊田大塚遺跡発掘調査報告書』
147. 仁科章 1998 「福井県における縄文時代の祭祀遺物資料集成 (上)」『福井県立博物館紀要』7
148. 吉朝則富 1998 「古川町黒内の考古遺物」『どっこいし』57
149. 吉朝則富 1998 「山下コレクション見学記」『どっこいし』59
150. 宮川村教育委員会 1998 『宮ノ前遺跡』
151. 白川村 1998 『白川村史』上巻
152. 和良村教育委員会 1998 『和良村の文化財』3 集
153. 吉朝則富 1999 「遺物研究 御物石器」『縄文時代』10
154. 宮川村教育委員会 2000 『宮ノ前遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
155. 上枝村史編纂委員会 2000 『上枝村史』
156. 岐阜県文化財保護センター 2000 『いんべ遺跡』
157. 沢田伊一郎 2003 「郡上郡和良村の石冠・御物石器」『どっこいし』72

158. 利賀村 2004 『利賀村史』
159. 橋詰佳治 2004 『岩村町歴史資料館考古図録』
160. 岐阜県文化財保護センター 2004 『岐阜県新発見考古速報』
161. 八尾町教育委員会 2005 『八尾町埋蔵文化財分布調査報告』 VI
162. 沢田伊一郎 2005 「恵那市笠置町姫栗(堀田)遺跡と森腰遺跡」 『どっこいし』 78
163. 富山県埋蔵文化財センター 2006 『埋文とやま』 96
164. 富山県埋蔵文化財センター 2006 『特別展図録 重文境 A 遺跡出土品のすべて』
165. 中日新聞社 2007 中日新聞 12 月 11 日付記事
166. 吉朝則富 2007 「下呂市湯之島館所蔵の考古資料について」 『どっこいし』 86
167. 岩田勲 2007 「湖底遺跡調査報告その 2」 『どっこいし』 86
168. 吉朝則富他 2007 『国府町史 考古・指定文化財編』
169. 富山市考古資料館 2008 『富山市考古資料館報』 45
170. 沢田伊一郎 2008 「郡上市大和町竹継薬師堂保管の御物石器」 『どっこいし』 87
171. 沢田伊一郎 2009 「郡上市美並町の御物石器」 『どっこいし』 92
172. 富山市埋蔵文化財センター 2010 『越中と美濃を結ぶ考古展』 記念講演録
173. 吉朝則富 2010 「未報告の御物石器 2 例」 『どっこいし』 95
174. 吉朝則富 2010 「古いねずみ石冠考」 『同志社大学考古学研究会 50 周年記念論集』
175. 吉朝則富 2010 「かつをぶし形石器考」 『光記念館研究紀要自然科学』 平成 20・21 年度号 6号
176. 関西縄文文化研究会 2010 『縄文時代の精神文化』
177. 川口孫二郎 1934 『飛驒の白川村』
178. 下呂町 1954 『下呂町誌』
179. 渡辺賢雄 1967 『板取村の歴史』
180. 下呂町 1972 『下呂町上原誌』
181. 土田吉左エ門 1982 「宮川村出土の御物石器」 『飛驒春秋』 27-8
182. 宮川村 1981 『宮川村誌』 通史編上
183. 石原哲彌他 1985 『馬瀬村の埋蔵文化財』
184. 土田吉左エ門 1987 『飛驒の神社』
185. 吉朝則富 1991 「高山市の縄文時代遺跡 7、中切山ノ下・中切日焼遺跡」 『飛驒春秋』 369
186. 吉朝則富 2000 「御物石器の新例」 『どっこいし』 65
187. 吉朝則富 2009 「飛驒の独鈷石について」 『斐太紀』 平成 20 年度研究紀要
188. 吉見芳孝 1888 「美濃ノ石器」 『東京人類学会雑誌』 4-32
189. 吉田富夫 1930 「第八高等学校蔵 美濃国稲葉郡蘇原村の石器」 『考古学』 11-4
190. 小川栄一 1932 『美濃の石器時代文化』
191. 八幡町 1997 『郡上八幡の文化財とその歴史』
192. 林 魁一 1937 「美濃国全般一先史遺跡高距調査」 『考古学論叢』 4
193. 原 寛 1965 「中津川市周辺における先史文化遺跡について」 『中津川考古学研究会会報』 1
194. 渡辺賢雄 1967 『板取村の歴史』
195. 美並村 1981 『美並村史』
196. 白鳥町教育委員会 1985 『白鳥町の文化財』
197. 郷 浩 1986 『伝説と歴史の谷間』

198. 明宝村 1993 『明宝村史』
199. 橋詰佳治 2004 『岩村町歴史資料館 考古図録』
200. 吉朝則富 2012 『飛驒の御物石器』 光ミュージアム研究紀要 自然科学 7
201. 吉朝則富 2013 「板取地区の考古資料」 『どっこいし』 104
202. 沢田伊一郎 2014 「郡上市白鳥町の御物石器」 『どっこいし』 105
203. 吉朝則富 2017 「富山県の御物石器など」 『どっこいし』 113
204. 吉朝則富 2019 「朝戸高山師図帖閲覧記」 『どっこいし』 118
205. 吉田英敏 2005 『可児市史』 第1巻通史編第1部
206. 林 魁一 1937 「飛驒国吉城郡上宝村石器時代遺跡遺物に就いて」 『史前学雑誌 9-6』
207. 吉朝則富 1994 「異形石棒について」 『どっこいし』 46号
208. 吉朝則富 2016 「飛驒の球頭形石冠考」 『光ミュージアム研究紀要』 第9号
209. 吉朝則富 2018 「飛驒の斧状石冠」 『光ミュージアム研究紀要』 第10号
210. 旧石器・石器部会 2012 「赤谷湖底遺跡調査」 『どっこいし』 101号
211. 富山県埋蔵文化財センター 2012 『浦山寺蔵遺跡 2』 土器・石器編
212. 吉朝則富 2020 『飛驒の山型石冠考』 飛驒考古学会
213. 吉朝則富 2014 「岐阜県の独鈷石」 『光ミュージアム研究紀要』 第8号